
大聖堂騎士団員～イリア・キサラギの軌跡～

楽しんでいます

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大聖堂騎士団員〜イリア・キサラギの軌跡〜

【Nコード】

N6777U

【作者名】

楽しんでます

【あらすじ】

平凡な生活を夢見ていたイリア・キサラギ少尉しかし突然怪物達の襲撃を受け重傷を負うその時、一人の半獣人の少年と出会い彼女の運命は大きく動き出す。

（この作品は昔見た、映画・ゲーム・アニメ・）
参考にしてます。

紹介表示を一部修正しました。

なお、作品に登場する種族・小道具は既に、他の作者様のご許可を
頂いています。

第1話〜プロローグ〜（前書き）

初めて小説を書きました。

これからもよろしくお願いいたします。

一部誤字を修正しました。

第1話　プロローグ

プロローグ脱出

私はイリア・キサラギ少尉この辺境のアルティア第22補給基地所属の情報オペレーターだ。

今この基地は混乱と怒号悲鳴と銃声……そして、化け物の雄叫びに包まれていた……

事の始まりは30分前になる私は仕事を同僚に交代して2時間の休息を取る為に自室のベッドに入った。

ウトウトと眠気が入って来たとき突然警報が鳴り響いた？。

『当基地に所属不明の敵出現！基地職員並びに全兵士は戦闘配置に付け、これは演習に非ず繰り返す……』

スピーカーから非常アラームとオペレーターの声で、眠気が吹き飛ばぶ。

私は直ぐさまベッドから跳ね起き、指令室に向かった。

（所属不明の敵？こんな辺境の小さな基地に……でも出現とはどうい言う事何だろ……）

今は考えても仕方が無い、早く自分の仕事をしなくては私はこの基地の情報オペレーターだ、情報を分析して各部隊に正確に伝えなけ

れば成らない、不正確な情報は部隊又はこの基地や自分を危険に晒すのだ。

通路は混乱していた同僚や顔見知りの兵士達が、慌ただしく走り抜ける。

その時悲鳴と断末魔そして化け物の叫び声が聞こえて来た。

「ば、化け物……きゃあああつ」

「撃てーっ！ぐあああああつ」

人が血激しく吹き出して倒れていく。

「ガアアアアッ！」

「グオオオオッ！」

「グルルルッ！」

そこに現れたのは……

通称：アルマジロタイプと呼ばれる甲殻型のモンスターと人狼タイプのモンスターだった。

（よりによって、アルマジロタイプ……私のオートマチック拳銃じゃ豆鉄砲レベルだ）

「う、うああつ、に、逃げろーっ」

「きゃあああーっ」

咄嗟に私は他の職員達と一緒に逃げ出した。

その後の事は覚えていない途中まで方同僚達と一緒に逃げていたけど逸れてしまったからだ……

今、私は生存者を探しながら、通路を移動していた……

壁に有る非常用の電話を使い、思いつく全ての部署の回線を回したが、誰も出ない……

恐らくエリアを放棄したか全滅のどちらかかだ……

連絡を諦め通路を歩いて行くと顔見知りの兵士が横たわっていた……

「うつ……」

彼は死んでいた……

私は彼に祈りを捧げ彼の装備品を拝借した……正直死人から武器を取るのには気が引ける……だが贅沢は言ってられない……

武器はアサルトライフル一丁：予備のマガジン無し、手りゅう弾一つ：多分彼が一つ使った、そしてアーミーナイフ一本、無線機は壊れていた……

私はアサルトライフルの銃口を下にさげる用に
構え慎重に通路を歩いて行く……

ようやく空き部屋を見つけ、今後の対策を検討する。

案は三つ

1 化け物と戦う

2 生存者を見つけ救助待つ

3 基地から脱出する

私は考えた末に3を選択した理由は一番は愚策だ！化け物の数が多すぎる此処に来るまでに、やり過ぎた数を考えれば十匹・二十匹じゃない恐らく少なくとも三百か五百は居る……

私はゲームや映画の主人公じゃない……ただの情報オペレーターだ。

次に二番これも無理だろう私は前に、強盗を始めて威嚇射撃で撃退した事が有るが一人で化け物だらけの基地から仲間を捜すのは無謀過ぎる。

第一救助が来るかどうかも解らない早くても、もし来ても、二・三日はかかる……到底間に合わない。

私は空き部屋の平凡を慎重に開け通路を警戒しながら慎重に歩いてエレベーターフロアを目指した達を片付けてから、非常用階段で地上（外）に出よう……

そつまるで昔見たホラー映画の世界に迷い込んだ気分だ……

そう結論付けると私は空き部屋のドアを慎重に開けて通路を警戒しながら非常用エレベーターと、非常用階段の有る通路を目指した。

考えてても仕方が無い、私は空き部屋のドアを慎重に開け通路を警戒しながら、エレベーターと非常用階段に向かった。

エレベーターフロア付近で、気配を感じ、身を隠しながら、様子を伺うとやっぱり見張り（？）の人狼が二匹居た。

（まるで彼は軍隊だわ……）

動きに無駄な所が無いそれに襲撃から3時間が立つ。

この様子だとやっぱり、他のエリアは駄目だろう……

まずは地上（外）へ出ようその前にこの見張り達を片付けずける。

私はしゃがんで手投げ弾を転がす用に投げる、激しい爆音と爆風そして辺りに煙りが巻き起こる、二匹の内一匹は虫の息のもう一匹は辛うじて立ってるのがやっとだった。

「うああああっ！」

私は二匹に止めをさし非常用階段のドアを脚で蹴破る。

階段の踊り場にもう一匹が隠れていたが、素早く頭部を撃ち抜く、奴は仰向けに倒れ動かなくなった…。

突然背後に気配を感じ振り向き様にもう一匹を倒した。

「ふう……もう居ないわよね？……」

誰に言うことなく私は一人つぶやいた、私は急いで階段を駆け登る。

「はぁ……はぁ……。」

こんなに走ったのは久しぶりだ……

もう少し訓練を真面目に受けとけばと少し後悔する……階段を駆け登り続けると出口が見えてきた。

「はぁっ……はぁっ……ケホ……ケホ……」

激しい運動に息が上がる私は咳込み呼吸を整える……

身体を落ち着かせ階段を登ろうとした時突然ドアが吹き飛ばす。

「！！」

私は反射的に階段に伏せた。

ドアをブチ破って来たのはまた人狼だった。
いい加減にしてよ……

人狼は腰辺りで両手を広げ雄叫びを上げる。

私は素早く頭部を撃ち抜く。

「ガアアアッ、じゃないわよつ。」

ライフルは今ので弾切れになってしまったので、その場に捨て変わりにオートマチック拳銃のセーフティーを解除して外の様子を伺う。外は地獄絵図だった赤々と夜空を炎が照らし、軍用機や軍用車両が……まるで玩具みたいにひっくり返って炎上していた。

私はトラックの残骸に隠れて様子を伺う……

やっぱり此処にも居る。

魔物の数は全部で8体出まるで偵察をしている
兵士達みたいな動きだ……。

私は気が付かれ無い用に残骸やコンテナ等に隠れながら倉庫区画を目指す、倉庫区画なら多少の薬や食料品がある筈だ出来れば壊れない車両も、残ってる筈だ……

（あお）
蒼き獣王

うつそうとした樹海の中を一匹の蒼い魔獣が駆け抜ける。

その姿は巨大な狼と狐を合体させた容姿だ毛色は蒼い色体格は馬ぐらいは有るだろ。

今彼が向かって居るのはアルティア地方に有る
人間が造った施設だ。

僕は、蒼い獣王と呼ばれる魔獣だそれも普通の魔獣とは規格違いだ。彼の後ろに魔物の大群が後を追って来る……しつこい、お前達等に構って要られか。

彼は後ろの連中を、無視しようと、全力で振り切ろうとした彼のスピードに着いて行けるのはこの世界で条件付きで二・三人位だ。

更に加速しようとした時前の地面が突然盛り上がり中から蟹とサソリを合体させた様な魔物が現れた。

甲殻類の……まあ、ザコの名前なんて覚える必要なんかないか……

元々彼に自分を害する者の名前等を覚える気が無かった、ただ有るとすれば自分が認めた相手か、自分以上の存在か又は自分が認めた相手位だ。

彼はカニモドキを思いつ切り踏み付け跳躍した…グジャリ……。

一撃で奴は潰れたそして何事も無かったかのようにひたすら走る。

「アレは……人間達には無用長物だ……」

彼の真上に人狼達が樹の上から降って来る用に飛び掛かって来た。

「チツ……」

舌打ちすると右前脚のガントレッドの様な脚飾りが光り輝く、そして青白く輝く爪クローが出現したっ、そして身体のパネを使い跳躍する。

「ハアッ！」

人狼達は瞬時に輪切りにされる。

着地すると今度は樹の怪物オークが現れた。

「！？」

いきなりオークは丸太ほどのこん棒を、振り回し襲いかかって来た。大量の土砂と土煙が巻き起こせる。

咄嗟に僕は素早く飛びのく……叩き付けたこん棒を持ち上げ、二度目の攻撃僕はジャンプして奴に向かった、しかしそれが災いした左腕に身体を締め付けられる。

「ぐあああつ！！」

だが奴の顔面に口から魔弾を放つ。

銃弾を撃ち込まれた、カボチャ見たいに頭が弾け飛ぶ魔弾によって粉々に吹き飛ぶオークが仰向けに倒れる。

僕は幸にも前脚が自由だ、ありたっけの魔力を、ガントレッドに送り込む勢いよく刃先だけを腕の付けに飛ばす、そして鈍い感触と共に腕が見事に切断される。

ガントレッドの特長は刃を飛ばす事が可能なのと状況に応じて刃先を変えられる利点がある。

ガントレッドに送り込むこれは小型紋章機関を取り込んだ古代兵器の一つだ使い方はただ念じるだけ僕は斧刃をイメージする……

ガントレッドの先に魔力でできた鋭い斧の刃が出現する。

「斬れ」

勢いよく刃先だけを腕の付けに飛ばす。

このガントレッドの特長は刃を飛ばす事が可能なのと状況に応じて刃先を変えられる利点がある。

関節ごと切断する、僕は腕ごと地面に落下する……幸い高さが低かったのでダメージは少ない。

バチバチ……ジツと言う異常音が聞こえる。

あちゃーっガントレッドに無理させ過ぎたか……

ガントレッドから少し煙りが出たが何処の町で、修理を頼むか……大分骨董品だが、闇で頼めば大丈夫だろう……

首に巻き付けてあるスカーフと一緒に付けて有る袋にある程度路銀が入っているがそろそろ心もとないこの件が片付いたら野宿だ……

第1話〜プロローグ〜（後書き）

少し編集しました。

第2話〈蒼き獣王〉（前書き）

文書表示を変更しました。

描写を一部修正しました。

第2話　蒼き獣王

油断大敵だな……まあ今に始まった事じゃない、僕は魔物達の気配を感じとり素早く向きを魔物達が来る方向に向きを変える、そして狼が獲物に襲い掛かるかの用に姿勢を低くし四本の脚の爪を、地面に食い込ませる。

奴らはよほど死にたい用だ……並ば望みどおり遠慮はしない。

「ブラスト・ノヴァ」

そう叫ぶと口を大きく開け魔力を収束させる、そして二・三百メートル先にいる魔物達の群れに魔弾を放ついや、レーザーとでも言うべきか彼から放たれた魔力の閃光は容赦なく魔物達を襲う。

雷鳴の様な爆音と凄まじい閃光が辺りを包む、爆風と光が収まった後には全長五百メートルのクレーターと魔物達の骸があつた……

かなり威力を抑え放つたんだが……やはり対魔族用に造られただけは有るな……

「もう少し低めに撃つべきだったかな？」

何も知らない第三者がいたら多分……言い訳にしか聞こえ無かつたはずだ……

彼は目的地に向かって走り出した、もう邪魔な魔物は居ない後は目的地まで一直線だ。

見晴らしの良い丘の上から人間の施設を見下ろす……

「カニモドキ10、人狼20、アルジロタイプ10、そして……樹の怪物オークが10か……」

オーク一匹はフェンスの近く早い目に潰すか……

僕はそう決めると丘から一気に駆け降りる、坂を弾丸の用に疾走する、目の前に対魔物用のフェンスが見えて来るこのフェンスは普通の巨大な熊位なら簡単に黒焦げだったが僕には役に立たない。

僕を黒焦げにしたいなら戦艦クラスの紋章機関三つはもって来い。

派手な音供に電流がスパークするが僕にはとっては精々静電気レベルだ。振り返って来たオークの頭をかみ砕く。

騒ぎを嗅ぎ付け残りのモンスター達もやって来る……

さて、人間達に新手と思われ無いように獣人の姿に変身しよう。

僕は体内の魔力を集めると自分の周りに放った。

たちまち白い光と電流が走り僕は片膝を折る用に地面にうずくまっていた。

「まとめて相手をするよ。」

そう言う拳を前に突き出す用に構えるっ、そしてマシンガンの用にあたりたっけ叩き込む。

今ので約半分のモンスター25匹は片ずけた残りは警戒をしていて向かって来ない。

素早く左手を巨大なガキ爪に変化させると僕は死の舞を舞う次々と魔物達がなす術も無く命を散らす……

（向かって来なければ死なずに済むのに何故来るんだお前達は！）

そう僕は今彼等に苛立っていた、心が泣いてるもう……いい加減逃げてくれ……

多分僕の顔から……涙が出てるのだろう……視界が滲む彼等を操る存在に対して表現しきれない殺意が沸いて来た。

余りの理不尽さに虚しくなるが此処で闘うのを止めると死ぬのは自分だ！気が付けば僕一人が立って周りは魔物達の骸だらけだった……

余りやるせなさに遠吠えの様な叫び声を上げていた……

そして僕は倉庫と呼ばれる建物が沢山建って居る所へ向かう何故なら耳に女の人の悲鳴が聞こえて来たからだ、もう誰も死んで欲しくない人間も魔物達も。

そう思うと倉庫に向かって走り出した。

多分これが此処の闘いの最後だろう……さっき嫌な気配は消えた。

アレは持つて行かれたが少なくともまだ生きてる人間に話を聞けるだろう……

姿はこのままの方が都合が良い本来の姿は、特に女の人には不向きだ恐ろしい怪物にしか見えない。

倉庫区画と呼ばれるエリアに付くこの辺りからだったな悲鳴が聞こえて居たのは人の気配がする、此処だな僕は倉庫の入り口へ向かうそこには一匹の人狼が女性の軍人を片足で踏みつけて居た。

僕は奴を睨みつけると走り出した……このままだと彼女は死ぬ……死んでしまう……

不意に頭に忘れかけていた、思い出が浮かぶ……

過去むかしこんな事が有ったな……あの時と同じ経験等二度と御免だ。

奴もこちらに気づき、脚を彼女から退けるそしてこちらに向かって来る。

恐らくこの場の戦いはこれで終わりだろ並ば遠慮は無しだ……彼女が叫ぶ。

「だ、駄目……は、早く逃げなさい……」

無理に声を出して咳込む……

彼女が心配だが今は人狼こいつを片付けるのが先だ。

僕と奴の姿が重なる恐らく彼女には二人の剣士が居合で切り合った様に見えたはずだ。

奴のガキ爪は僕の左頬を掠めて地面に突き刺さる！僕の左腕は奴の

脇腹を貫いていた……

左頬を血が伝う……

人狼の方は腹から血を吹き出し倒れる。

彼女は無事か確認する事にした彼女は気を失っていた僕は彼女の片腕を拾うと傷口に魔力を注ぎ込む……そして次に、自分の半身（端末）を彼女に与える。

人間等の生き物を傀儡にする大禁術……しかし僕のやり方は少し違う僕のは大半の負担を自分自身にかける本来僕は傀儡等必要しなし必要無い。

それから次は彼女の深層領域に意識を沈ませる……

彼女は半分人間では無くなる多分罵倒される……いや怨まれるだろ……当然だ僕にはそれらの責めを負なければ為らない怨まれるのは良いただ……泣かれるのは嫌だ……

そう想いながら僕の意識は闇に沈んで行く……

第2話「蒼き獣王」（後書き）

描写の修正をしました。

第3話〜契約と邂逅〜（前書き）

文字表示を変更しました。

描写を修正しました。

第3話　契約と邂逅

イリア・キララギsibe

私は倉庫区画に無事に着いたとりあえずは13番倉庫に入る。周りを見渡す……

酷い荒れようだ……まるで何かが暴れ回ったようだ……

不意に後ろに気配を感じ振り返るとそこには人狼が居た！

私は銃の引き金を引く。

狙いは、正確にそして奴を仕留めるはずだった……しかし奴は臆する事無く、私に向かって来る時には、フェイントをかけ床を蹴りながら……奴は壁や天井の鉄柱等を踏み台にして襲い掛かって来た。

「！！」

咄嗟に飛びのいてかわすつ。

「ガアアアッ！」

両腕を振り回し襲い掛かって来る、まるでチャンピオンのボクサーの様な、とてもじゃ無いが避けきれない突然腕を床に叩き付ける床のコンクリートが破片を撒き散らす

「キャ……っ」

破片で目尻が切れた、少し血が出ている……

（こいつ……新手だっ、油断出来ない……！）

銃を構え様としその時、奴が……私目掛け飛び掛かって来た。

ドッサ

私は押し倒された！怯まず撃ち返そうとした時奴が、その大きな口を開け噛み付こうとする。

「い、嫌ーっ」

咄嗟に右手で顔を庇う……ガブリと鈍い音が、して凄まじい激痛が私を襲う。

「っ！」

私は声に鳴らない、悲鳴を上げる良く見ると私の腕が、く・い・ち・ぎ・ら・れ・た！

血が溢れ出す痛みで気がおかしく成りそうだ……

（な、ナイフを使って戦わないと……）

次の瞬間脇腹に激痛が走る。

「ガハッ……っ」

もうダメ……意識がボンヤリして来た……

そこに少年が現れた、私は声を振り絞り彼に逃げる様に叫ぶ。
「

だ、駄目……に、逃げて!!」

しかし彼は逃げる所があらうことか魔物に向かって行く。

（ダメ早く逃げてっ。）

私祈った少年が逃げる事を助かる事を……

（う、嘘……）

そこには動かない二人はまるで居合を決めた剣士の様だ……

やがて人狼が倒れる……

そこで私は気を失った

……

（私死ぬのかな……お父さん……お母さん……ゴメンなさい……お二人の分まで長く生きてお二人に会いたかった……それからカール叔父さん……わがまま言っ

てゴメンなさい……もう少し早く軍を辞めて……叔父さんの心配の種に成らない様にしたかった……です少し悔いがあるならお父さんとお母さんの事故死の事もっと調べたかった……穏やかなあの日あの時が懐かしい……あの日に戻りたかったなあ……）

そう想いながら私の意識は闇に墜ちる……そうまるで深い海の様だ

……不意に景色が変わる全く記憶に無い風景だ。

あれはさっきの男の子？それに、あの女のは？

私は彼に近付こうとした……その時だ、いきなり沢山の大人達に囲まれる、そして何かを話してるが解らなかった……

よく見ると周りの人は皆歴史の本でしか見たことの無い服を着ている……

「……！」

「……！」

大人達が何かを叫ぶが、聞き取れない……

そしていきなり目の前が白い光りに包まる。

「眩しいっ。」

目が光りで眩んだが辺りは誰も居ない……

いや先ほどの少年だ泣いている……

「ねえ君どうしたの？」

私は思い切って彼に声を欠ける彼に触れた瞬間誰かの記憶が流れ来る。

これは少年の記憶？

その光景は酷いものだった……彼は何処に行ってもまるで疫病神扱いだ……

あまりの酷さに心が痛む……

何故彼がこんな目に遇うのだろう……どうして誰も……助け無いのだろう……

心が痛い……胸が苦しいそう思ったら、自然に涙が流れて来た……同情ではなく余りの理不尽さから来る哀しみだった……何かの気配を感じ、周りを見ると前方に巨大な獣がいた。

- - 巨大な狼の胴体と狐の頭、私彼を知っている子供の頃、読んだ童話に出て来る魔物だ……

でもそこに立つて居る、彼は怖くなかった……どちらかと言えば、勇ましい聖獣の様にも見える……そして目はとても優しくかった……童話では子供達をさらって食べるとかお姫様を惑わして勇者に倒されたとかそんな話ばかりだ……

彼が近づいて来る……私は彼に近づく……

私は聞くべきでは言うべきでは無い事を言った……

「貴方は地獄の門番？それとも案内者？」

少し心が痛むがそれでも聞きたかった何故ならさっきから私と彼のいや……全てが漆黒（真っ暗）だ……

そんな私に彼は姿をあの少年に変える……

「もし此処が冥界の入口なら僕では無くケルベロスの筈です此処は貴女の深層世界です。」

深層世界？私は混乱して首を傾げた……

少年は話しを続ける。

「貴女はまだ死んでいません、現実の貴方の傷を治して僕の方からこちらに出向きました。」

私はキョトンとした私はまだ混乱して居るのが面白いのか彼は少し苦笑する。

何がそんなに可笑しいのだろうか？私は少し苛立つると彼は少し心申し訳なさそうに私に謝りだした。

「済みません貴女がつい訳が解らない顔をして居たので。」

「別に構わないわ……逸れよりも何故こう成ったのか教えて、蒼き獣王……で良いんだよね？」

少年は驚いた顔で私を見る……正直にカワイイと思った。

「すみません、貴女と契約をしたいのですが……」

契約？何で……私何かと？

「実は……貴女の怪我が……」

（そう言えば……現実の私の状態忘れてたー！！）

「す、ストープ、お願いだから……それ以上言わないで……」

これ以上聞いたら卒倒する……こんな少年の前で倒れたくない……

「ご、ゴメンなさい。」

彼は少しびっくりして私に謝ってくれた。

「私の方こそごめんね突然大声なんか出して。」

少し慌てた私の方が恥ずかしい。

「では良いですか？」

彼が私に問うでもその前に聞かなければ。

「何故私なの？」

一言そう告げる。

彼も一言。

「貴女の心は常に平穏を安息をそして大切な人々を想い続けていました。」

彼も私の心に触れたんだ……

なら、おあいこだ……迷う必要なんか無い……

「我が名はフェリオ！汝の中の心に問う！」

私も応える

「我が名はイリア！我も汝に問う！」

「我が二人、想いは同じ共に永久の安息を共に求めん！」

「これで契約は終わりです……マスター。」

（貴女は戦い向かない人だ……僕が護りますマスター。）

「マスターて何だか、／＼／＼少し恥ずかしいな。」

（フェリオ君は戦っては、ダメ……私が変わりに戦う！）

二人のそれぞれの想いに二人は気付かない。

「何だかとても眠くなつて……来たよフェリオ……」

急な眠気にその場に倒れる……

「それは僕も、同じですマスター 魔力をお互いに、使いすぎましたから……お休みなさいマスター。」

（フェリオ君……お休みなさい……。）

そして今度こそ私は深い眠りつく……

第3話　契約と邂逅（後書き）

- ・から…に変更しました。

第4話〜救出〜フェリオの過去〜（前書き）

読みにくい表示を修正しました。

描写を修正しました。

第4話　救出　フェリオの過去

エイの様な空中強襲揚陸艦が二隻アルティア第22補給基地に向かって飛行を続けていた……

既に壊滅の報を聞いて、二日がつっていた……

強襲揚陸艦「ブリジッド」

ブリッジ内ー

「こちら強襲揚陸艦ブリジッド、大聖堂騎士団第1騎士団聞こえますか？」

オペレーターの声に無線が応える……

《こちら、第1騎士団基地内部は我等が制圧した！繰り返す……我等が制圧した》

「了解……指定の着地ポイントの状況はどうですか？」

《第二滑走路に向かわれたし……》

「第1滑走路では？」

《駄目だ、第一は損害が酷くて使え無い……第二に回ってくれ……》

「了解、第二滑走路に向かう以上。」

艦長を見るオペレーターそして若き艦長は指示を出す艦内が慌ただしく成る。

金髪の髪と整った顔立ちそして目付きが鋭い彼はヴァルゼラート公国軍特殊作戦実行部隊「ブラッド・フェリル」の指揮官レナード・ウオード少佐だ彼は冷徹で合理主義者だ。

「魔物^{モンスター}は騎士団（化け物）にでも任せるか……化け物同士、気が会うだろ……」

彼はそう呟くと煙草を吹かす……

やってられん、今は化け物にこだわる理由が無いのだが……、多民族と共存50年欧州大戦の性で軍縮？

結局……国王（上）は分かってい無い……所詮は力が有るものが国を世界を制すのだ。

取り敢えずは急ぐ、事は無い慎重に確実に目的をこなせば良い……

- -ブリジット格納庫 - -

ハンガーデッキに騎士団員の少年がいたくせつ毛の緑の髪と青瞳の少年だ、騎士団員候補生の貴族の礼装を軍服にした様な水色の制服を着ている。

誰かが近づいて来る。

規則正しい足音が近づいて来るポニーテールの白衣の少女が近付いて来る。

レナード・ウオード少佐の妹で大聖堂騎士団モンスター被害調査部のリフィア・ウオード准尉だ、彼女は少し咎める口調でルースを呼ぶ。

「ルース小尉！」

全く……好きな戦車と来れば、仕事そっちのけ何だから……もう……

「ハアゝっ、ルース・し・よ・お・いつ!!」

私は思いつきり彼を怒鳴り付ける……

全く……戦車マニア何だから……もういくら最新式の零式が騎士団に配備されたからって。

ルース・ファルクside

ん、フィリアが何か怒鳴ってるがそんなの零式の前では聴こえない振

りだ！

零式は現在最新式の可変式機動戦車だ、H型変形フレームを採用し凸タイプの上ボディそして両側に腕型のビーム・ガンを装備「ちなみにオレのは30ミリバルカン砲」を装備している、コクピットは戦闘機の様な流線型だ。

タンクタイプの全高は6・5メートル、

デストロイタイプは7・9メートルだ、

全長は18メートルで変形時間は4・5秒だ

主武装は177ミリレール・キャノン又は大口径ビーム・カノン」作戦に応じて換装可能」そして180度の旋回が可能だ。

コクピットは最新式の戦闘機を採用しハッチはモニターになる個々まで来ると、ロボット兵器の部類だがカテゴリーは機動戦車なのが残念だ…。機動性を忘れていたな？デストロイモードは時速180キロでタンクタイプは時速350キロだ。

んゝそれにしてもカラーリングも良いホワイトカラーでハッチはライトブルーだ。

大聖堂騎士団に去年正式採用されたばかりだしなうん、うん、良い戦車だ。

（これは戦車のカミサマの導きだな）

「もう、ルースき・い・て・い・る・の・！」「」

うおっ！耳元で怒鳴るキーンと彼女声が頭に響く片手で耳を抑え振り返るとソコニは……魔王化したリフィアが立っていた……（怒）のオーラが見える……周りの視線がイタい……此処は素直に謝ろう……

「わりい、零式に見とれてた」

彼女は少し機嫌を治した。

オレは彼女に用件を聞く事にした。

「それで、ただ怒鳴りにだけじゃ無いんだろ？」

「ええ……降下地点第二滑走路に変更だって……」

第二滑走路に変更？目的地点から、かなり遠くなったぞ騎士団の先発隊の援護どうすんだよ？

多分オレの考えてる思いが顔に出たのだろう。

彼女はオレの疑問を一気に吹き飛ばす事を口にした。

「うん、何でも……先発隊が来たときほとんど居なかったんだってそれで、すぐ片ずいちゃたんだって。」

何だそりゃそーだ！折角零式で無双してやろうと思ったのに……

アラームがけたたましく鳴る。

二人「「?!」」

突然アラームがなる……どうやら無駄話は此処までだな。

《零式パイロット及び調査員は各車に搭乗せよ！繰り返し……》

「それじゃ、リファイあとでな。」

「ええ、また後でね」

そうやってオレ達は配置に着くさて行くぜ相棒。

そうやってオレは零式の機体に掛けて有る梯を登りハッチを開け、コックピットシートに座りハーネスで身体を固定する……

素早くコンピュータを起動させキーボード叩きプログラムを始動させる。

「火器管制……チェック……バランサー……チェック……全システム・オールグリーン。」

マニュアル通りにシステムを起動させる……

「オペレーターこちら、ウルフ1どうぞ。」

通信回線を開きオペレーターと交信を開始する。

《これより零式及び調査班は予定道理、担当ブロックの調査を開始して下さい。》

「了解、残存戦力はどうですか？」

《周囲に残存戦力は認められず、また地下施設にも少数確認されたが、騎士団によって殲滅を確認。》

「こちらの任務は？」

《調査員達の安全を優先して下さい。》

「了解。」

しばらくして鈍い衝撃が伝わるどうやら無事着いたらしい。

「こちら、ウルフ1ハッチ解放願う！」

《これよりハッチ解放する、各小隊健闘。
グッド・ラック》

そしてハッチが開かれる強襲揚陸艦から次々と零式と装甲車が吐き出される。

「これより、倉庫区画の調査隊の護衛に就く。」

オレの零式を初め計3台が調査隊の乗る装甲車の護衛に就く……外部モニターに注意しながら第13倉庫に着く……

《こちらフェリックス4、ウルフ1聞こえますか？》

「どうした？フェリックス4？」

索敵モニターを見ながらオペレーターの報告に耳を傾ける、索敵モニターを見ながらオペレーターの報告に耳を傾ける……

《生命反応が、二人分確認されました。》

生存者が居た！オレ達ははその報告に正直驚いた。

「直ちに救助を、それと臨時司令部に連絡を。」

《了解、》

調査班と護衛隊が装甲車から出てくる、リフィアもそれに着いて行く。

「リフィア気を付けろよ。」

《うん、気を付けるね》

《ルース、お前のお姫様はちゃんとエスコートしてやるよ。》

「ば、バカヤロ／＼」

《うふふ……じゃあ行ってくるね》

たつく……あいつら、幾ら周りが知ってるからって軽口にも程があるぞ……プライベート回避だったから周りに聞かれ無かったかもな。

リフィア・ウオードsipe

私を含む調査班は倉庫に入る酷い……まるで中は嵐が来た跡みただったライトを当てながら奥に進むと何か人影が倒れていた……よく見様と近付く……

「ヒッ……っ。」

誰が倒れている……慎重に近付く……私は思わず声を漏らす、そこには人狼が倒れていた、しかも鋭い刃物で脇腹を斬られている……

お、落ち着け私……でも怖いし少し気持ちがわるい。

資料等で散々見てきたが実物はやはり気持ちの良いものではない……

奥に人影？！しかも二人慎重に近付く……そこには、半獣人の少女が女性士官と一緒に倒れていた意識が有るか調べ用としたら……その女性^{ひと}は私がよく知っているひとだった……

「い、イリアさん！？」

「う、うん。」

半獣人の少年が声を出す……

私は駆け寄り二人の意識を確認する……良かった、二人共生きてたそして。

イリアさんの怪我の具合を、確認しようとする彼女の右腕の変化に気付く右腕は、黒紫のよく解らない物で腕の間接間で埋まっていた……破けた服の右肩には蒼い宝石見たいな者が埋まっていた。

「至急救護班を、要救助者は二人、一人は蒼い髪の半獣人の少年年齢は10才位もう一人は20才位の赤毛の女性、なお女性は変異体の可能性が有り、急いで下さい。」

変異体……稀に報告される異常事例だ……たまに怪物に襲われ身体が変化する普通のモンスターならこんな事は起きない……だが、危険レベルSかAクラスは確実にこの変異体に成るそう成ったら、もう……助からない例え助かってても自我は失われる……稀に10年位自我を保った者いたが治療法は見つかっていない精々変異を抑える抑制剤位だ、私はイリアさん事を姉の様に慕っていた……兄と別れた時はショックだった……あの出来事は兄の自業自得だ……今はそんな事を思い出したくない……嫌時に嫌事を思い出す……自己嫌悪で気が滅入る。

イリアさんが助かった事を今は喜ぼう……

やがて救護班が来てイリアと少年を治療センターに運んで行った、私は今は自分の仕事をする……将来は医者に成りたいのだ変異体の治療法を見つけるそれが私の今の目標だ。

イリア・キサラギ side

『……ア』

『……リア』

誰かが私を呼んで居る……。

「「イリアー!!」」

「うゝんっ」

目を覚ますとそこは草原だった……わ、私やつぱり死んだの？

目の前に女の子が、立って居る私より4・5才年下だ、栗色の髪に緑の瞳の可愛い女の子がいた彼女は……確か……。

フェリオ君と一緒に居た女の子だ！

「ふう、目覚めないから駄目かと思った」

え、駄目かと思った？どうしてだろう……

「貴女が、倒れてからもう一ヶ月経ってるの」

えーと、一ヶ月……一ヶ月……いつかげっつ？何て事だ……

私はこの一ヶ月深層世界で眠っていたんだ……

一つ、彼女が私の前に居る事。

二つ、風景が目茶苦茶だ、空に家が浮いていたり足元が地面に着いていない。

そして最後の三つ目は。

空が無いこれだけ揃えば嫌でも現実出はないと知らされる。

「おはよ、イリア。」

少女が話し掛けて来るが私には誰だか分からないまずは自己紹介がさきだ。

「初めまして私は……イリア・キサラギ少尉です貴女は？」

「私はアイリスと呼んで。」

「分かったわ、アイリス。」

「余りお喋りをしてる、時間が無いから単刀直入に言うわ。」

彼女の雰囲気から余り良くない、状況だと直ぐに分かる。

「そう言う悲観的な物じゃ無いわ。」

違ったの？てつきり契約に失敗したと思っただけど……

「貴女とフェリオの契約は成功よ、ただしフェリオの魔王としての力が貴女に流れてるから……」

フェリオ君が魔王……せめて獣王とかじゃないの
あんなに可愛かった少年の顔が浮かぶ……

（シュールだ……）

「そこいきなり落ち込まない！」

「は、はい！」

咄嗟に飛び起き姿勢を正して敬礼する……軍に居たから反射的に身体が反応した……

「うん、宜しい」

まるで教官だしかも（鬼）がつく……

「それは、置いとしてフェリオは貴女に負担が、掛からない様にしてる……つまり貴女の右腕が自分と同化しないように。」

「！？」

成る程道理で納得した、フェリオ君が私と契約した時フェリオ君も眠ってしまった……

「それで、貴女はどうするの？フェリオの力<魔王の片腕>を使う？」

「……はい、使います。」

「その力を使えば、貴女が貴女で失くなる……」

彼女は私に真剣な眼差しで見つめて来る、まるで命を棄てる覚悟が有るのかと……私も真剣な眼差しで見つめ返す……

「分かったわ、貴女が……貴女の事がフェリオと同じ……まるでフ

エリオのお姉見たい……」

私がフェリオ君のお姉さん……

「貴女の考えが外に出てる。」

「／／／……」

「言い忘れてたけど貴女の体質は変異体への適正が有るから。」

「適正……じゃ私が化け物に成らないと？」

「YESでも有るしNOでも有るわ」

「……………」

「ただ……フェリオが怒るかな？だって貴女を護りたいで、言つて
だから……」

どういう事だろう？

彼女は彼のもう一つのフェリオ（そんざい）だろうか？

「そんな、大袈裟な物じゃ無いわただ昔彼に食べられただけ……」

彼女は凄く哀しそうに顔の表情をする……私は、勇気を出して理由^{わけ}聞いた。

「そ、それって、どう言う事？」

「そのままの意味よ、イリア彼は私を私は彼を護ろうとした……でも私は、大怪我をして死にかけていた……フェリオは必死になって貴女と同じ様に助け用としたけど……魔王の力が暴走して私を飲み込んだの……私が私を保ってられるのは、フェリオがそれを拒絶してるから……」

私は黙って彼女の話を聞いていた……そして自分には無い選択肢を聞いた化け物に成るのが恐くないと言えば嘘だ、現に話を聞いて震えてる自分が情けない……

「も、もし彼が、私が闘わないと決めたら……？」

「そうね……二人揃って彼に殺されるわ。」

「殺される……誰に？」

「空を制する者……」

「？」

体誰の事なのだろ……私はますます訳が解らなくなった……

「いずれ、解るわ……。」

アレ何だか……視界がぼやけて……来た……

「そろそろお目覚めの様ねまた、合いましょ……イリア……」

体誰の事なのだろ……私はますます訳が解らなくなった……

「いずれ、解るわ……」

アレ何だか……視界がぼやけて……来た……

「そろそろお目覚めの様ねまた、合いましょ……イリア……」

そして私の意識は暗闇に墜ちる……

第4話 救出 〳 フェリオの過去 〳 (後書き)

描写を修正しました。

作品のネタ・シーン紹介（前書き）

表示ミス直しました。

作品のネタ・シーン紹介

セリフ描写及び脱字を修正しました。作品の説明が不足していませんでした。

大変申し訳ありませんでした。

この作品には数多くのネタを入れて有ります。

普通に書くと暗く成りますので。

遅れましたがいくつかのシーンの元になった。

ネタだけ紹介します

1：第一話・バイオ・ハザード・パラサイト・イヴ
(ゲーム第一作)ストーリー序盤

2：第2話：ターミネーター・フェリオ変身シーン
ガンダム：台詞：ノリス

3：零式：ガンヘッド

説明がおくれ申し訳ありませんでした。作品の説明が不足していませんでした。

大変申し訳ありませんでした。

第5話〜日常との別れ〜（前書き）

表示変更しました。

誤字等を修正しました。

描写を修正しました。

第5話〜日常との別れ〜

フェリオside

今僕は病院にマスターと二人で病室に居る……

マスターは、この一ヶ月眠ったままだそれは良いんだけど……僕は散々検査を、させられた挙げ句……僕を病院の託児所に預ける何て言う始末だ。

だから暴れてやった（手加減して）大体僕は獣王なんだぞ！それなのに……注射器された……痛くは無かった……でも注射は嫌いだ……でも騒ぎを聞き付けた、リフィアて女の子に宥めて貰ったしかもアイスまで、おごって貰ったしばらく10才の子供で通をそうかな）

「失礼……する。」

ドアの叩く音くがする誰か来た様だ……

「はい、今開けまーす。」

僕は、子供らしく振る舞う事になっている、この方が何かと都合が良いのだ、ドアに近づくと白衣の女の人が入って来た……

（先生かな？……）

彼女は、マスターの変異した腕を見て、何かの書類にボールペンで文字や数を書いていく……

人仕切に、マスターの様子を見た後僕のガントレットに目を向ける……

（病院の先生なのに武器にでも興味あるのだろうか？）

僕が、そう思っていると先生はガントレットを手にとってアレコレと調べる……

（あのーっ、それ僕の何ですけど……）

「フム……外装は形状記憶で……素材は……」

物凄い……年代物なのに、初見で解っちゃった！？

「小型紋章兵器機関……逸れも初期型だと……？」

本当に病院の先生かな？でも声かけるの恐いし……目が……獲物を仕留める前の僕……並何だけど……

「かなり、無理をさせているな……フレームや動力部がショートしている……相当手荒く使ったな……」

失礼にも程があるよ、この人は……（怒）僕は思い切って声をかける。

「あの何か、ご用があるですか？」

恐る恐る聞いてみる……

「なるほど……これは、【ギガ・ガレット】だな？」

す、凄い10分で僕のガントレットの名前あてちゃった……

「これを……清音に見せたらフフフッ……」

何か勝手に、話進めてるーっしー！！こうなったら無理にでも止めてやる。

「ソレ……僕のです……オバサン……」

僕はボソボソと呟いた……

「誰が……お・ば・さ・んだって、し・よ・う・ね・ん？」

（やばっ、女の人に言っではいけない言葉が有るって森の長老様、言ってたっけ……）

僕は直ぐに先生に謝った。

「お姉さん御免なさい。」

すると先生は急に、笑い出した何が可笑しいんだろう。

「プツ……はははっ！うん、うん、素直だな少年。」

へっ……怒ってない。

「フ……少しからかっただけだ……」

そうですか……

「フ……私は、カレン・ノアだ。」

「フェリオです。」

自己紹介を済ませる。

そして、彼女は本題を切り出した……

「所でこのギガ・ガレットだが……何処で手に入れた？」

彼女の目付きが更に鋭くなった。

「……拾いました。」

（自分の物なんて、絶対に言えない……直ぐに僕の正体見破りそうだし。）

「ほう……君は嘘をつく悪い子か？少年。」

見抜かれてる……本当の事を言おう、それに彼女も先生じゃ無いみたいだ……

「ソレ……僕のです……」

「やはり……な、君は正直に話した次ぎは私の番だ私は、騎士団の

変異体及び、紋章兵器機関の研究主任をしている。」

騎士団関係者……！？

「そう、驚く事も有るまい少年？」

彼女は話しを続ける。

「君が、蒼き獣王と呼ばれる魔王だとしてもな……」

「?!」

無意識に殺気が溢れる……

「そう、いきり立つな第一私は丸腰だぞ誇り高い君と話しが出来るだけ有り難いと私は思ってるが？」

彼女は僕の目を見つめて話しかけて来る。

「君のギガ・ガレットだが私に預けてくれないか？」

「あれ以上の紋章兵器なら世界にかなり有りますけど……。」

僕もギガ・ガレットがもう骨董品レベル位の価値しかない事を知っている……

「確かにもうこれは骨董品だ、だが数少ない名工の一つでも……有る私に一時的に預けてくれないか？今よりは性能を上げられるが？」

僕は殺気を抑え彼女に目的を聞く事にした……

「何が……目的です？」

「対魔神用の格闘兵器をスクラップにするのはもったいないからさ……」

彼女は嘘はついていないが……どうしよう？

「私に預けてくれれば今以上の性能にしてやる。」

「……見返りは？」

見返りに無しに学者が提案すり訳がない……

「君は慎重だな……コレを元に新型武装を造りたい君にはそのモーターをしてもらおう……」

「他には？」

「いや、特に無い君が動きやすい用に君のデータを改竄してやる逸れでは不満か？」

「……解りました引き受けます。」

僕の答えに納得したんだろ……カレンさんが病室を出ようとする……
…思わず僕は彼女に問い掛ける。

もう殺気は消えていた。

「……データは今から改竄してやる君は彼女の側に居てやれ。」

逸れだけカレンさんは言うとは病室を出て何処に行ってしまった。

（不思議な人だが悪人では無いだろ……とにかく良く分からない人だった……）

レスター・エルストン side

あいつと待ち合わせしてかれこれ2時間かな？逸れにしても……遅い幾らな何でも遅すぎだろ。

逸れにしても、うゝん良い天気だ空は晴々してるし、白鳩は空を舞う……これが仕事じゃあ無けりやなど。

だいたい、さつきからカップル達の視線がイタイ此処はこの時間はカップルやビジネスマンとかの憩いのオアシス何だぞ。

取り合えず注文したコーヒーを飲むか……うん美味しいあいつ何かと話し合いじゃ無けりやもう少しマシ何だか……

レナード・ウォード side

さて2時間ばかり遅れたが……奴は来ているな。

店員がマニュアル道理の対応をして来る俺も愛想良く返答する。

奴は一番奥の席で待つて居た取り合えず、注文をして店員を追い払う。

「待たせたか？」

「待つたとも……お前じゃ無けりや、もう少しで帰る所だ。」

と皮肉のやり取りをする奴は、昔からこんな男だ。

「お前とは正直気が合わんさっさと用件を済ませよう。」

（同感だ……俺もお前が、好かない。）

持つて来た鞆からファイルを出す……全てあの襲撃事件の資料だ……

さて美味しく喰い付いてくれよ……こちらは様子を見るだけだ。

奴は真剣にファイルを見て、いくたちまち顔が険しくなる。

「アルティア第22補給基地襲撃事件ファイル、？・23635…
…イリア・キサラギ少尉」

気付いたか？流石だよ……大聖堂騎士団局長……

「お前……正気か？」

険しい表情で、睨み付けて来る……

今にも、殴り掛かって来そうな雰囲気だ。

「落ち着け……客見ている。」

「……チツ。」

レスター・エルストン side

相変わらず、涼しい顔で居られるなお前……

もう少しでコイツに一発見舞ってる所だふう……逸れにしても大した奴だわざわ人の多い、しかもランチ・タイムで賑わうこんな場所を指定してきたか……侮れん。

「俺は、悪役に成るつもりは無い。」

「で……彼女の件だが……ラボが欲しがってる。」

ラボと言うのは、変異体の研究及び実験をしている、何でも有りのマッド達のたまり場だ……建前上は【変異体被害者の治療と研究】が目的と謡っているが……はつきり言って、係わり合いに成りたく無いだろ、まっとうな連中は……

「お前の目的の為か？」

「想像に任せる……しかし連中にくれて、やる気は無い。」

「……。」

となると……大聖堂騎士団つまり俺達か？

「お前達に、彼女を頼みたい」

そう来たか……全く嫌な奴だお前は……

「構わないが、一つ確認するラボはどうする？」

「既に説得済みだ。」

成る程……既に決定してるって訳だ。

「解った……。」

今日の最大の収穫は、やっぱり俺はお前が嫌いて事か……

「話しは以上だ。」

はつきり言ってやるか。

「やっぱり俺は、お前が嫌いだ。」

「そうか……。」

そう言つて席を立つ……彼女の所に、その意志が有るか否か聞かないとな、奴は彼女の前に現れる俺だと修羅場に成る、なそう思い携帯のに連絡する……【彼女】に任せよう多分女性同士気が、合うだろう。

イリア・キサラギSide

今病院には見舞いに来てくれた、リフィアと【腕】の検査と体調のチェックをしている、レイラさんそして心配そうに、私を見つめる、フェリオ君の三人だ、今のところ特に検査で悪い所は結果無かった。

ただ困つた事に、リフィアが、あの噂話をまに受けてる事だ……彼女欠点は怒りに火が着くと、歯止めが無くなる事だ。結局落ち着かせるのに30分は掛かった……

（カレンさんとリフィア逸れにフェリオ君まで……ハア……）

多分彼女達の中で、対少佐連合軍が結成されてるその時だ病室のドアがノックされた。

「失礼する。」

「今はしょ……」

少佐は入らないで、下さいと言おとしたら三人共顔が陰しくなってる……

「ほお……これは、ゴアイサツだな？」

（今核心しました、少佐の女性運は最悪です。）

レナード・ウオードside

何だか…知らんが愛想が悪いぞ……お前等、妹を始めそこには大聖堂騎士団のマッド女に。

報告に有った、獣小僧……そして彼女が居る。

「兄さん、何の御用ですか？」

いくら俺を毛嫌いしてるとは言え、その対応は無いぞ妹。

「フ……来たな女の敵」

お前に言われたくない、マッド女。

「マスター僕は、この人が嫌いです！追い返しましょう！」

野性の勘か？獣小僧。

「わ、私は大丈夫です……皆さん。」

ほう……これから、お前に、残酷な二択をもって来たのに随分気丈になったな。

「私は彼女に話をしに来ただけだ。」

「「……。」」

どうやら、納得してくれたか。

「フ……地獄に堕ちろ女の敵。」

その言葉そのまま返すマッド女。

「何を、企んでるか知りませんが……恥の上塗りです。」

……流石は俺の妹だ、勘だけは鋭い。

「マスターを泣かせたら承知しないからな!!」

黙れ獣小僧。

さて邪魔者が消えた。

「君に殴られて以来だな……」

取り合えず、皮肉の一つでも言っておくか……

「そうですね……でも、あれは……ついカツとなって」

そして彼女は顔を伏せる。

「まあ、別に構わないが……」

あの事件は、彼女の両親の事故死に有る俺も、色々調べたが、解つたのは空中貨客船が爆発事故を起こした事だ、原因は不明調査しようにも肝心の船が木っ端みじんに吹き飛び残骸は、破片だけだった……

その時彼女は、まだ学生だったな……問題は、その後だ時の現場を同僚に見られた事だ、お陰で色々噂話が有った。

「今日は、君に二つの選択肢をもって来た。」

手っ取り早く、彼女に説明する二つ地獄を用意したから、好きな方を選ぶ……と。

「詰まり私に、モルモットに成る方と戦闘マシンに成れと言う事ですか？」

彼女の声に怒気が、含まれる……前髪が顔に掛かって良く表情が見られない。

その時邪魔が入った。

「大聖堂騎士団特務騎士隊フェンリル・ナイトの者だ、入室の許可を願えないだろうか？」

「……チツ、」

思わず舌打ちがでた……

（マッド女の次は狼女か）

「は、はいドアは開いて居るのでどうぞ……」

ドアが、ゆっくりと開かれる。

イリア・キサラギSide

病室に入ってきたのは、私と同年か、少し年上の騎士だった……

蒼い色の軍の礼服を、戦闘用にした、感じの制服と白いマントを羽織っている、髪の毛は腰の所まで伸ばした赤毛だ顔も、かなりの美人だ耳が少し尖ってるハーフェルフか半魔人だろうか？

「何の用だ？狼女」

病室に恐い、緊張感が走る少佐は敵意を剥き出しにしている。

「此处は、病室で在って貴様の狩場ではない……」

女性の目付きが鋭くなる。

「……とにかく用件は伝えたぞ少尉。」

そう言つて、踵を返して病室を出ようとする女性と目が合う……

（ふん、狼女め……）

（……血まみれの猟犬。）

お互いに、鋭い視線を交わし少佐が病室を出る。

「済まない、嫌な思いをさせてしまったな……申し訳ない。」

彼女が私に謝罪する。

「い、いえ……気にしていません……」

彼女は私の前まで来ると敬礼をする。

「大聖堂騎士団特務騎士フェンリル・ナイト騎士隊長サラ・フェンリルだ。」

正直驚いた、大聖堂騎士団の最強部隊の指揮官が私に会いに来るなんて。

「私は……」

「いやそのままで、私のはただの、形式見たいな物だ、逸れより座つても良いだろうか？」

私が敬礼をしようとしたら、サラ將軍が逸れを遮る。

「どうぞ、おかけ下さい。」

「有難う。」

サラ將軍が病室の椅子に座る。

「怪我の具合は、どうか？」

「お蔭様で、大分ましになりました後2週間で退院出来るそうです

……」

「それは良かった。」

しばらく、彼女と何気ない会話が、続いたが彼女は、おもむろに本来の用件を切り出した……

「此処に來たのは、君に大聖堂騎士団の入団希望申請書と異能者保護申請書の二つを、渡す為に來たんだ。」

騎士団入団希望申請書は文字通り、大聖堂騎士団に入る為の物だ、そして異能者保護申請書は特殊能力に目覚めた、ものの使う必要性が、無い人達が保護を求めるのに必要な書類だ。

「いきなりで、戸惑う気持ちも解る……」

「自分の立場は、良く分かってます……少佐が教えてくれました……」

私は投げやりに答える……

彼もそして、騎士団も本当は私とフェリオ君が欲しいのだろうか……

「それは心外だな……」

「えっ……」

彼女の……サラ將軍の意外な呟きに、正直驚く……

「確かに我々は化け物集団だ、しかし我々は君達二人とも、単なる（力）だけの存在だと思っていない」

「もし、君達の（力）だけ必要なら無理矢理連れ去ればいい……違うか？」

「……済みません」

「謝らなくても良い」

普通なら『ふざけるな！』と怒鳴られたかも知れない……しかし彼女は寛大だった……

「失礼を承知で、お聞きします何故？私何かに此处まで接して下さるのですか？」

「何故……か、それでも私の耳は良く聴こえるのでなああの猟犬が、二択しか無いと言っていたのが聴こえた……それは奴の思い込みだ、誰にでも選ぶ選択肢は有る……違うか？それに君は君だ自分自身の意志で決めなさい。」

「……そうですね」

「そうだ、だが最終的には君の判断で決めるんだ……自分の意志で戦うか、戦わ無いかだ。」

「……」

「もう一度だけ言おう、急ぐ必要無い……ゆっくり考えて決めなさい。」

優しく、諭す様に言葉をかけられた。

「肉親に、話し手も宜しいので？」

「構わない、良く話し合って決めなさい。」

「有難う………ごじます。」

私は彼女が帰った後少しだけ泣いた……

それから二週間後、無事病院を退院した。

私は今フェリオ君と一緒に叔父さんの家に向かっている。

カール・フォートフェルト。

そう……今となってはたった一人の叔父さんだ。

私が4才の頃、両親が事故死空中貨客船の爆発事故らしい……事故原因は不明……それから、暫くしてから、叔父さんに引き取られた。叔父さんは、私の母メアリー・フォートフェルトの母のお兄さんだ、顔は余り母に似ていないでも叔父さんは、私を実の娘の様に可愛がつてくれた。

私を此処まで、育ててくれた、叔父さんには感謝している。

やがて、叔父さんの家に着いた、玄関のドアの呼び鈴を鳴らす。

「誰かな？」

久しぶりに、叔父さんの声を聞く、実に2年ぶりだ。

「私ですイリアです叔父さん。」

「おおっ、イリアか久しぶりだな……無事で良かった。」

（余り無事じゃあ無いんだけどね。）

「？……どうした。」

顔に出たのだろうか？叔父さんが私を心配して顔を覗き込む。

「な、何でもありません。」

と誤魔化した……

フェリオSide

マスターと一緒に、住宅地の中を歩くと、一軒の家が見えてきた、マスターがドアの呼び鈴を鳴らすとら中から中年のおじさんがドアを開けて出て来てくれた。

マスターの話し方からこのおじさんが、マスターの話していたカルおじさんだろう。

「家の前で、立ち話も何だ中に入りなさい。」

「はい。」

「お邪魔します。」

彼と目が会う。

「ほう……イリア何故早くワシに言わなかった？」

僕の顔を見るなり、おじさんが、マスターに少し意地悪そうに話し掛ける。

「な、何ですか？叔父さん。」

マスターが、少し慌ててるとうしたの？だろう。

「ワシに内緒で、我が子の紹介か？して相手は誰じゃ？」

（あ、あの僕はマスターの子供出は有りません……）

「／／／……叔父さんの……バカ……」

「ワハハハハ！そうじゃな！お前がそんな娘と違うのはワシが、一番良く知っている。」

「／／／……つ。」

あわわわ、ま、マスターマスター 落ち着いて下さい。

マスターは顔を紅くして家に入って行った。

「全く、ユーモアもまだまだじゃな。」

おじさん、それはただのセクハラでは、無いでしょうか？

「所で、君の名は？」

「フェリオです、おじさん。」

「ワシは、カールじゃよろしくフェリオ君。」

カールおじさんが僕にそう話し掛けて来る。

「さて、我が家によっこそフェリオ君。」

「お邪魔します。」

そうして僕はおじさんの家に入る。

家の応接間に通されるするとマスターが。

「叔父さん、キッチン借りるね。」

「構わんが、折角来たんじゃから、たまには外食でもせんか？」

「どうせ、オールレトルト何でしょ？だったら、私が作るから、少し待ってて」

「判ったでは……お言葉に甘えとしよう……」

（おじさん、マスターの手料理を食べるのが、嫌なのかな？……）

「フェリオ君。」

「何でしょうか？」

「覚悟するがよい……」

おじさんの顔が少し引きつる……もしかして……

「失礼ですが……マスターの手料理で……」

「ウム、以前よりは上達したと想いたい……」

「……」

マスター僕……頑張ってマスターの手料理食べますね…

祖の後……マスターの料理は何とか完食できた……ただ何故、あんなに塩気がきついのだろうか？

……見た目は凄く良かったのに……

何とか食事を終えた、でも辛かった……マスターの顔を見ると、とても食べられませんなんて言えないあんな笑顔にそんな事言えない。

一段落ついて、おじさんが騎士団について口にする。

「のお、イリア……騎士団についてじゃが、お前に聞きたい……」

「何でしょう、叔父さん？」

マスターとおじさんの間に緊張感が漂う……おじさんは、マスターが騎士に成る事に、反対なのだろうか？。

「覚悟は、出来るんじゃない？」

「はい……」

重い空気が流れる……時間を置いて、おじさんがゆっくりとそして優しくマスターに話掛ける。

「お前が、決めた事に口は挟まん……が騎士団について、説明せねばならん騎士団に入るからにはお前もそしてフェリオ君も、常に命の危険に晒される……ワシも若い頃入るとしたが一ヶ月でリタイアした……今までの経験など、全く無意味なんじゃよ……」

「……」

「……」

僕達は、おじさんの話を聞いて黙った、ままだおじさんは、構わず話を続ける。

「入る者は、例え、將軍だろが！下士官だろが！同格に扱われる……おまけに脱落者は、毎月300人出る……それに隊長ともなると、空中戦艦をも指揮せねばならん……まさに……化け物集団何じゃ……お前にその覚悟が有るか？……イリア。」

おじさんは、脅しはかけていない本気で、マスターを心配している。

「全ての兵科ですか？」

「いや、隊長クラスを目指すなら……な。」

「……彼を……フェリオ君を私は守りたい……それでは……入る動機になりませんか？」

マスターは泣くのを堪えておじさんに話掛ける。

「誰かを守りたいか……そう言う所はお父さん譲りだな……イリア。」

」

「お父さんが……」

（お父さんとマスターが同じ？）

「ふふ……フェリオ君を守りたいか……だが道は険しい茨の道じゃ……」

笑みを含み、マスターに問うおじさんは、マスターの顔を見ると、そこには、一人の女の人の顔ではなく強い意志の有る顔だ。

「さて、重苦しい話は此処までじゃな……所でイリアよ。」

おじさんが、マスターに話し掛ける……少し意地悪そうな顔だ。

「何でしょ……叔父さん？」

「何時に成ったら、ワシに可愛い孫を見せてくれるんじゃない？」

「ツツ……し、失礼します。」

マスターは怒って、席を立つ。

「ま、マスター？」

「何処に行くんじゃない？」

「もう休ませて貰います。」

「なら、フェリオ君と少し話をしても良いな？」

（え、僕と……？）

「どうぞ……それではお休みなさい！」

「ああ……また明日な……」

マスターは部屋を出て行った残ったのは、僕とおじさんの二人だけ……

「フェリオ君じゃな？」

「はい……」

「お前さん獣人では無いな？」

「！？」

何で今日はこちらも正体ばれるの？

「はははっ大体獣人が、人間と契約出来る訳がなからう、それにじや、マスターと言っでは、ばらしてるのと同じじゃよ……」

「あ、それで……」

獣人は、魔力が低いが特徴として身体能力が、異常に高いのだそのため各国で奴隷として扱われる。

「我が姪を、助けて暮れたことに礼は言う……」

いきなりおじさんが頭を下げる。

「あ、頭を上げて下さい僕はただマスターに、死んで欲しく無いだけです。」

本当なら僕は、おじさんに批難されてもおかしくなかった……

「マスターは僕が命を懸けても必ず護ります！」

と大声で宣言した……すると、おじさんはいきなり大声で笑い出した。

「わはははっ、フェリオ君その台詞は一端の男が言う台詞じゃ……それにその台詞は死亡フラグじゃよ。」

（えっ……死亡フラグ何だろ？名前からして不吉だな？新手の魔法かな？？？）

「あの死亡フラグで何かの呪いですか？」

僕は思い切って尋ねた。

「呪いも何も、迂闊な発言をした書き物に登場する人物が、必ず死ぬと言う意味じゃよ……」

「え、ええーっ必ず死ぬ……そ、そんな……」

「はははっ、安心しなさい所詮はただの作り物の中の話じゃからな。」

「そ、そうですね？」

「そうじゃ、だが自分の命を軽んじる者は生き残れん……その事は肝に命じておけ。」

「は、はい。」

おじさんの真剣な眼差しに思わず身体が引き締まる

「いかなんな軍人の癖が出たか……」

なるほど、道理で気の引き締まる威厳があつた訳だ。

「それに、死ぬのは年寄りで十分じゃからな……若い者達が先に逝き、年寄りが生き延びる……そんな世界は間違つおる！ワシはそう思う……」

「……」

「わはははっ、そんな顔はお前さんには似合わない。」

多分寂しげな顔をしていたのだろ、おじさんが豪快に笑い出した。

ひとしきり笑った、後急に真面目な、表情になる。

「もし、叶うのなら生きてるうちに、イリアの晴れ姿を一目見てから逝きたいものじゃな……」

「……」

「そんな顔はするな、今は、ワシの独り言じゃよ、わはははっ。」

そうおじさんが、笑ってたが……僕的心中にしこりみたいな違和感が、あった……この時の僕はまだその事に気付いていなかった……

第5話〜日常との別れ〜（後書き）

次回執筆がんばります。

- - - 人物紹介1 - - - (前書き)

ネタバレ紹介に続いて

人物紹介です

主要人物の紹介です

- - - 人物紹介1 - - -

イリア・キサラギ

年齢20才位

髪の色赤毛

瞳緑

キャラ紹介

元国防軍辺境勤務オペレーター

怪物の襲撃で右腕を失うフェリオと契約し

魔王の片腕を得る

スキル

射撃

魔王の腕による

武器の具現化

(剣・ロッド)

壁や天井を踏み台にしての跳躍

補足

普段は優しいが

たまに魔王化する

フェリオとは姉弟の用に

成りたいと思っている。

フェリオ

頭は狐、

胴体は狼

尻尾は狐

髪は青

瞳は緑（獣化の時は金色）
イリアが死にかけた時
彼女の使い魔になる。

外見：10才位の少年

スキル

変身：獣化

武装

【ギガ・ガレット改】

カレンの魔改造によつて
かなり出力と耐久性が
アップしている。

キャラ紹介

甘いお菓子が好きで
たまに食欲魔神化する

基本的にマスター優先
だが大の勉強嫌い。

カール・フォートフェルト

キャラ紹介

イリアの叔父さん

年齢：60才

髪 白髪

瞳 青

キャラ紹介

性格

少し親バカでも怒ると恐い人。

フェリオを孫にしたいと思っている。

国防軍軍人。

階級：准将

お茶目な一面有り

公国の白狼と呼ばれる。

- - - 人物紹介 1 - - - (後書き)

これからも本作を宜しくお願いします。

第6話〜フェリオ誘拐事件〜（前書き）

誤字を発見して直しました。

描写を修正しました。

キャラ視点の修正しました。

キャラの階級はガダの軍階級観を参考にしました。

大聖堂騎士団の元ネタは月の教会です。

第6話　フェリオ誘拐事件

フェリオ side

僕は昨日マスターと喧嘩をした……原因は僕が、勝手に騎士団の【異能者保護申請書】サインしようとした事だ。

それがマスターに見つかって、口論になった。

『フェリオ君！何故……どうして？……答えなさい！』

『マスター……貴女は戦ってはいけ無いんです！』

『じゃ、じゃあ、自分は怎なの？独りで……戦って……あんなに傷付いて！』

『……マスター僕の記憶を勝手覗いて……それで自分の事は、上げですか？思い上がらないで下さい。』

『わ、私が何時？思い上がったて言うの……フェリオ。』

『それです……マスター貴女は、僕のお姉さんを気取るつもり何ですか？』

『……っ！私がフェ……リオ……君の……』

僕もマスターもお互いに血が上っていたらしい……遂に僕はマスターに、言すべき出はない言葉を言った。

『こんな……こんな分からず屋だと解ってたら……契約なんてしなければ……良かった。』

ちくりと胸が痛む……出も言った言葉は、取り消せない……

『もう一度言いなさい……フェリオ……』

『何度でも言います！貴女は僕のお姉さんじゃあ無い！』

次の瞬時マスターの平手が僕の頬を叩く……驚いてマスターの顔を見る……マスターは泣いていた……

『……マスター。』

僕は動けなかった……

『そうね……私は貴方のお姉さんじゃあ無い……そして……フェリオ君は私の弟でも無い……でも私は貴方の力に成りたい……だって……今のフェリオ君泣いてるもの……』

そう言つて僕をマスターが抱きしめる。

（暖かい両手に包まれるマスターの暖かさが伝わって来る……これが……マスター貴女の優しさ……）

『ごめん……なさい……マス……ター。』

涙声で声にならないが謝るマスターも泣きながら、僕に謝る。

『フェリオ君……私の方こそゴメンね私……フェリオ君の事をちゃんと考えてなかった……』

ごめんなさい……僕もマスターの気持ちを考えていませんでした。

『だから……二人で乗り越えて行こう。』

『はい、マスター……』

それが昨日の事だ、おじさんに話したら喧嘩をするほど仲が良いと
言われた確かに……僕達は、他人から見れば姉弟の様に見えるだろ
……

イリア・キサラギSide

昨日喧嘩をした……フェリオ君をぶってしまった……子供に手を上げるなんて最低だ……

（あーっ、考えても仕方が無い第一私は、ジメジメしたのが嫌いなのだ！）

よし今日はフェリオ君にお詫びを兼ねて買い物に行こう、うん
うん そうしよう。

「買い物ですか？」

「そつ 買い物。」

フェリオ君の居る部屋を訪ねて今日の行動を決める彼は戸惑いながら一つの疑問を口にした。

「それは良いのですが……お金は？」

「私が出すわよ」

「マスターが……でも魔導師の服とか、けっこう高いですよ……自分で出します。」

そう言つて彼は金袋からお金を出す……

「フェリオ君ごめん……」

「何でそこで謝るんですか？」

「その金額じゃ……安いホテル代にもならないから……」

そう彼のお金の残金出は服どころか宿代さえ危つい……

「あれ……この前確認した時は……宿代位……あーっ！」

「び、びっくりした……いきなり何よ……大声を出して？」

「僕のお金袋に穴が……多分あの時、モンスター達と戦ってる最中に……」

「じゃ私がフェリオ君のお金を出すから……」

「「そうはいきません!!」」

フェリオ君はいきなり大声を出した。

「まだ昨日の事怒ってるの?」

「違います……マスターに……女の人に、お金を出して貰う何て、僕のプライドが許さないです!」

「じゃ、どうするの?」

はつきり言って昨日の今日だ、私が折れよう……

「では、こうします……」

彼は両手に意識を、集中させて魔力を集める以前の私なら絶対に、解らないだろう……今になって彼の凄さに正直驚く……やがて、魔力が収束して深い蒼色の宝玉が現れる。

「これなら……かなりの高額に成りますから……て、マスター……何片手で額押さえてるですか?」

「フェリオ君……ゴメン君の創った宝玉絶対に、売ちゃダメ!」

「ど、どうして何ですマスター?」

「売ると……私たち警察に捕まるから……」

「はい？どうしてですか……マスター。」

「私が14才つまり、6年前ね当時、^{それ}宝玉を悪用しようとした人達が居て、それ以来この国じゃあ宝玉や、その他の魔法道具全て……じゃあ無いけど、拳銃や刃物以上に管理が義務化されてるから、それは国家資格をもってる魔導師しか扱えないから……」

「じゃあ……この国に闇の魔法屋は……」

彼はさすがのように私に、尋ねて来る、私はある意味彼に、死刑宣告を告げる。

「彼等は真つ先に騎士団に、徹底的に潰されたからフェリオ君の努力と気持ちだけ受け取っとくね」

「そ、そんな……」

「はいこれで、フェリオ君のお金の件は私持ちね」

「何だか……嬉しそうですねマスター。」

フェリオ君が恨めしそうに私を見る……半分怖い……しかたがない此処は、フェリオ君の好きなお菓子で機嫌を直して貰おう。

「じゃあ、買い物とお菓子おごってあげるから。」

「お菓子ハイ、行きましょうマスター」

（ふふふっ……僕の食欲は旺盛ですよ）

（フ、フェリオ君の目が既に捕食者モード……）

「あ、あのフェリオ君？」

「何ですか？マスター。」

（行きますよ、マスターご飯代の財源は十分ですか？）

私は、この時フェリオ君……の得に甘いお菓子に対する彼の恐ろしまでの食欲をまだ私は、知らなかったのだ……

フェリオ君の服装は、リフィアに貰った犬のアニメキャラのイラストが入った子供服だ、私は動きやすいＴシャツとジーパン姿だ、まずは先に学生時代からのお菓子屋へショッピング・ラッを目指す。

昼時ともなると、かなりの人で賑わう、フェリオ君が人の数に圧倒される、しばらく来ない、内にけっこう握わってる。

「えーとフェリオ君それでも好きな物頼んで良いよ。」

「それじゃ……あの大きなのが良いです、マスター」

（てっ、あれ挑戦メニューのジャンボ・パフェ！完食者2・3人しかいないよ！？）

とか言ってる内にフェリオ君が、事もあるうに注文してしまいました。

（何かサイズが前より大きく成ってる……しかも制限時間……4時

間以内で、フェリオ君何か……追加注文してるんですけどーっ……）

とにかく、食べるペースが速い！見掛けは普通に食べてるんだけど……勢いも普通に見えるんだけど、とにかく早いの一言しか無い……結局店員さんと私が泣いて止めるまで……彼のジャンボ・パフェ無双は30個を超えた。

あーっ、シャングリ・ラが今日から……全て遠き理想郷アウアロンに クラスチェンジしました……

まあ、結局全て完食したけど私達確実に……ブラックリストに載ったフェリオ君……君は真正銘……食欲の魔王です……確かフェリオ君のが出てる童話に「お菓子好きの狼」と言うタイトルの本があった確か、一国のお菓子屋を根こそぎ食べ尽くした……あの話しもオフィシャルだったんだ……

「ご馳走様でした、マスター」

フェリオ君その笑顔は、可愛いけど君は……真正銘お菓子の魔王です……

「さてと次は、魔術屋ね。」

「はい、マスター。」

でも魔術屋なんて……ほとんど……いや全く知らない何処に有るのдар……

「マスター路地裏に有りますよ。」

「て……フェリオ君、今心読んでた？」

「そうですね……僕が食欲の魔王あたりからです」

「次は、念話だけにしなさい……」

「はい、マスター。」

とか言ってる内に、目的の店に着いた……でもお店に見えない……フェリオ君曰く魔術協会に属している魔術士にしか……解らないそうだ。

店の中は???だった全く解らない、色々な道具が売ってるがちんぷんかんぷんだった、フェリオ君が頼もしく見える。

「うーん、この呪符は、イマイチだし……この魔法の短剣は……僕向きじゃあ無いし……」

「フェリオ君何か、欲しいの？」

「せっかくだから、自分のお金で、何か買おうかなと。」

「足りなかったら？」

「おじさんから、おこずかい貰いました。」

（叔父さんいつの間に？）

「マスターの仕度を待つて居る間に。」

「このブレスレット……かなりの物だ！」

と言って彼はその、ブレスレットを見せてくれた、ミスリル製で
宝玉を飾り付けて有る。

「うぁーっキレイ」

で見取れていたが、値段は10000万ゴールド!? 何この値段正
直……高すぎ……

「大丈夫です、マスター」

と言って、カウンターに彼は行きフード姿の店員さんと交渉を始め
る、結局ブレスレットと黒の魔導師服と白いマント三点をワリカン
で買った、結局またまた意地の張り合いに成りかけて、妥協案を私
が出した結果だ。

（やるわね叔父さん、あんな大金をおこずかいでフェリオ君にあげ
るなんて……）

店を出て表通り道に出るとそこで、違和感を感じた……

（マスター僕達、後をつけられてます。）

（どうするの? 私達、武器なんて持って無いよ。）

（僕がサポートします。）

（解った、じゃあこのま逃げましょ、そうすれば他の人に迷惑が、
掛からないし。）

とにかく、此処を離れ無いと……後を着いて来るのは、10人位ら
いだ……何とかなる。

アルト・ファルデイス side

銀色の毛にショートカットの水色の瞳の青年が、他の騎士達と何処
に行くか相談してる

「おい、アルト何処にいこうか？」

特に行きたい、場所なんてほとんど有りませんよ。

「そうですね……？」

と言いかけたその時……彼の目に、二人の人物をつける不審者が映
る。

「済みませんが……用事を、思い出しました、また今度お誘い下さ
い。」

「そっかあ、それじゃな……」

「今度付き合えよ……」

「じゃあな……」

一人だけ除いて皆それぞれ去って行く……

「私……残る……」

「レイラさん良いんですか？」

オレンジ色の切り揃えた髪と紅い瞳の少女だ、普段から何を考えているのか、全く解らないが、彼女とアルトは属に言う腐れ縁だ。

「……早く追わないと。」

「そうですね、その前に。」

彼は通信機の回線を入れる。

《はい、こちら大聖堂騎士団治安担当部……》

「ナミさん、聞こえますか？」

《あ、アルトさん勤務中の私語は……》

オペレーターの注意も、意に返さず彼は要点を言う。

「直ぐに、保安課と市警察に連絡を、お願いします保護対象は、赤

い髪の女性と青い髪の……恐らく半獣人の少年……女性の年齢は20才位、少年は10才位、なお……後ろを付けてる方々は獣人狩りですね。」

《り、了解しました直ぐに伝えます！》

「こちらは、レイラさんと僕達だけです。」

《サポート班を手配します……》

「頼みます、一旦連絡終わり。」

《解りました、お気を付けて！》

「レイラさん行きますよ。」

「……解った。」

そして二人は後をつける。

イリア・キサラギSide

路地裏に向かい、いきなり……囲まれた、その後複数の男達に囲まれた、その後フェリオ君と二人で戦ったが、フェリオ君が捕まって、気を取られた所を、後ろから撲れた……その後の事は……覚えて無いどの位時間が、たったのだろう……人の気配がする……誰だろう

……

「大丈夫ですか？しっかりして下さい！」

「うっ……」

「まだ……動いては……ダメ。」

意識は……ぼんやりしている……あれ……フェリオ……君は……？

「ふえ……フェリオ……痛っ！」

フェリオ君の事を思い出して……慌てて起きようとしたら、頭の後ろがズキズキと痛む。

「貴方達は？」

「大聖堂騎士団の者です、私はアルトと言いますそして貴方を、介抱している彼女が……」

「……レイラ。」

「そうだ……フェリオ君は！？」

辺りを見渡すと……見知らぬ男達が倒れていた。

「申し訳有りません、彼等に邪魔をされて……彼等は、獣人狩りです。」

獣人狩り……半獣人を何の躊躇いもなくさらい、時として殺す事も

厭わない犯罪組織だ……

「現在サポート班と警察が連絡のアジトを探してるのですが……」

「フェリオ君は……」

「恐らく、アジトでしょうね。」

目の前が真っ暗に成りそうだ……

「彼等に手こずりましたがアジトは彼等に聞きましょう。」

え……どうやって？

「おい……起きろ……」

「うゝん」

意識がぼんやりしてる男をレイラさんが起こす……

「私の……眼を……見ろ……」

男の目をレイラさんが見つめる……

「う……あ……っ。」

男が反応する……目が虚ろだ。

「アジト……教える……」

「その…角を右に…2ブロック…先…の廃ビル…」

「見張りの…数は？」

「表に…3人裏に…2人…後…他脚が1台…」

そう男が言うと倒れてしまった。

「彼女は魅了の魔眼使い何です。」

「それで…これから、どうするんですか？」

私はアルトさんに尋ねた。

「乗り込みましょう。」

「……賛成。」

「えっーっ、」

正直驚いた！作戦も無しに乗り込むなんて……

「私は応援を、待った方がいいです……」

「そう、それが普通常識でしょう。」

「ですが、その逆も有るんですよ……つまりこちらは大勢で来ると思わせての奇襲です。」

なるほど、逸れならいけるかも……でもアジトの中の相手の数が解らないと、かなり辛い……

「敵の数は見張りだけ、中の数が解らないとかなり厳しいわ……」

「そうですね……では私達が陽動を……」

アルトさんがそう、言いかけた時、通信機が鳴る。

《アルトーっ、また勝手な行動する気やな！サポートする身にもなってみい！》

いきなり女の人の怒鳴り声が響く。

「あちゃー、エレノアさんもう来ちゃたんですか？」

《ミナちゃんから、連絡有ったわっ！アルトさんが暴走しそうなので、急いで現場に向かってくださーいてっ、こっちの場所教えるから早う来や！》

そして通信は切た……

「あ、あのー。」

「さあ、ひとまずエレノアさんと合流します、彼女怒ると恐いですからね」

アルトさん達と、急いで指定されたポイントへ向かう。

そこには、複数の装甲車と警察車両に指揮車と大勢の警官と騎士団員が、完全装備で待機していた。

白いベレー帽に、白いロングコートを羽織って緑の騎士団の制服を纏っている、栗色の髪のおかつは頭、緑の瞳の少女が、無線機片手に指示を出していた。

「そやから、A・B・Cの三班は、各自所定の位置にそれとへりは要らんで五月蠅いだけで、邪魔や機動部隊突入させる？アホっ……大惨事にしたいんかつ、さっき話たやろ……隠密作戦による奇襲や覚えとけ！」

（何か外見とのギャップが有りすぎ……何で関西弁と言つか……何でこんな子が指揮してんの？）

「どうやらご機嫌ななめですね、エレノアさん。」

とアルトさんが、少女に話かける。

「あつ、もうアルち来たん？」

「はい、連隊隊長が呼びになられたので……」

「あーっ、うちが呼んだんやたな……ゴメン血イ、上って忘れてた……ごめんな。」

そう言って彼女は、頭を描く……

「そちらの人は？」

と言って私を見る…表現が険しい……

「被害者のイリアさんです。」

アルトさんが彼女に、私を紹介する彼女は、最近頻発する、半獣人の誘拐事件について、教えてくれた。

「じゃあ、フェリオ君達は……」

またも卒倒、仕掛けた……不意に誰かに支えられる。

「大丈夫です、私達に任せて下さい。」

アルトさんが私を支えてくれた……

「……任せて。」

「あんたは民間人や、此処で待つとき、直ぐに犯人いわしたる。」

エレノアさんが、いつの間にか鉄扇を有名な天才軍師の様に振りかざし、号令を出す。

「よしっしゃ！これから、悪党退治や、遠慮要らんへんで、全員まとめてフルボッコしいや。」

「「おーっ！」「」

（どちらが悪人だろう…しかも、フルボッコ!?）
でも、フェリオ君達は大丈夫だろうか？

（私も武器があれば、戦えるのに……）

その時だった！右腕がまるで感電したかの様に、痛みだす……

「！？ぐうういう……」

たまらず地面に、倒れ込む皆が、私に駆け寄る。

「だ、誰か衛生班急ぎや！」

「イリアさん大丈夫ですか!？」

「……!！」

私の右手に何か解らない力がら集まる……そして一握りのロッドが、現れた。

「はあ、はあ、こ、これは？」

「イリアさん魔術師だったんですか？」

「……凄い。」

アルトさんとレイラさんが、駆け寄って来る。

（何やこの子？魔術師そんな者で、今のんは証明でけへん……）

しばらくして、無線機の呼び出しが鳴る

「はい、こちらエレノア何や……？」

《隊長…全班配置完了。》

「了解や、こつちも二手に別れて行動する……アルト・レイラをアジトの正面に……うちらは裏に回るさかいアンタ等も注意しいや！」

《了解。》

そう言つて、エレノアさんが通信を切る、私はもう痺れは、無い私は立ち上がつて、アジトに向かおうとする……

その時エレノアさんが私の手を掴む。

「ちょい待ち！何処にいくねん？」

「フェリオ君を……助けに。」

「そんな状態でか？」

かなり厳しい目付きで、私を睨む、私も睨み返す

「放して下さいエレノアさん。」

「アカン、アンタ一人で何が出来るんな……言つてみい！」

心配してくれるのは、嬉しいでも余り時間が無いそんな時、アルトさんが助け舟を出してくれた。

「行きましょう、イリアさん。」

「アルト……あ、アンタ気は確かか？」

「ええ……正気ですよ、それに、彼女は止めても、フェリオ君を助けに行きますよ。」

「私も……賛成。」

エレノアさんが考え込むやがてら開き直った様に言い放つ！

「あーあーっ、うちだけがワルモンかあ、しゃあないただしっ、イリアさん無茶すんな！アンタに死なれてみい！始末書やのうてうちの首が飛ぶからな……」

私は大きく頷いてエレノアさん達と裏口に回る。

アルト・ファルデイスSide

さてエレノアさんに、裏口は任せて表を、攻めますか……ちょうど、3人一瞬で片付けましょう……

私は駆け出すと、素早く剣の柄に手をやる……

見張りが私に気付く。

「何だ？てめえは。」

「や、やっちまえ！」

「何もんだ！」

「別に名乗る程では、有りませんよ。」

一瞬で彼らと交差する、瞬く間に彼等を切り伏せる。

「こう見えても、居合は得意何ですよ、ああ安心下さい峰打ちですから……」

既に気絶している、彼等につぶやく……

その時目の前のシャッターが吹き飛び！四足歩行の他脚戦車<キャンサー>が現れた。

「闇ルートの中古品ですね？」

キャンサーはガトリング砲を無差別に撃つて来る！嵐の用な弾丸を避けながら、レイラさんに合図する彼女には、玩具同然の相手だ。

「レイラさん！」

「……分かった。」

彼女はジクザクに素早く動く！キャンサーは彼女の動きに、ついて行けない！パイロットの焦りが聞こえる。

「なんだーっ、このアマ！？デタラメ過ぎる……」

そして、素早くキャンサーの腹の下に潜り込むと脚を手刀や回し蹴りで、三本破壊し素早く、腹の下から脱出する。

そして砲頭に上りハッチをこじ開けると、中のパイロットに一言。

「……出る」

とドスの聞いた声で話す。

「は、はい。」

呆気なく片付いた。

「レイラさん、お見事ところで腕や脚にルーンを仕込んで、いたんですよね？」

彼女の怪力は両手足に仕込んだ、ルーン魔法だった後、格闘術？（我流）で他を圧倒する。

「……こんな子供のケンカ……別にたいしたことない……」

「さて、中でもう一仕事しましょうか？」

「……早く片付ける」

エレノア・アリアドネSide

うちらは、今裏口に向かつて進んでる……イリアさん……よう解らん女性^{ひと}や、何で自分から危険な場所に飛び込む、しかし……あのいきなり出現したロッドが全然解れへん。

情報通りや……突入用意の合図を皆に伝える……全員に緊張が走る……そんな時や、不意に嫌な予感がした……壁に何か居る。

（光学迷彩！？）

「皆っ、はよう隠れるや！」

対人他脚戦車<スパイダー>が、バルカン砲をこっちに向けろ！

（アホ！そんな物要らんわ！）

「やっばっ、皆早う隠れるや……てっ、イリアさん何しとんねん……早う逃げるや！」

いきなり、彼女はジャンプをいや跳んだ！そして手にしていたロッドで、壁に張り付いていた一匹をあっさり倒す。

（なっ……！）

それだけや無い壁を、踏み台にして！反対側のスパイダーの胴体にロッドを突き刺し見事に、着地する、そうこうしている内に見張り

達がやって来る……次は、うちの番やな纏めて相手したる。

「邪魔や、覚悟せい!!」

「な、何イ!？」

「うおっ!」

ジャンプをして、鉄扇で見張りを倒し着地する、そこえ扉を開けた見張りが現れた……気付かれたか、すかさず、うちはサマーソルトキックを放つ。

「ぐえっ!」

「ふう、余り手間掛けさせんな……」

額の汗を拭ってった所へイリアさんが駆け寄って来る。

「エレノアさん大丈夫ですか？」

「うちは大丈夫や、逸れよりイリアさん、疲れてへん？」

うちより、彼女が心配やビルの壁に張り付いていたスパイダーを、あっという間に、二匹も倒したんや身体に無理でもしていたら。

「私は平気です。」

何て事を口にした……う、嘘やーっと、叫びかけた、その時無線機から予備だしが有った。

《こちらアルト、エレノアさん聞こえますか？》

うちは、直ぐに返事をする。

「アルち何や、今から裏口から突入するで。」

《こちらも、あらかた片付いたので被害者の捜索に当たります》

向こうは順調やな……こつちも予定通りや。

「了解や、無理はするんやないで。」

と言つて、無線機を切る後は奥に進むだけやな。

フェリオSide

路地裏に、誘い込んだと思ったら罠だった、いきなり電撃が走った
と思つたら、気を失つた……

（此処は何処だろ……マスターは居ない……）

多分さらわれたのは僕だけだ、周りを見ると外見の僕と同年の子
供達が、20人居る。

（皆、半獣人の子供達だ。）

中にはさらわれる時抵抗したのだろ……顔にアザが出来てる、子も居る。

（皆……表情が虚ろだ、何とかしないと）

まずは手足の獣人用の拘束具を破壊する。

この程度のなら何とも無い！身体は動くな……よし反撃開始だ……まずはドアを破壊する、

そして駆け付けて来る奴らを全員倒す……他だし、子供の前だ殺しはしない。

僕を誘拐したのは獣人さらいか……纏めて生き地獄に落としてやる……立ち上がって皆に叫ぶ。

「皆つ、目を閉じて！」

子供達が、僕の声にならう僕は右腕を前に突き出し、ドアの空間を<押す>派手な音と共にドアが吹き飛び、見張りの一人が巻き添えになる。

「ぐべえ」

壁にドアごと叩き付けられ気絶する。

（残りは二人！）

僕は外に飛び出すと直ぐさまに、二人に襲い掛かる。

「がぼっ」

「げぶっ」

はつきり言つて人狼より弱い……顔を上げると、マスターと保安部隊の人達が目を丸くしている。

「えーと……大丈夫ですか……マスターそれと、サポート能力は無事に発動しましたか？マスター」

「大丈夫だけど……サポート能力で何？」

忘れてた、マスターに僕の力の説明をしていなかった……説明不足の非礼を詫びて、マスター説明する。

「試しにやって、みるわね……武器精製……ソード・ワークス」

マスターの手に剣が、出現したやりましたねマスター。

「コホン、あーっそろそろえーかつ？」

マスターの横に居た女の人が僕達に話し掛ける。

「す、済みません、」

「ごめんなさい……」

二人で謝る。

「別にえーよ、逸れより誘拐された他の子達、見なかった？」

そうだ……彼らを直ぐに保護して貰わないと。

「この部屋の中には居ます！」

「何人位？」

「20人です！」

彼女に子供達の状態を説明する……彼女とマスターの顔が…恐ろしく変わっていく…。

（ま、まるで魔王と破壊神が降臨した用だ！）

「イリアさん、今気持ちが見事に一致しよったな？」

「ええ……一致しましたエレノアさん。」

僕も同じです、マスター エレノアさん……

三人は口々に言葉を出す。

「殲滅やっせつて良いですか？」

「無双やっせつて良いわよ」

「半殺しやったらな」

それぞれの決意が固まり自己紹介をし終え、エレノアさんが命令を下す。

「おーし直ぐに、被害者の保護活動開始、残りは、うちに続け犯人共を血祭りするでーっ！」

「「おーっ！」」

何か悪人になった、気分だ…廊下の警備をしている他脚や見張りを片付けながら進むと、ぶ厚いドアが有った僕はドアを爪でこじ開ける。

「なっ何者だーっ！」

ドアの向こうに、シルクハットとタキシードを着た中年の男が口を開く。

「見て解らん？あんたらを捕まえに来た保安隊やけど…ドン・トカレフ？」

「ドン・マカロフだ！」

男が怒鳴り散らす。

「マカロフやろうがトカレフやろが、関係あらへん話聞かせて貰うで、ついでに刑務所って言う、別荘に、ご招待するけど？」

「ぶざけるなっー、わっ、ワシがーっ、体何をした？」

「惚けんの……半獣人の子供達さるうたやろ？」

エレノアさんの声にドスが入る。

「あ、あんな……人間の成りぞこない等、ら、ラボや奴隷で十分役立つだろうが！」

「ふーん、なあ今の台詞取り消す気は……あらへん？」

「屑を、屑呼ばわりして何が悪い？」

「そっかあ……一片逝ってみる冥界に？」

たちまち顔が青くなるドン・マカロフ……

「野郎共やってしまえ、それと、ガル・ディアスを出せ！」

その時、壁を突き破って一つ目の熊の様な怪物が現れた恐らくキメラだろう……

その時いきなり後ろのドアが吹き飛ぶ！中から飛び出して来たのは、スクラップに成ったスパイダーだった。

若い男の人と女の人が、見張り達を蹴散らしながら乱入する！

「お待たせしました。」

「……直ぐに片付ける。」

キメラが二人を睨む……

「キメラに子供を使つた？」

僕は首領に聞く……

「屑のDNAだけならな！小僧」

じゃあ遠慮は、しなくて良いや……もう怒りで頭が爆発しそうだ……
またマスターにビンタされるけど……もう我慢しなくて良いよね？……マスター？

「うあああああつ！！」

僕は叫ぶと、キメラに向かって突進するキメラのガギ爪が、振り下される。

バックステップで避ける。

床が吹き飛ぶ。

「！」

「……！？」

「ば、化け物！？」

僕は右腕の爪を巨大化させると、キメラを真つ二つに切り裂く……大量血を吹き出しながら、倒れ動かなくなる……後は……こいつだマスターやエレノアさんは、雑魚を相手にしている……後から来た二人も雑魚ばかりに構っている……目の前の屑を片付ける。

「うあああああつ、た、助けてくれーっ！」

「ナニ…言ってるのか……ワカラナイナ？」

（爪を構える……こう言う奴は生かしては、イケナイ……イキテチヤ……ダメダヨ……？）

「ふえ、フェリオ君ダメーッ！」

「フェリオっ、殺したら……アカン、止めいやーっ!!」

（ゴメン…今はボクハ……ワルイコ……で良いよ……マスター……）

二人が止めに来る前に……殺す……腕を大きく上げて 振り下ろす。

「おーっと、おいたはイケナイナ坊主？」

硬い金属がぶつかる。

目の前に褐色のオールバックの半獣人が、バスターソードで僕の攻撃を防ぐ。

「邪魔しないでよ、オジサン……」

「オジサンじゃねえ、お兄さんだ！邪魔するね、特にお前見たいに血が、上ってるヤツは……なっ。」

彼は僕をバスターソードで、吹き飛ばす。

「ぐあっ！」

4・5メートルは軽く飛ばされた。

「フェリオ君！こ、このおおおおっ！」

マスターが武器を、バスターソードに変えて男に挑む！激しい切り合いが始まる。

「悪いな……お嬢さん……後2・3年したら剣の相手してやるよ！」

マスターを弾き飛ばす。

「きゃあっ！」

マスターが床に叩き付けられる……

僕は起き上がろうと、上半身を起こす……目の前に剣先があった……

（いつの間に近付いたんだ？）

「なあ、坊主頭冷えたか？」

「……」

「お前には血生臭い事は似合わねえよ……」

「……」

無言で睨み返す……男は勝手に話を続ける……

「お前の力は、何の為に有る？お前の守りたい物は何だ？、その嬢ちゃんか？それとも……さらわれた子供達か？」

皆が男の言葉を聞いていた……その時、首領が近寄り口を開く。

「御託は良い！さつさと片付ける！」

「そうだな……片付けるか？テメエから……なっ！」

いきなり首領を蹴り上げる。

「くべえ」

「話の腰を折るなバーカ」

そして首領は動かなくなる……

「ぼ、僕は皆を護りたい！」

「じゃあ……さっきのは何だ？力に……振り回されてんじゃあねよ
！！」

思わずびつくと、なる！今で頭が冷えた……

エレノアさんが近付いて来る、そして男と対峙する。

「なあ……アンタさっきから偉そうな言葉吐いてるけどアンタは、
何しとんねん？」

エレノア・アリアドネSide

この男は確かに強い、ただ強いだけや……でも何やこの……寂しさ
気な雰囲気は……

「アンタ名前は……？」

「ガレスだ……」

何か調子狂うは……やりずるうてかなわん。

「周り見んでも解るやろ……古臭いけど……尾縄になる気無いか？
まだ間に合うで。」

ガレスは呟く様に吐き出す。

「それは……無理だなあ……俺は悪党だ……もう此処まで染まっち
まった……」

「何で獣人さらに手貸したん？他にすべき事はあつたはずや……
……」

ガレスは諦めた様に叫ぶ。

「ハッ、今更か？そりや無理だな！俺達見たいな半獣人にまともな
仕事有るか？、何処に行つても化け物扱い……自棄^{やけ}になって気が付
いたら……こんな所で用心棒だつ！」

そして……うちに斬り掛かって来た……身体が動かん……多分この
男の台詞がそうさせとる……

そんな時やアルトがうちの間に割って入った……

「困りましたね……隊長らしくない……」

えっ、うちらしく無い……どういう事や？

アルトは【夢幻流】の使い手や……しかし手こずってる。

「はああああっ！」

「ふっ！」

二人の剣が激しくぶつかる！正直ガレスの言葉に打ちのめされた……けど、うちにも言いたい言葉は有る！

「確かに半獣人には住みづらい世の中やっ、けどなっ誰もが、アンタ見たいにくすぶってへんでっそれになあっ、人さらいに手貸してそれで満足かアンタは！」

叫ばずに要られんかった……その時や……アルトが圧されたんは……

「やりますね……さすがに此処で……会えるとは思ってませんでしたけど闘剣王！」

「お前もな……こんな所で夢幻使いと、やり合えとは思ってなかったぜ！」

アルトはボロボロや……うちのせいや……余りに腹が立ったんで、自分の額にグーを入れる……自分の不始末は自分で着ける。

「アルト……アンタのお陰で気合い入ったわ、サンキューやで。」

「隊長……？」

そう言つて鉄扇を構えるさあ、舞を舞わせて貰おか？

「その鉄扇……鬼姫か？」

「他の奴やつたら……もう一遍言つてみい……と怒つてたで……まあ有名なアンタなら、別に怒る気なんてないで……」

うちは今正直嬉しいと想つた、あの有名な黒豹^{かれ}となら久しぶりに修羅の舞を踊れそうや……とつその前に隊長としてやっておかな……アカン事とイリアさんにうちの秘密を知つて貰わなアカンな。

「アルト・レイラ・それに各班つ、手え出したら懲罰や！」

「「りつ、了解」」

多分うちの怒気に圧されたな、皆には後で謝るわそう思いながらベレー帽とコートを脱ぎ捨てる……頭に有る一本の鬼の角……正直この姿見られんのは嫌なんよでも、私を産んでくれた両親には感謝してるで。

「イリアさん……うちな鬼族の子供なんよけど……」

そう言いかけた時イリアさんの口から、想つてもなかった、言葉が掛けられる。

「エレノアさん私は、貴女の【友達】に成りたい、その前に……ガレスさんを救って……多分……いえ貴女にしか出来ないから……」

友達に成りたい……か、本当に……変わった人や普通【鬼】で、聞いたら普通は逃げるで……まあどうでもいいか。

「待たせてごめんな。」

「構わんさ……」

さあ始めよか互いに、遠慮は要らんな？

同時に仕掛ける、まさに死の舞踏会や！ガレスは 剣舞うちは演舞や、余りの愉しさに互いに顔が喜んだる、でも何か寂しいで……あんたの実力はこんなもんか？

「どうした……それで終わりか？」

「そやな……鉄扇が取り柄だけ……やったら……あんまり面白ないやろ？」

そう言つて鉄扇を床に、捨てる……鉄の重い音が響く。

うちは直ぐに拳法の構えを見せる。

「おいおい、剣士相手に素手か？」

「ウォーミングアップはこれまでやる？アンタの剣へし折つたるさかい、掛かつてきつ！」

ガレスは無言のまま突きの構えをとる……そしてうちに突進して来た。

「!?!?!?!?! 何イツ」

ガレスの驚きも解る何故なら……うちは肘と膝で刀身を挟んでいたからや……」

「さあ、へし折るでっ、覚悟しいや!」

鉄の折れる音がした、剣は真ん中から真っ二つに折れた。

「ほう……やるな鬼姫!」

そう言って、半分折れた剣を投げ捨て、中華拳法の様な構えをとる。

「剣術は洋式で……拳法は中華流かあ?随分良い趣味してんよ……アタ。」

「どうせなら、二つをと想ってな……」

(二つ?二つのやうて?)

「そんな事は、どうでもいい今度は……こちらから行くぞ!」

彼が駆ける、うちと言う獲物に向かって……うちはとっさにガードする。

(凄い……まるで疾風や防ぐのがやっとなや!)

まるで…拳と脚技の暴風やな、【黒豹】の二つ名伊達やあらへん。

「良い動きするなあ黒豹!」

「俺について来るとはやるな鬼姫!」

互いに拳や脚を打ち込む、まるで嵐の用に……

でも……流石に疲れた……もう……そろそろ仕舞いに……しようか。

「これから……うちの取っておき（一撃）を食らわしたる……その前に、もう一度やり直す気い無いか?」

「そうだなあ……お前が俺を倒せたらな?」

ガレスは目を閉じて静かに言った。

「男に、二言は無いな?」

「聞くまでも無いだろ……」

何でアンタ……そんなに不器用なん?

「うちが……アンタの想い受け止め……たるか?」

「それは……告白か?」

（なっ、なっ、何言ってんねん!!）

「／／／……アンタが……余りにも不器用で……ほっとけやんからや……」

確かに……ほっとけやんなアンタは……半獣人で犯罪に手を染める奴はこの国でも珍しくない……

うちはまだ、恵まれてる方やろ……色々有ったけど、こうして物騒な仕事してるけど、仲間に巡り会えた、ただ彼にはそんな機会が無かったのだろ……

「そろそろ決めるか？」

「もちろん決めよか？」

同時に駆け出す！互いの急所に一撃を見舞う、余りの激痛にうちは膝を折る……

「なんで……急所はずしたん？」

不思議に想い黒豹に聞いてみる。

「別にい……ただ……殺すのが惜しい……だけだ。」

黒豹の脇腹が朱に染まる。

「うちは手加減なんて器用な真似出来るか！」

脇腹の痛みを堪えてそう叫ぶ……でも返事が無い。

「何や……気絶したんか……案外だらし無いんや……な……」

その後うちも気を失ったらしい……情けないけど、気がついたん……
…は逸れから三日後の話や。

第6話〜フェリオ誘拐事件〜（後書き）

描写を修正しました。

第7話〜第16騎士隊創設秘話〜（前書き）

誤字・脱字の他台詞を少し変えました。

描写を修正しました。

第7話〜第16騎士隊創設秘話〜

エレノア・アリアドネ side

獣人狩り事件から、六ヶ月が過ぎたボスの、マカロフはうちが、締め上げたら、あっさりと白状した。

ただ、ラボは今回の件は一切無関係と正式に発表してるが……うちが思うにラボは黒やな……何故ならアジトに在ったパソコンのデータ調べたら、改竄されてたからや……あんな連中にキメラなんて造る技術あらへん、連中もアジな真似しおるで……

「まあ……事件は解決したし獣人狩り組織は、根こそぎ潰した……これで一件落着やな。」

そうそうガレスやけど、うちの司法取引を断って今は刑務所に入ってる、何でも《けじめ》付けたいんやて……律儀な奴や、ガレスは誘拐に加担しとらんけどら15年の刑に架せられるはずや、この前面会に行った事をうちは思い出してた。

『うちの所に来いへん?』

『刑期を終えたらな。』

『そつかあ、じゃあ待たせて貰うで、うちこつ見えてけっこつ気が長いんよ。』

あまガレス、アンタが律儀なお勤め果たしたいんなら別に止めへんよ、ただ出て来たら、その分思いつ切り働いて貰うからな！

『お前…何か企んでるのか？』

うわっ、技だけやのうて感も鋭い。

『別に企んでへんよ、それより聞きたい事が、有るんやけど？』

『何だ、聞きたい事で？』

面倒臭げに答えて来る。

『何で二つなん？』

『一つの武を極めても面白く無いから、いっそ二つにすただけだ。』

『あははっ、やっぱりアンタ面白いな それじゃ帰えるわな、うち

……』

そう言つて席を立ち踵を返して刑務所を後にした……

ふと気付くと、アルトが書類を持って来た何やえらい険しい顔して

……

「連隊長！-！」

「何やえらい慌てて、どないしたん？」

「ハッ、実は……イリアさんの事で……」

アルトは何時もエレノアさんで、うちの事を読んでるただ……連隊長の公称はとんでもなく大真面目の時だけや。

「イリア騎士候補生がどないしたん？」

今イリア・キサラギは、騎士候補生としてこの六ヶ月訓練の真最中のはずや……何かあったんか？

「イリア騎士候補生に……トラブルか！？」

「いえ、彼女と……言つより彼女のご両親ですね……空中貨客船【アトル・カルゼ】号墜落事件の犠牲者に、彼女のご両親が……乗船されてました！」

アトル・カルゼ号！？あの原因不明の爆発で、フォルド樹海に沈んだ船か……

「それで……何か解つたんか？」

アルトは横に首を振り。

「いいえ……特には……」

とだけ答えた……

「無駄足踏む、為に此処に来たん？」

アルトが少し怯んだはつとなった……怒気をはらんでたらしい……

「ゴメン……一人にしてくれる？」

「分かりました……」

アルトが、自分のディスクに戻る自分でも、調べて見るか？そう思
つて、パソコンのキーを叩き検索する。

>アトル・カルゼ号墜落事件<と……ヒットした……どれどれ……
そこには簡潔にこうあった。

>>以後の閲覧は、最高機密の為パスワードを入力して下さい<<
パスワード！？ただの墜落事件やのに……？

待てよ……イリアさんのお母さんは確か……軍の研究部やったな……
……人物検索……メアリー・ホートフェルト……

>>魔人兵士製造プロジェクト……以後国防軍司令部権限で閲覧を
禁ず<<

国防軍！？何で、民間船の事故に軍が、絡んでんのや？それに魔人
兵士製造プロジェクト？……まさかな……あれは失敗やつたはずや
……

うちは、かつて参謀部にいたからな……考えても仕方が無い駄目元
で、パスワードを参謀部時代の物を入力する……

「やっぱり無理やな……パスワード変更されてる……」

しかもご丁寧にこの、パスワードは無効やて……役に立たん端末や、

モニターで潰したるか？その時モニターから呼び出し音が流れた。

「エレノア連隊長……局長が至急、連隊長に局長室まで出頭せよ、との通達です。」

ミナ・ディストが連絡して来る……のは良いんやけど……また何かやらかしました？てっ、そんな眼でこっちを見るなーっ、

「あの一っ、また何かしでかしました？連隊長」

「それ、ボーナス減らして 言う意思表示？」

ジト眼で睨みつける。

「何でも、ありませーん」

「アハ ジョーダンやで、すぐに行くて局長に伝えといて。」

「解りました」

この娘も大分冗談が、解って来たな……さて局長が呼びか……や
やこしい事に成りそうやな……

レスター・エルストン side

今俺は大聖堂騎士団の、部隊編成や各部隊の編成状況の報告書を読んでいる。

各部隊は以下の通りだ。

特務騎士団

フェンリル・ナイト

実戦部隊

零式戦車大隊

各騎士団

第1騎士団：氷竜騎士団

第2騎士団：魔竜騎士団

第3騎士団：白狼騎士団

第4騎士団：炎竜騎士団

第5騎士団：雷竜騎士団

第6騎士団：光竜騎士団

第7騎士団：天狼騎士団

第8騎士団：地竜騎士団

第9騎士団：赤狼騎士団

第10騎士団：銀竜騎士団

第11騎士団：鉄竜騎士団

第12騎士団：白竜騎士団

第13騎士団：双竜騎士団

第14騎士団：飛竜騎士団

第15騎士団：黒竜騎士団

そして各騎士団に編成予定の空中戦艦隊

これらはもう少し、時間がかかる原因は、国防軍の石頭共だ我々に空中戦力つまり空中艦隊が配備されるのは好ましくないとの理由だ…。

そんな理由で、かなり編成は遅れているが、戦力としては陸戦がらメインだから今の所艦隊は演習艦のみだししかしそれらもようやく形に成ってきた。

次に頭の痛い話の書類が目に入る…まだ一候補生にこだわってるのか…コイツラは。

次は……やっぱりイリア騎士候補生への評価だな……まあ教導官や各騎士達の評判は良い……しかし……

（此処まで来ると……ある種の嫌がらせだな全く俺は女一人に構ってる程暇人じゃあ無い。）

彼女の实力は、フェリオを抜きの場合でも、かなりマシな方だ……大体彼女だって……こんな化け物屋敷に来たくて来んじゃ無い。

「はあっ……全く奴らの言い分はまるで子供だな！」

「まあ我が儘な子供の意見なんて、無視して良いよこの場合……」

そう言ってくるのは、俺の弟のヴァインだ、俺と同じ赤毛で前髪を垂らしている、制服はエリート職の白だしかも、この国の将来の王だしかし、俺は王族の地位とかには興味は無いそんな地位より化け物を相手にしてる方が俺向きだ……

「しかし改めて見ると……」

「パワハラて言うやつだね、これは？」

確かに魔王等従える魔女等追放しろとか、魔獣王は早く封印しろとかだ恐らく裏がある。

「多分……ラボだな」

その時ドアがノックされた。

「局長カレン・ノア出頭しました。」

「同じく！エレノア・アリアドネ出頭しました。」

「いいタイミングで、来てくれたよ……」

二人が局長室に入ってくる。

「サラ・フェンリル出頭しました、遅くなって申し訳ない……」

これで全員だな、さて秘密会議を始めるか。

それぞれ、ソファアに座る会議を始める前に、集まって貰った理由を先に伝える最初に、切り出したのはエレノアだった。

「えーっと、で、ですね……」

「敬語抜きで良いよ、エレノアさん。」

ヴァインが、エレノアの様子を見るに見兼ねて、助け舟を出す周りも釣られて苦笑する。

「コホン……じゃあ言うでイリアさんの何処に、あいつら不満持ってたんねん？」

「確におかしな話だ、嫉妬でこちらの仕事を潰さないで欲しいものだ。」

カレン・エレノアが口々に発言する。

「私はイリアとフェリオの二人は、正当に評価されるべきだ。」

サラ將軍も同意見だった。

「問題は誰の指揮下に、彼女を置くべきかですね？」

ヴァインが、もつともな意見を言った。

「皆の意見は解った、しかし俺は彼女を部隊長にしようと思う。」

「ぶ、部隊長！？幾ら何でも早すぎやで、後最低でも4・5年は掛かる……うちは反対や……局長アンタ……イリアさん殺したいんか？」

「まあ待て、局長の意見も聞こう話はそれからでも遅くない。」

興奮したエレノアを、カレンが止める。

「理由は、彼女の魔王の力だフェリオが安定を保ってるのがやっとだったなカレン博士？」

「その通り今は、安定しているが……いつ覚醒してもおかしくない……」

「！」

「……」

エレノアは沈痛な顔をする、そしてサラ將軍は目を閉じたままだ。

全員の沈黙を待つてヴァインが口を開く。

「今の現状じゃあ、誰も彼女を部下に欲しがらないでしょう。」

「そ、それやったら隊長候補のローザリア・ユーロ・クラウドはどや？あの三人かなりイリアさんに助けられてるで。」

エレノアの気持ちも、分解らんでも無い、彼女は元国防軍参謀部の上級士官だった……無能な上官のせいで、怪物討伐で、かなりの犠牲を出した責任を押し付けられてほぼクビ同然で此処に来た。

「確かにあの三人なら、大丈夫だろう……」

「だったら何故!？」

「部下が、納得しない!」

サラ将軍が強い口調で、言い放つ、

「僕も同意見です」

「そうだな……しかし問題だぞ彼女の階級ではな」

ヴァインやカレンが口調に意見を言う……俺も決断を下さねば、集まって貰ったメンバーに申し訳ない。

「彼女の階級を一階級上げて中尉とする、理由は先月の訓練で……遭遇した魔神を撃退したものによる。」

もう誰も黙って居る構わず話を続ける。

「エレノア連隊長、本日をもって保安部の連隊長を解任する、理由は民間人を事件に巻き込んだ事だ……表向きはな、君には新しく創

設される騎士隊の隊長参謀に、就いてもらう。」

「解ったわ……それで……部下の人は？」

「実力の有る者を……ただし各部隊で厄介者つまり……」

「分かりやすく言えば……連中にとって、扱いづらい連中やな。」

大聖堂騎士団は半官半民の武装機関でも有る、騎士隊には、軍から出向してる連中が頭を占めて居るそこから、使える連中をこっちに引っこ抜いて彼女に当てる……後は彼女次第だ。

「うちが参謀として、誰が副隊長なん？」

「それは僕の方で、うってつけの片を就けますよ」

「なお新騎士隊は、フェンリル・ナイト魔狼騎士団と同じ特務機動部隊とする」

俺とヴァイン以外の全員が怪訝な顔をする、まあ当然かそれを踏まえて説明する。

「他の騎士隊と同列に扱うのは危険だからだ、魔王に覚醒の可能性が有り、その上自分達よりも潜在能力が上だったら……誰もが彼女を敵視するそう成ったら、彼女を含む全員が孤立する。」

なににせよ部隊の区分けは必要だ、問題視する馬鹿が現れる前に先手を打つ！それしかない。

「彼女の能力だが、格闘技能はフェリオのサポートを含めば、Aランク、次に射撃はAランク、そして魔力はD〜Sランクと出た。」

「何よ！？その魔力の不安定差！魔術師として完全に落ちこぼれやん？」

「この魔力の件は、問題に成らないだろう、彼女は国防軍士官の時から魔力テストは最低ランクだ。」

エレノアとカレンのやり取りを聞くしかし、彼女には悪いが不運属性でも有るのだろうか……

「では、この件はこれで終了とします。」

「次の件は、彼女の件とはシャレにならない。」

「……………」

全員の沈黙を待ってから、一番厄介な件を告げる。

「大聖堂騎士団内にスパイが紛れ込んで……」

「……！」

「エージェントからの情報だ間違いない」

恐らくは、身内（軍）または最近動き出した【世界再建議会】だろう、警戒を強めるか。

「うちらはスパイまで、相手せんとあかんのか……」

「スパイの方は俺の方で何とかしよう。」

取り合えずは、内部の連中……ラボ繋がりだな。

「済まない局長。」

「サラ將軍どうかしたのか？」

「今度の空中艦隊の演習延期には出来ないだろうか？」

「難しいな……もうスケジュールは組まれて……まさか!？」

流石は魔狼……俺もその可能性を見落としてた。

「つまり將軍は、内部の連中とラボそして国防軍の三つがつながってると？」

「あくまでも可能性の一つだ。」

「解りました、艦隊演習に参加を要請しますサラ將軍。」

「解りました、演習中……魔狼の眼を光らせましょう。」

「ではこの会議は、これで終了とするなお本件は一切他言無用とする。」

無言で全員が頷き局長室を出ようとする。

「エレノア連隊長、少し良いか？」

「奇遇やな、今うちもそう思ってたんよ。」

どうやら同じ考えらしい。

「さて本音で、話し合いしよか？」

「そうだな……立ち話も何だ、座って話すか？」

俺と彼女は向かい合ってソファーにすわる。

「それでイリアさんを、どうしたいん？」

「そうだな……せっかく魔王の力を……手に入れたんだ使ってみた
くなった……とか？」

「局長……笑顔で殴って良い」

「嘘だよ、安心しろ……」

ニコニコ笑顔だが、エレノアの背後に恐ろしいオーラを感じる……
冗談半分でフルボッコにされそうだ……

「本音は、彼女と君達の為だ。」

「うちの為???」

「彼女は自分で、何でもしよい込もつとする。」

「六ヶ月前に、一人でフェリオを助けに行こうとしたで……」

「つまり騎士団と同列だと……分かるな？」

「そう……やね……自分のせいにしてまう……そんな娘や……」

全く……少しは仲間を頼れ！それが彼女の欠点だ。

「人事の件やけど……うちがこれや、と思った人材がかまへん？」

落ち込みそうな、雰囲気を打ち払いながら聞いてくる。

「それぐらいは連中も文句は言わんだろう」

腕組みをして、そう答える。

「じゃあもう……行くわ、ついでに一つ言っとくで……」

去り際エレノアが俺に一言。

「魔人兵計画に付いて、局長は関与してへん？」

あれか……魔人を改造して兵士として使う研究か……

「大聖堂騎士団の前任の局長は、この件については事件が終わった後だ関わるのは……」

「彼女……隊長にしたら薄々気付き初めるで……」

「気付くまで絶対に言っな！」

強い口調で釘を刺す。

「でも彼女を騙すんは……」

「君が耐えられなく成ったら彼女に話しても良い。」

全く君もまだ子供だな……

「全部話すで……うちが知ってる事……でも噂レベルやけど……」

「その時は俺も協力する。」

やっぱり俺は女の子に弱いらしい……

「それじゃ行くわ……」

「最後に君の階級を一階級降格する、そしたら釣り合うだろう?」

「でも二人中尉がおるで……」

「階級なんて、意味がない彼女の指揮する部隊は、民間出身で固めれば良いさ。」

「やっぱり、女の子に局長は甘いで。」

そう言ってエレノアが部屋を出た。

エレノア・アリアドネSide

あの会議から一週間後、そろそろ新任の隊長と成った彼女が来る。

うちが保安部から、引っ張って来たメンバーは以下の通りや

アルト・ファルゼス小尉

リフィア・ウオード小尉

楓（半獣人）曹長

アリシア・コードウエル：小尉

レイラ・フォーエル：小尉

スコット・ベール：準尉

シルビア・フォート：曹長

レイス・マカリストアー：軍曹

ジャック・フォルト：伍長

マリアベル・アミュレット：小尉

ロバート・ミューラー：曹長

スミス・ジェス：伍長

フィーナ・ローズウッド：中尉

エレノア・アリアドネ：中尉

フェリオ・キサラギ伍長

イリア・キサラギ：中尉・隊長

以上のメンバーや、女子の比率が多い？仕方が無いわな……男子片っ端から声かけたけど……中々……ヘッドハンティングに、掛からなかったんよ……まあ今のリストのメンバーには役職を与えて、後は歩兵隊やね……まあ数は有るんやけど……その……150人しか認められへん、かったんよ局長に……恫喝……もとい要請といったから……後なんとか50人は追加されそうやな頭痛で……

ドアをノックする音がした。

スコット君が来客をうちに告げる。

いきなり階級無視で隊長か……気絶さんといてな……イリアさん……

「人事部から……こちらに配属との通達が有り出頭した、イリア・キサラギ中尉です！」

初日から……カチコチやないか……取り敢えず……和まそう……

「ようこそ第16特務騎士隊へキサラギ中尉。」

「ハッ、よ、よろしくお、お願いします……」

敬礼を交わして挨拶を終える。

「びつくりした？イリアさん。」

「は、はい、いきなり……こちらに行くようにと言われて……」

「リラックスして良いよ。」

「わ、解りましたエレノア中尉。」

「あー……此処じゃ階級なんて意味無いねん。」

取り合えず彼女に、我が隊の状況を伝える。

（勿論あの会議の件は今は内緒や……）

「だいたいの事情は解りました、それで隊長は？」

「何いつてんねん、イリアさんで決まりやで……」

軽い冗談でイリアさんに指を指して教える。

「わ、私が……隊長……？」

自分の顔に指を指してうちに聞く……まさか……

「もしかして……何も聞かされてへん？」

コクコクと頷く、彼女……後の展開見えたで局長。

「冗談抜きで、イリア・キサラギ中尉アンタやで……」

（まるで死刑宣告やな……）

「うん」

バツタリとその場で気絶する……うちは騎士隊のみんなを集めてイリアさんを介抱した。

（まあ……いきなり隊長で言われたら普通はそう成るわな……局長……覚悟しいや！）

無論……局長をシバきに行こうとしたらみんなに止められた。

第7話〜第16騎士隊創設秘話〜（後書き）

一部描写を変更しました。

第8話 イリアとフェリオの訓練（前書き）

誤字がありました。

申し訳ありませんでした。

第8話をミスで消してしまつて申し訳ありませんでした。

第8話のストーリーを一部変更または描写の変更をしました。

第8話 イリアとフェリオの訓練

イリア・キサラギSide

今私は、フェリオ君の勉強を、仕事の合間に見ている、フェリオ君はこの前の試験で、信じられない成績……つまり赤点を出してしまった……その為今フェリオ君の理性は、限界に近づいている……そのうち本に噛み付きそうだ……

今彼は隊の非番の仲間と猛勉強中なのだ……

（皆さん本当にご迷惑なさい。）

「うあああっ！」「」

可哀相ですが無視します。

「だああああっ！」「」

頑張つて、フェリオ君我慢だ私……

「ぐおおおっ！」「」

プチ……（我慢の限界です！）

私は消しゴムを取ると、フェリオ君の頭目掛け手加減をして投擲する！

「「痛っ！……マスター」」

頭を抑え私を睨む、フェリオ君しかし私は魔王化してにこやかに。

「ふ・え・り・お君、お願いだから静かに勉強して」

と笑顔で彼に頼む……

「「は、ハイ……マスター！！」」

そんな時だディスプレイに予備だし音がなり、私は相手の顔が映るのを待つ予備だしの相手はカレンさんだった。

《忙しい所済まない》

「どうかしましたか……カレンさん？」

何か有ったのだろうか？ 凄くカレンさんが嬉しそうな顔をしている。

《フェリオのギガ・ガレットの改良型が完成した》

「「完成したんですか！？」」

嬉しそうに、言うフェリオ君。

《そこで今からテスト兼ねて訓練を行うから取りに来て欲しい》

こう言う時は、絶対ろくな事に為らないしかし訓練で一体何をするんだろう……

《何なら、フェリオ一人でも良いぞ》

「それはダメです……分かりました、私とフェリオ君と後手の空いている隊員の方を連れて向かいます！」

実はフェリオ君一人では、危険なのだ……以前騎士候補生として通路を歩いていたらいきなり女性騎士候補生達にフェリオ君が囲まれた。

その時は、サラさんや副将の力オスさんに助けられた、フェリオ君一人でカレンさんの所へは絶対に行かせる事は、出来ないただでさえあの時……泣き顔だったのに。

「場所は何処でしょうか？」

「場所は第2野外研究部だ。」

第1研究部は施設内に、有る第2研究部は屋外だ此処からだと言ったと2時間位だ。

「分かりました、第2研究部ですね直ぐに向かいます。」

「ああ、急がなくても構わない。」

そう言っただけで回線は切れた。

メンバーは私とフェリオ君・リフィア・楓・エレノアさんだ、騎士隊長室はアルトさんに任せて第二研究部に向かう。

向かう途中でローザリア分隊長に会った、青いロングヘアを束ねて赤い瞳の美人だが冷たい印象を周囲に与えがちだが性格は普通だ。

「あら、イリア隊長お久しぶり。」

「お久しぶりです、ローザさん。」

彼女とは騎士候補生の時から、色々と教えてくれた私も始めはフルネームで呼ぼうとしたら怒られた。

「今日はどちらへ？」

「カレンさ……いえ博士にフェリオ伍長の武器の件で呼ばれて、第二研究部に。」

「そう、私はこれから書類の整理ですでは頑張ってください。」

そう言っただけで彼女は、第4騎士隊室に向かうこちらも早く第二研究部に行かないと。

「ローザさんですが、少し冷たそうですね？」

「楓ちゃん、人の悪口は言わないの。」

楓では研究部で働く清音の妹だ二人は妖狐の姉妹だ、楓の方は父親の血が強く出た為外見は短めの、狐の尻尾がある位だ、姉妹とも、髪で彼女は髪をショートボフにしている性格はおっとりしたのんびり屋だ。

さて第二研究部が見えてきた、入口にカレンさんが腕組みをして私

達を待っていた。

「10遅刻だ……」

「遅れて済みません。」

「ごめんなさい……」

「済みませんです。」

「時間気にせーへんで、カレン姉さん言っとたやん？」

と口々に言葉をのべる。

「よし、これから改良型のギガ・ガレットの性能テストを行う。」

とカレンさんは足元のトランクケースを開ける。

「何か、前より大きく成ってる！前は腕にはめるだけ……これじゃ片腕が一つすぽりと……しかもクローじゃあ無くてブレード!？」

フェリオ君が、目を大きく開けて驚いた正直私を含む全員が同じだろう。

「クローよりも見栄えの良いブレードにして、アサルト・マシンガン・やバズーカ砲並の砲撃能力を追加した」

フェリオ君が複雑な顔をしている。

カレンさんは魔改造した、ギガ・ガレットの説明をしていたとても

嬉しそうに。

「注意事項を先に言って、おく魔弾はフェリオの魔力を使っているからブーストの際はオーバーロードに注意しろ片腕が吹き飛んでも知らんぞ！」

そんな物騒な改造したですか？

「安心しろ、ただの冗談だそれとキサラギ隊長」

この人の場合冗談に聞こえない……

「はい、何でしょうか？」

嫌な予感がする……

「君にも、参加して貰う。」

「私はフェリオ君、見たいな才能は……」

「これは、副局長命令だ！」

選択肢は無いんですね……

「分かりました、キサラギ騎士隊長訓練に参加します。」

そして訓練所に通された、かなり広いまさか此処で総合火力演習で
むしろと……

（主に大砲や戦車の性能テストに使う所よ……此処は。）

「ルールは、イリア隊長とフェリオ伍長の連携で敵を倒す事……なおどちらかのアラームが鳴った時点で二人の負けだ！」

かなりハードだ、でもフェリオ君とならやれる。

「敵は新型スパイダー50機とリーダー機はケンタウルスそれにトラップが一つ隠して有る言い忘れていたベスパもいるからな。」

とにかく、負けない様にしないと。

「後敵の弾は統べて模擬弾のペイント弾だ、安心して当たってくれ」

（あ、当たりたくなーいつ！）

「では、始めるぞ清音まずはスパイダーとベスパだ」

ベスパ！？あの空中無人偵察機、あれは各国で対人兵器として使われている。

形は 型で、中央にローターが有る言わば無人ヘリだ。

ケンタウルス型は最新型の多脚戦車で、六本脚の大型機だ武装は主砲一門にアームバルカンとグレーネドを装備していたはず。

清音さんがコンソールに触れる、隠し扉が開き大量のスパイダーが外にあふれ出て来る……

（うあーっ、悪魔に見そう……この光景）

スパイダー全機がフォーメーションを整える。

《来れより、訓練を開始する》

「行くわよ、フェリオ君！」

「はい、マスター！」

私達は、スパイダー達の攻撃をかわして、二手に別れて行動するフェリオ君が魔弾をアサルトモードで放ち次々と片付ける。

《ほう……ならばスバを三機出せ……清音。》

《了解……スバ出ます。》

三機のスバが互いに連携攻撃を開始する反射的に遮蔽物に隠れる、ペイント弾が遮蔽物を青や赤に染め上げる。

「地上（下）は私に任せて、フェリオ君は上を！」

「分かりました、マスター！」

フェリオ君が地面を蹴って、跳躍する。

「はあああっ！」

一機目をブレードで突き刺す……そして、踏み台にして二機目をあろう事か蹴り飛ばす！三機目は距離とろうと離脱しようとした所を狙い撃たれる。

「バスター・シュート！」

呆気なくレーザー状の魔弾によって墜落する。

地上ではイリアがバスターソードで、数の多いスパイダー達を相手に戦っている。

その時スパイダー達が、一斉に今までのパターンを変え激しい攻撃を開始する！二人はとっさに遮蔽物に身を隠す。

エレノア・アリアドネSide

「何やあの動き！？……隊長やフェリオについて来てるであの多脚等……カレン姉さん……まさか？」

「あの多脚戦車達は、一機つづ撃破されると攻撃パターンがそれ元に学習し変化するつまり、レベルアップだ。」

「ターゲットが、レベルアップしてどーすんねん！」

「エレノアさん、落ち着いて下さい。」

「そ、そうですよ。」

楓と清音の二人が、うちをなだめに来る……

清音は楓の姉で、髪の色は金髪や目の色は青で眼鏡を掛けとる生徒会長見たいな雰囲気があるな。

その時や、この訓練の仕掛人が来たんわ……

「二人共頑張っていますね、おやエレノアさんご機嫌なめですか？」

「よく言わ、これ訓練やのうてただのなぶり殺しやんか……？」

余りにも腹が、立ったんで皮肉を口にする今は副局長のニコニコ顔が腹立たしかった。

「副局長は、女子供をいたぶるのが趣味なん？」

つい、口調がきつくなった。

「いえ違います、エレノアさん二人には今以上の成長をそして自身の限界を知って貰う為です。」

「あんな痛め付けみたいなの？あれが実戦やったら確実に死どるで……」

「では貴女は、キサラギ隊長とフェリオ君達を殺したいのですか？」

殺し……たい……や……て、うちが？副局長の冷たい、いや氷の槍見たいな言葉が胸に突き刺さる。

「うちが……隊長やフェリオ殺すやて……？」

「そうです、このままでは確実にあの二人は死にますそして貴女もです」

うちのやり取りにリフィア・楓・清音の三人は身を硬くしてる……

「副局長のやり方が、少し気にいらんだけや……」

「敵を知り己を知れば、て奴ですよいずれ分かります。」

なるほどな……うちも、まだまだやて事が……考えてもしゃない今は訓練の結末でも見てよか……やっぱり内もまだまだやな……

フェリオSide

スパイダー達の激しい、攻撃に徐々に僕達は圧される足元に違和感を感じた…その時マスターの周囲に、バリアフィールドが展開して僕達は分散された、それだけでは無い隠し扉から三機の零式が現れた。

《フェリオトラップに引っ掛かるなんて、まだまだだな！》

《蒼い獣王か…腕が鳴るぜ！》

《フェリオ君、お手柔らかにね》

ルースさん率いる零式戦車隊【デス・ハウンド】が迫る。

「マスター！」

（フェリオ君は、ルース隊長達をお願い！）

マスターが他脚を次々と倒して行くそして遂にケンタウルスが起動する。

《フェリオ……覚悟！！》

ルースさん達零式戦車隊が、一斉に主砲を放つ僕は遮蔽物を楯にして避ける、さつきまで居た場所はペイント弾で赤く染まっていた。

《やるな！フェリオ良し、カイル・レイン、フェリオにデス・ハンティングを仕掛ける！》

二機の零式が二手に別れて、正面からルースさんが突撃して来る。

僕は直ぐさま回避に専念する。

《甘いぜ、フェリオ》

とカイル機が僕目掛けて砲撃を仕掛けて来る、直ぐに別の方向に逃げようとする。

《ゴメンね〜フェリオ君！》

レインさん謝るなら、撃たないで下さい……

とにかく、避けるしかない遮蔽物に身を隠す……

（デス・ハンティングか厄介だな……まるで狩りだな……）

彼らの戦法は一人が、追いつみそこを二人または全員で攻めると言う物だった……なるほど【狩り】と言うのも頷ける。

並ば獣王らしく、狩りをさせてもらおうまずは一人ずつ片付ける。

そして、素早くマスターと合流する。

《フェリオが……消えただと……？》

《センサーやレーザーは正常だぞ！》

《嘘！？信じられない……》

さて本気を出せば、ステルもどき位は僕でも出来る……気配を殺し目標に近づく……そして襲い掛かる。

まずはカイル機からだ、人型に変身してありったけの魔弾を周囲に叩き込む、爆炎と衝撃で今頃センサーはパニックを起こしてる筈だ。

《カイル、後ろにフェリオがいるぞ！》

ルースさんから警告を、受けてカイル機が変形して上半身を向けるだが遅い素早くジャンプをして、真上に飛び上がりギガ・ガレットをコックピットに向けてロックオンする。

《撃破された！やるなフェリオ》

《カイル機がフェリオ君に……負けた！？嘘》

《相手はフェリオだ……油断したら負けるぞ、レイン！》

と口々に二人は連絡を取り合つて、僕を警戒する僕は素早く着地すると魔獣に変身をして勢い良く走り出す目標はレインさんだ。

《よし、見つけた！》

先手を取られた！ガドリング砲が襲い掛かる、ジクジクに回避に専念して魔弾を撃ち込んで旋回機能を奪う。

そして呆気なく勝負はついたカイル機同様に、コックピットをロックオンする。

《あーあ、負けちゃった。》

次はルースさんだしかも手強い事如くこちらの攻撃をかわす、驚いた事はスピントーンで攻撃を仕掛けて来たことだ、危うく負ける所だった。

訓練開始から既に、2時間が経っていたマスターは他脚をケンタウルス以外全て撃破している……しかしそろそろマスターは魔力の消費が激しく、なつて来ている……限界は近いだろう……僕はルースさんとの勝負を付ける事にした。

《焦つるのか？フェリオ》

気付かれた？

「ええ……でもマスターの救援には、貴方を倒さないと行けない。」

駆け引きでは無く本心を言う。

《なら迷うな俺だけ……倒せばいい。》

確かにそうだ。

「全力で倒します！」

ルースさんとの戦いは、激しかった互いに決定的な、攻撃を繰り返さずに膠着して来た全くお互い隙が無い。

遮蔽物を利用しながら、攻撃を互いに繰り返す。

僕は一つの賭けに出た。

《また隠れたのか、フェリオ……何！？》

そう僕は遮蔽物を駆け登り、ルースさんの真上に飛び上がるそして魔弾を真下に撃ち込むしかし、ルースさんはバックで素早く後退して反撃して来る。

ルース機の周りを走りながら様子伺う、向こうもこちらの攻撃を警戒して撃って来ない。

《なあ、フェリオそろそろ……》

「はい、決着を付けましょうルースさん。」

その時、僕達の敗北を知らせるアラームが鳴り響く……マスターが敗北したのだ……

《これにて訓練を終了する。》

カレンさんの声が無情にも響き渡る。

《フェリオ……今回はオレ達の戦いは引き分けだな。》

「ええ……残念です、ルースさんでも次は勝ちます！」

ルースさんが僕に、残念そうに言ってくる僕も彼に自分の気持ちを伝える。

「ゴメンね、フェリオ君。」

マスターが僕に謝ってくる、胸ねあたりが青く染まっていた。

「僕もあのトラップを見抜け無かったんです、ごめんなさいマスター……」

とマスターに謝ったそこえ、副局長が皆を連れてやって来る。

「皆さん訓練ご苦労様でした、キサラギ隊長とフェリオ伍長お疲れ様です。」

僕達に言葉をかける、副局長でも表情は厳しい……

「まずフェリオ伍長……君はあのトラップをもっと注意していれば見抜けましたね」

「はい……副局長……」

確かにそうだ、トラップだって注意していれば見抜けた。

「つぎにキサラギ隊長。」

「はい……」

「もう少しフェリオ伍長と連携を、上手くしていればケンタウルスを倒せましたね。」

そうか！副局長は……

「貴女達は見事なチームプレーが出来ます、しかし自身を危険に晒し過ぎです！」

全員がその声にビックとなる。

「もう少し貴女達は、仲間を頼るべきです今のままでは貴女達は勿論全員が死にます！」

……言葉が見つからない。

「後は自分達で答えを見つけて下さい、以上解散」

そして今日の訓練は終わった。

イリア・キサラギSide

隊長とフェリオの訓練から、三日立った。

フェリオ君は零式戦車隊のルース隊と特訓の最中や何でも、あの後互いにライバルと宣言したまあ……別に止める必要無いし一種のじやれ合いかな？。

そんな事よりカレンさんから、隊長達の戦闘データがハッキングで盗まれたーって、連絡があつた今わたしとエレノアさんと二人で、第一研究部に向かっている。

「遅くなりました。」

「何があつたや、カレン姉さん？」

実験室兼オフィスに入る。

「済まないな、忙しい時に。」

カレンさんが、事情を教えてくれた。

「盗まれたデータは、三日前の戦闘データ特に、キサラギ隊長のデータが主だ！」

「騎士団のセキュリティは要塞並やで！外部からは……」

「不可能ですね……」

「可能性はゼロではないが……恐らくは」

内部！？でもどうやって……内部の監視は厳重なのに。

「スパイダーの一機からだ」

「「！？」」

スパイダーに細工……いつの間に？私は混乱してしまった。

「調査して分かったのだが……スパイダーのブラックボックスが抜き取られていた。」

「す……いや、アクション映画じゃあるまいし……」

エレノアさんがカレンさんにツッコミを入れる。

「もう一つ小細工があった、盗聴機が幾つかあった。」

「「盗聴機！？」」

盗聴機だなんて……誰が……

「それなら、まだあるぞー一番私の腹の立つ事かな！」

そう言つて、カレンさんが、ワナワナと肩を震わせる……

（何だろ……カレンさんが怒る事なんて……）

「それは……これだーっ！」

と勢いよく、机に置かれたのは……

「フェリオ君？とは違うわね……」

「近いけど……似てへんな」

「こんな、こんな、物をーっ！フェリオと呼ぶなーっ！」

思わず、ビックとなつてしまった。

確かに……フェリオ君とは違う、頭は狐・胴体が狼・尻尾は狐……
そして足は象……だった……

フェリオ君が見たら……

（こんな不細工なのは、僕じゃーっ無い！）

と怒り狂う姿が頭に浮かんだ……

カレンさんの怒りは収まらない火山でも噴火したみたいだ。

「盗聴機がなんだ、ハッキング！？面白い私に対する宣戦布告だっ
そんな物は、しかし私の愛しのフェリオ君人形は、こんな不細工な
物ではない……だいたい目が豆粒とは何だーっ、私が作った愛しの

フェリオ君人形の目はもつと、あにめちつくにしたぞ！しかもこんな紛い物に盗聴器を仕込むな　　っ。」

と延々とフェリオ君人形について、熱く語る…。

「そう言えば、カレン姉さん」

「何だ？」

カレンさんの話を遮り、エレノアさんがカレンさんに、関係の無い話をする。

「その……ラブリーフェリオ君親衛隊てのが、有るとか噂で聞いたんやけど」

「フッ……確かに初代会長は私だ！」

「アコギな事はしてへん？」

エレノアさんがカレンさんに詰め寄る

「入会費は10ゴールドからだ、会員証を見せてやろう」

会員証はアニメの魔獣フェリオ君がSDキャラで表情されていた。

「このほかにも、副業でフェリオ君グッズやDVD等を正規ルートで販売している」

フェリオ君グッズやDVDいつの……間に。

「フェリオにお菓子をおごって、交換条件で協力してもらった」

フェリオ君後で歯医者さんに行こうね

「エレノアさん、カレンさん済ません私急用を思い出しました失礼いたします。」

とフェリオ君の所へ大急ぎで向かう。

エレノア・アリアドネSide

フェリオ……災難やな……

「カレン姉さん、もうイリア隊長行っただ。」

「フェリオに後で私から謝っておこう。」

二人で少し溜め息を吐く。

「カレン姉さん、ハッキングの件やけど……めぼし付いてんの?」

「ああ……四人当てはまるな……」

四人つまり、カレン・リフィア・清音・後……性悪やな。

「私・リフィア・清音は、この件から、除外される。」

「その根拠は？」

取りあえず、事情調書みたいやなと思いながらカレン姉さんの回答を待つ。

「スパイダーのデータ解析は、私と清音が行って此処に居た、ブラックボックスから情報を集める最中だ、リフィアはキサラギ隊長の定期的なメディカルチェックの最中で、ハッキングなんてしている時間が無い。」

そうなると……後一人は性悪やな……しかしそれもカレン姉さん自ら否定した。

「残念だが……性悪にもアリバイが有る……」

「アリバイ？」

「性悪の戦艦ダーク・ウィチ号はその時哨戒任務中だ。」

何や……降り出しに戻ってしもつたな……

時計を見ると、こんな時間か……そろそろ副隊長が来る時間や。

「カレン姉さん、悪いわそろそろ副隊長が来るんよ。」

「そうか、済まない。」

「かめへんよ、それじゃうち行くわ……」

そう言って部屋を出る、副隊長着任をもって第16騎士団【ミユラ

「ジュー・ウルフ」は正式に稼動する……幻影の狼か……だけど幻で終わらせへん絶対に……そう決意を秘めてうちは隊長室に向かった。

??? Side

暗明かりの部屋の中で、モニターの中の人物と会話をしている声からして、モニターを見ているのは女性と伺える、またモニターの中の人物は男性だ。

「戦闘データだが、かなり良いものだった」

「そうで無ければ困ります、解析班に混じってこちらの回収班が活動したのですから」

ブラックボックスの回収は内部に潜入した、回収班が行いハッキングは彼女が行った。

「流石だな……人形使い。」

「自分の人形等割と簡単に造れますわ。」

そう彼女は戦艦に乗艦せず、代わりに自身の人形を戦艦に乗艦させた。

「まさか連中も自動人形だとは思うまい？」

「逸れともワザとこちらを泳がせているのか？」

男は彼女にくぎを刺す。

「所でラボはキサラギ隊長を、無傷または殺さずに回収して欲しい
そうだ……」

「あの女をそれは無理ですわ！それならスパイダーに細工をして事
故を装った方が……」

「それでは、貴重なサンプルが台なしだ……」

「ええ……軽い冗談ですわ」

彼女が言つと冗談には聞こえない。

「所で、フィーナが副隊長に着任したそうだな？」

「小娘同士精々、馴れ合つて欲しい物ですわ……」

皮肉と敵意をもって彼女が答える。

「狂狼と化け猫を、そちらに送つておいた。」

「……」

狂狼と化け猫正直余り係わり合いに、なりたくない彼女はそう心
中であつた。

「そろそろ、時間だな。」

「これ以上は連中に嗅ぎ付けられます。」

無断で回線を仕様しているのだ、そろそろタイムアップと考えるべきだろ……

「それでは、我等が真の主の為に……」

「世界を真に導く王の為に……」

そして回線は切れた……

第8話 イリアとフェリオの訓練 (後書き)

描写を一部修正しました。

- - キャラ紹介2 - - (前書き)

フィーナ達のプロフィールが完成しました。

- - キャラ紹介2 - - -

フィーナ・ローズウッド

髪：薄い金髪

目の色：紫

性格

以前は明るく優しかった。
今は人を遠ざけてる

武装

銃剣

シューティング・スター

魔導弾と実弾の切替可能

特長

ソニック・ブームを放つ
片手でバイアネットを撃てる

補足

エレノア・アリアドネ

栗色のショートボブ

（注：調べるまで分かりませんでした）

瞳：緑

性格：普段は碎けた人柄

怒ると手がすぐに出る

武装

鉄扇と父親仕込みの拳法

鉄扇で演舞

補足

鬼族の父親と魔族の母の間に、産まれた混血。

父親・母親共健在で、現在母親と二人暮らし。

父親は、見聞を広める為に一人旅をしています

たまに、よく分からない

お土産品を、旅先から送って来る。

アルト・ファルゼス

銀色のショートカット

瞳：水色

武装

無名の刀（夢幻流）

居合の使い手

九本同時の斬撃：幻龍

（フェイトの燕返しを、アレンジしました）

性格

穏やかだが、時には厳しい事も言う。

サラ・フェンリル

髪型：紅いロングヘア

瞳：蒼

武装

ロングソード二刀流

魔力の壁（防御）

碎牙（牙突を参考にしました）

性格

穏やかだが厳しい

根が真面目過ぎて、怠け者が嫌い。

イリアに剣術を教えている。

・ ・ キャラ紹介2 ・ ・ ・
(後書き)

頑張ってフイーナ達の話を書きます。

第9話〈副隊長フィーナ〉（前書き）

今回はフィーナ&エレノア視点重視です。

次回もフィーナ&エレノア視点で行います。

誤字と描写を直しました。

第9話　副隊長フィーナ

フィーナ・ローザリアSide

薄い金髪のロングヘアーのエルフの少女が、第16騎士隊ミュラー
ジユ・ウルフ隊隊長室に向かう。

制服は旧エルザリア紋章皇国の親衛隊の上に、大聖堂騎士団の白い
マントを羽織っている。

彼女の紫の瞳は暗かった……

（私は……一体何をしているんだろ……？）

彼女はかつて自分に起きた出来事を……思い出していた。

『いたぞーっ、こっちだーっ！』

『この裏切り者め！』

『構わん、撃てーっ、撃てーっ！』

兵士達が私を追って来る！。

『殿下……アルバート殿下……！』

私の守るべき、主アルバート殿下……幼い頃……私を妹様に優しく

接して、くれた方…彼は今私の前で血まみれになって、倒れていた。

『で、殿下……アルバート様……』

『無事……だっ……たん……だね……フィーナ……』

横たわる殿下の手を私は握りしめる。

『殿下……今お助け致します……』

私は涙ながらにそう、伝える……しかしアルバート殿下の口から、血がこぼれる……

『わ……たし……は……もう、いい……か……ら、は、早く……逃げなさい』

『貴方を置いては行けません！何処にも行きたく有りません！』

私は首を左右に振って子供の様に泣きじゃくる。

その後……私は反逆者として、処刑される筈だった……逸れでも良かった……アルバート様の側に行けるのだから……と思っていた、その後私はフェンリル・ナイトに助け出された。

ふと気付くと、騎士隊隊長室から半獣人の青い髪の少年が出てくる、何故こんな所に子供が居るのだろっ……彼と目が合った。

「お姉さん、こんにちは。」

彼は会釈をして挨拶をして来る。

「こんにちは……ええと君は？」

彼は会釈をして挨拶をする、彼は第16騎士隊「ミュラー・ジュ・ウルフ」のエンブレムの刺繍幻狼が入った黒いマントを羽織っている、彼も関係者だろうか？

「フェリオ・キサラギ伍長です。」

フェリオ、この子が？

隊長か参謀が居るか聞かないと。

たしかミュラー・ジュ・ウルフは軍階級なんて意味が無いと、副局長が言っていた……

「えーと、フェリオ伍長？」

「何でしょうか？」

（うつつ、そんなに覗き込まなくても……）

「隊長はいますか？」

「マスターはサラ將軍の所です、僕は……マスターに叱られて……罰として訓練に……」

罰？訓練？どう言う事だろう……

ドアにノックをして隊長室に入る。

「失礼いたします、この度副隊長を任命された、フィーナ・ローズウッドです。」

私は部屋の隊長執務席の所まで、進むと立ち止まり、敬礼をする、ベレー帽をかぶったシヨーボフの女性騎士が居た、白いマントに緑の制服を着ている彼女も敬礼をしてこちらに返礼をする。

「うちが、この第16騎士隊〔ミュラージュ・ウルフ〕の参謀をしている、エレノア・アリアドネや。」

エレノア・アリアドネ……あの国防軍魔神討伐戦でかなりの犠牲者を出した作戦を反対して、追放同然で騎士団に入った元防国上級士官が目の前に居る。

「うちの顔に、何かついてんの？」

「い、いえ……ただ、以外とお若いと思っただけです。」

（かなり失礼な事を、言っただけかな私？）

彼女は少し苦笑して、から成る程なあ……と呟いた。

「元国防軍の上級士官の肩書の事やな、あれ実は親の七光り何よ。」

「七光りですか……でも……」

そうには見え無い、彼女はそんな雰囲気をもっていた。

彼女が言うには、母親の一族の影響力が強かった、為無理矢理階級

を上級士官に押し付けられたそうだ。

「うちが働ける所なんて、限られつつたさかいな」

「あつ、もしかして、上級士官やったからひよつとして……物凄なお婆さんと思とった？」

少し興味がわいただけです。

「それから此処は、階級なんて意味無い物やから気楽にしてや。」

「それは、局長から聞いていましたが……」

何故階級が意味の無い物？何故だろ……そう思っ自分がいた。

「分からも、無理ないな此処の騎士隊は、半官半民の混成部隊なんよ……」

「成る程それで階級が無意味と……」

そうなんよ、とエレノア参謀は話を締めくくり隊長執務室を出ようとする。

「あの……どちらへ？」

「皆の訓練観に行かへん？今やったら、フェリオと隊長達の戦い生で見られるで。」

ぐいぐいと私の腕を掴んで引っ張って行く。

「さあ早う行かんと、終わって仕舞うで！」

「イタイ、イタイ、分かりましたから……腕引つ張らないでください！」

私はエレノアさんに無理矢理腕を引つ張られて訓練所に連行されるように連れて行かれた。

訓練所には銃騎士隊とフェリオ伍長の姿があった、全員が私達に気が付き敬礼をする。

「皆楽にしてや、今日からうちの隊に配属された、フィーナ・ロズウッド中尉や彼女の隊の役職は副隊長や、皆よろしく頼むで！」

「はい!!」

何だか……この雰囲気は悪く無いが……今の自分には必要が無いかも……

「フィーナ・ロズウッド中尉です、この隊の副隊長を拝命しました、皆さんよろしく頼みます……」

隊員達に挨拶を済ませる。

「それじゃ……訓練を始めるで！銃騎士隊は何時も通り配置に着け！」

銃騎士隊が配置につく。

「フェリオは何時も頼むで！」

「はい！」

そう言うとフェリオ伍長が魔獣に変身する。

エレノア参謀が銃騎士隊に厳しく、驚く指示を出す。

「ええか……白線の中にフェリオを絶対に入れたら、アカン、もし入れたら……アンタ等全員フェリオに食い殺されると思え！」

「「はい参謀殿！」」

(!!)

思わず私は息を呑む……

「フェリオ聞いての通りや、銃騎士隊全員食い殺す気で突こんで来るや！」

《了解です、エレノア参謀》

エレノア参謀が合図を出す！銃騎士隊が一斉に銃を構える……そして、フェリオ伍長が走り出す。

銃騎士隊が先にフェリオ伍長に仕掛ける。

(す、凄いフェリオ伍長も銃騎士隊も……正確にフェリオ伍長を狙って撃ってる。)

フェリオ伍長は驚く事に全弾を完全に避けて、白線目掛け突進して

いく。

《よし、バズーカ及び迫撃砲！撃てーっ！！》

砲弾がロケットが次々とフェリオ伍長に向かって放たれる、その時エレノア参謀の、罵声が通信機越しに流れ飛ぶ。

《砲術隊何やつとんねん？ちゃんと、フェリオを見てんのかつ、砲撃止めいや、銃弾煙で何も見えとらんやろ！》

確かに銃弾煙で周りが完全に煙りで、視界がきかない……

そして、フェリオ伍長が白線を超える……訓練はフェリオ伍長の圧勝だった……

「アホっ、誰がド素人の真似せえと言ったんや！」

「「も、申し訳ありません！」」

エレノア参謀が凄い顔で銃騎士隊全員を、怒鳴り付ける。

「はぁ……もうええわ、後で皆揃ってへばるまでグランド走ってきい、解散や！」

銃騎士隊はグランドに向かって行く、フェリオ伍長は、苦手と言いつつながら今日の訓練のレポートを書くために、騎士隊の自室に戻って言った。

「ああ、副隊長驚きました？」

少し所かなりビックリしました……

二人で今、私達はイリア隊長とサラ將軍のいる修練場に向かっていく。

「さっきは……ごめんな副隊長。」

歩きながら、エレノア参謀が話しかけて来る。

「い、いえ厳しい方々には慣れています。」

「副隊長……一つ約束してくれへん？」

急に足を止め、私の方を振り向くエレノア参謀、その眼は鋭く真剣な物だった……

「絶対に何が有っても、うちらを信じて欲しいんや。」

えっ……エレノア参謀と皆を信じる……どういう事。

「それは……どういう事でしょうか？」

「失礼やけど副隊長は、うちより危なそうやからや……違うか？」

私が危ない……その一言に頭に血が上る……

「うちの言ってる事気に入らへんか？ええよ……うちも副隊長の事気に入らへんから、そんな暗い目した人に隊長をそして、皆を預ける事でけへん！」

「そこまでにして下さいエレノアさん。」

突然の声に後ろを振り向くと、ヴァイン副局長がいつの間にか立っていた。

「副局長……いつからそこに？」

「イリア隊長とサラ將軍の鍛練を見学しようと思っていたら、エレノアさんの怒鳴り声が聞こえたものですから。」

「見られてたんか副局長？何か白けたわ、それじゃ副隊長さっきの事、心の中にも留めとしてじゃあ、うち先に行くで……」

片手を振ってエレノア参謀は私達を置いて修練場に一人で向かう、残されたのは私と副局長だけだ。

「エレノア参謀……僕達に気を使ってくれたな。」

「あつ、あの私……」

彼に、いい訳をしようと考えていたらいきなりヴァインが私を抱きしめる。

「!？」

「フィーナ……すまない。」

「／／／なつ、何がですか？副局長」

私は訳が判らなくなつて、混乱する顔が少し赤くなる。

「エレノアの気持ちと君の思いを、もう少し考えてから、配属を決めるべきだった……」

「副局長……苦しいです……放して下さい……」

（いつもそうだ、貴方はご自分のことよりも私たちの事を優先してましたね）

すまないと言って、私から距離をおく副局長。

「エレノアだが、彼女は昔国防軍にいた……その時に魔神討伐戦で、数多くの兵士が、無謀な突撃が原因で多くの兵士が犠牲になった……」

……

「それも、あの国防軍のバスク中將が彼女に全責任を押し付けて彼女のせいにした」

「……」

エレノアさん……彼女にそんな事が……あつたなんて。

（後で彼女に謝っておこう……）

「さあ、行こうか皆が待っている。」

湿っぽい空気をふり払うように、ヴァインが宣言するそして二人は修練場に向かう。

??? Side

薄暗い廃倉庫の中で、三人の人物が密かに、密会をしていた……

「ケケケツ……さてこれで全員か？」

身長二メートルの大男がドラム缶に腰をかけて話し始める。

「待ちなさい、指定時刻にはまだ時間が有ります。」

発言したのは以前騎士団本部で、ハッキングをした女】だった。

制服でかなり上級の騎士だと分かるが、顔をフード付きのマントで深く隠していた。

「キィシシシ遅れて来る奴なんて、ロクナ奴じゃないねえキィシシシシ。」

そう言ったのは、フードを深く被って顔を隠している獣人の女だった。

足音が近づいて来る、最後に現れたのは、以前ハッキングの報告とキサラギ中尉の状況報告をやり取りした国防軍の将校だった。

「待たせたな。」

「クククッもう少し遅かったら、アンタの首を土産に貰う所だったぜ……？」

「ずるいですねえ……にいさん、人の仕事を横取りなんて、キイシシシ……？」

二人は裏の世界では名の知れた暗殺者だ……

獣人の方は、砂漠諸国を中心に破壊活動を行っている…コードネーム通称【狂狼】そして、女の方は、極東諸国連合の暗殺者通称【化け猫】二人とも、今回初めてこのヴァルゼラート公国に潜入した。

「世界再建議会から指令だ。」

「何と言ってきたのですの？」

「まあ予想つくわなあクククッ。」

「アタシは面白い仕事が良い〜ニヤ キイシシシ……」

二人は狂気を溢れ出してもう一人は、さっさと此処から、帰りたいがっている。

「イリア・キサラギを魔王に覚醒させろ……だ。」

男は淡々と言っ放つ……

（もう少し使えろと、思ったのだが……それもやむを得ないか……）

「では誰がそれを、やれと？」

「狂狼と化け猫に任せるとある……」

「気前の良い話しなこつてクククッ。」

「具体的にどうすれば、良いのニヤ」 キシシシシ。」

三人がそれぞれ質問をする。

「取りあえず、部下を一人始末しろ……それとフィーナ・エレノアを片付けろだそうだ。」

目的伝えると彼は何処かに去っていった、女もまた狂気に、これ以上付き合いたくないのか何処に行った。

「じゃ最初は俺にさせるクククッ。」

「そう言う約束でニヤしたねキシシシシ。」

狂狼が廃倉庫から出て行く、彼女は昼寝を決め込んだ。

フイーナSide

修練場では、エレノア参謀・サラ將軍そして・初めて合うイリア隊長が、サラ將軍と剣を交えていた。

「右からの攻撃が遅い！」

「はい！」

「左がガラ空きだ！」

「はい！」

イリア隊長は熱心にサラ將軍の双剣をかわし、またわ防ぎながら、反撃を狙う。

そして隊長の剣が弾かれる。

「フム……だいぶマシに、なったなイリア隊長。」

「はい……フェリオ君のサポートが無ければ……」

「確かにフェリオのサポートが無ければ、私に二刀流などさせる事も無い。」

サラ將軍の厳しい言葉が続いている、そこにフェリオ伍長が遅れてやってきた。

「マスターお疲れ様です」

「ありがとうフェリオ君。」

そう言いながら、タオルや、飲み物をイリア隊長に渡している、こうして二人を見ていると、本当に中の良い姉弟に見える。

「副隊長さつきは……その……ゴメンやで、さつき此処に来る途中に、ローザリア分隊長と副隊長の事話したんよ……そしたら……ゴメン……少し無神経やった。」

「別に……気にしていませんさつきは私が悪いのですから……」

「せや、いっぺんうちと手合わせやつてもらえへんやろか？」

「……えっ？」

手合わせて……私とエレノア参謀が……

「エレノアさん……無茶苦茶です、エルザリア紋章公国親衛隊の実力は、大陸で1・2を争います！」

「ええ……エレノア参謀ちょうど良いでしょう。」

「せやね、言つとけどこれケンカや無いんやで？」

私とエレノア参謀が視線をぶつけ合う、周りは水をうつたように静まりかえる。

お互いに武器を構える。

「うちは取りあえず、訓練用の警棒でええか？」

「私も余り剣を持った事は有りません、銃剣が主な武装ですから…」

お互いに距離計りまわいを取る！そして同時に仕掛ける。

「はあああつ！」

「やあああつ！」

リーチ面では私が有利だし、かし技や素早さでわ彼女の方が私より上回っている。

「ツツ…なかなかやりおりな！」

「そちらこそ！」

アクロバチックな動きで、私の攻撃を完全に避ける。

（成る程……素早さと冷静な判断力……並ば逸れを逆手に取る！）

私は攻撃の速度を技と落とす、彼女のペースが乱れる。

「成る程そういう手も……ありやな……？」

「余裕……ですか？」

「いや……エルザリアの親衛隊相手に余裕なんかあらへん。」

こちらもう少し疲れてきた向こうもおなじだろう。

「じゃ……終わりにしょか？」

「はい……おしまいにします。」

二人同時にとどめに入る私は彼女の胸に、そして彼女は私の首筋にそれぞれ武器を突き付ける！。

結果は相打ちだった……

エレノア・アリアドネSide

副隊長との試合は引き分けやった。

まあ一種のケンカやったなあれは……勿論サラさんに『修練場で喧嘩とは何事だーっ』で、怒られたけど副隊長がうちの事庇ってくれたんは、以外やった……結局サラさんにグーを二人で頭にくらったけどな。

報告書に目を通していたら、ディスプレイにうち宛ての呼び出しがあった。

「えーと差出人は……ジェスやて？」

ジエスはうちが保安課に居た頃から使ってた、情報屋や……でも実働部隊に異動になってからご無沙汰やったな、取りあえず、回線を開ける。

「久しぶりやな、ジエス。」

《エレノア嬢ちゃん相変わらず元気そうだな?》

「挨拶しにきたん?」

『いや……嬢ちゃんに忠告だな今日は……』

(忠告?どうゆことや?)

《狂狼と化け猫が来た……》

「なんやて、あんな化け物……二人やて……一体どうやって?」

あんな凶悪犯簡単に入国出来るか。第一すぐに審査でアウトや。

『それが……正規のルートで入って来た。』

「そんなアホな事……」

そう言いかけて顎に手を掛けて考える……。

(入国審査は厳重やし、必ず最初にチェックが入る……となると……
…答えは一つやな?)

「で……誰が手引きしたん?」

《それは俺にも、サッパリだ?》

ジエスは情報収集に掛けては、ピカーやとなると。

「そうかラボやな!それで他に知らせた?」

「もう嬢ちゃんの古巣にはまっ先に知らせておいた。」

やっぱりアンタは頼りになるな。

《嬢ちゃんも気をつけろよ……》

「?」

《どんな事件か知らんが昔の事件調べてるだろう?》

「バレた?」

カンの鋭さも敵わんな、アンタには……

「何で教えてくれるん?」

《得意先の嬢ちゃんは、良い客だからな……客が減ると俺の稼ぎも減るからな……》

「ありがとうやで。」

《詳しい事は送ったから後で目を通してくれ……》

「報酬は？」

ジエスは生粋の商人やさてどんな値段を……

《今回はタダにしとくぜ。》

「なんでや？」

《理由は良い客だからな。》

そう言いって回線が切れた。

さてと、データが送られて来たな……どれどれと

〔魔人兵士計画報告書〕

やて！？ジエス……アンタ何処まで知ってるんよ！
今はそれ所やない……

報告ファイル

魔人化は完全に失敗……

被験体の精神状態が不安定になり暴走する、当時 施設職員500
人と国防軍約一個連隊を1時間たらずで全滅させる……

被験者名

Ⅱ ⅴ。

アカン……データファイル壊れとる……まあ一種の収穫はあったな。

断片的やったけど……被験者は【狂狼】や……

さて疲れたから早う寝よか……化け猫……嫌な名前聞いたな……寝て忘れよか……

第9話〈副隊長フィーナ〉（後書き）

狂狼のモチーフは、Gジェネレーションの参加作品OOのサーシェスさんを参考にしました。

化け猫はメルブラのワラキアを参考にしました。

一部描写を修正しました。

第10話 狂狼と化け猫（前書き）

エレノア視点・フィーナ視点の後半のストーリーです。

一部表示を変更しました。

一部描写を変更と修正しました。

第10話　狂狼と化け猫

『こ、後退命令を……』

『ぐあああつ』

『し、司令早う撤退命令を……このままじゃ前衛が全滅してしまいます。』

『全陸上戦艦砲撃用意！』

『……司令駄目や味方まで……』

うちの叫びも虚しく砲撃が地上艦から放たれる……そして……うちのせいで大勢の兵士が死んだ……

アレはうちのせいや……うちが……見殺しにしたんや……

『そう……全ては貴女のせい……紅姫。』

懐かしい声に振り向くとサクヤ姫が顔を伏せて泣いておった……

「サクヤ姫……うちは……」

『私を見捨てて、国を棄て……ただ逃げ出した……貴女に……私の辛さがわかる……紅姫！』

白く長い髪が逆立ち純血の九尾の尻尾が全て広がる。

「さ……サクヤ姫……う、うちは……」

『来ないで!!』

髪を振り乱しうちに襲い掛かって来るサクヤ姫……

「うち……いや……私は一度も姫を見捨てた事はありません。」

姫の両手が……うちの両頬を掴む……

「アタシの顔をこんな風にしたのは……紅姫ねえさんだよ……キシシシッ。」

「お前は……は、放せはなさんかいつ、化け猫っ。」

「一緒に地獄に行こうよ……ねえさん……キシシシッ。」

(やめろーっ、放せーっ!!)

キシシシッ、キハハハはははーっ!

さあ……今度こそ……一緒に……

「うああああっ!」

がばつと布団を引き離しステンレスのコップに水を入れ……一気に飲み干す。

「はぁ……はぁ……はぁ……うちを殺しに……来たんか?化け猫……クソっ!」

自分でも怒りに歯止めがかからん……

「はぁ……はぁ……うああああーっ、早う殺しこい化け猫がーっ
！！」

コップをドアに投げつける！ガシャンとコップがドアに当たって跳ね返る。

「くくくく……はははっ、あはははーっ！」

両腕で脇腹を締め付け、ただ狂った様に……うちは笑い続けた。

ドアをノックする音がした。

「エレノア参謀……大丈夫ですか？入りますよ。」

フィーナ副隊長の声に思わず、ビクとなる……今は真夜中の零時や……かなり……ご近所迷惑してたな……で、そんな事考える場合か。

（しもた……今隣の部屋はフィーナ副隊長が使ってるんやった……）

アカン入らんといてと……言う前にドアが開いた、非常用のロック解除のコードを打って入って来る。

「あ……ちょっと待つて欲しかったで……副隊長。」

「でも……エレノア参謀の部屋からものすごい音が……」

仕方が無いうちは副体長に今までの事全部話しす事にした……

「なあ副隊長……うちの話聞いて……くれへん……少しなごう……なるけど……」

「ええ……エレノアさんの頼みなら……喜んで。」

「初めて……名前で呼んでくれたね？」

「／／／……」

「じゃあ、話すわ……うちは昔、大和王朝国に住んでたんよ今から10年まえやな……そんな頃サクヤ姫と言う九尾の純血の姫様がいてな……うちは姫様のお守り約を仰せったんよ……白髪の可愛いお姫様やった……」

白髪の長髪に狐耳そして紅い瞳……うちは正直この姫様にお支え出来た事がうれしかった。

「その……サクヤ姫と言う方はエレノアさんにとってどんな方でした？」

「せやね……笑わんといてな妹みたいに……思っていた……アイツがちよっかい出すまではな……」

そつ……うちの幼なじみの猫又ミオこいつが姫様にちよかい……いやあれは、わざとやな……うちは姫様に害をなそうとする、ミオの顔に爪で大怪我を負わせた……あれは最初から仕組まれた物やった。

「そんな事が……あつたんですか……」

「そんな時たまたま姫様の前やったのも運が、無かったで……」

そして……うちは姫様に仇なした者として……裁かれる……父がいなければ、今頃は死罪やな……あん時、本当父と姫様には感謝してる、一家共々国外追放にしてくれたんやから。

「湿っぽい昔話はこれで終わりや。」

うちはそう言って話を切替ようとした……

「うつ……うつく……っ、」

「どうしたん？お腹とか痛いん？」

いきなりフィーナ副隊長が泣き出した。

「い、いえ……す、すみません……」

「さあ、時間も遅いし早う寝よか？明日は早いで。」

「分かりました……エレノアさん……ではまた明日……」

うちは彼女をなだめながら、隣の部屋まで彼女を送った……世話の係る副隊長やな……

サラ・フェンリルSide

しかしこんなに遅くなるとはな……いくら弟の caos と剣の修練とは言え、ほどほどにしておかなければ…… 多少し疲れたな…… ムッ……

何者かの気配を感じる……まるで獰猛な獣の様な……嫌な気配だ。

「よう、こんな時間までご苦労なこつて……ケケケ。」

突然背後から声が聞こえる。

殺気……反射的に後ろに向かってナイフを三本投げつける。

「カカカツ！ 甘いぜ、そら、そら、そら、」

素早い動きで自分と同身長の大剣を振り回して来る、私は直ぐに強敵と判断して、二刀流を構える。

「ぐっ……貴様……！」

激しい斬撃を防ぐのがやっとだ！ しかし私とて、素直に負ける積もりは無い、

「はあああつ……！」

「そら、そら、そら、ケケケ！」

大剣が唸るそれをかわす、こんな奴が大聖堂騎士団に侵入したと……セキュリティーは何をやっている。

大剣と双剣が激しくぶつかる、脚に力を入れてひみとどまるが圧されてそのまま後ろに吹き飛ばされそうになる。

「ケケケ……良いねえ殺しがいが、ありそうな狼だなあケケケ。」

「貴様何者だ!!！」

その時背後に殺気が増える……

「困るニヤ」にいさん勝手に別の人襲って……キッシシシ」

「ああっ、たまたま有名人にサインしてもらおうと、思ってた……てめえの血でなっ！」

くっ……避けきれない……情けない……これまでか……

その時数発の魔弾が襲撃者達を襲う。

「マジック・ミサイル！」

「ライトニング！」

声のする方を見ると、フェリオ・リフィアが居た。

「リフィア君では無理だ下がれ！」

「大丈夫です、援護位なら出来ます！」

仕方の無い二人だつ、まずは……この人狼から倒す。

「しかし……あまり無理はするなっ」

「数が増えても……構わねえよ……ケケケ……まとめぶつ殺すからよ……ケケケ……」

対峙したその時、リフィアにフードの侵入者が襲い掛かる、クツ……間に合うか、しかし人狼に邪魔をされる、リフィアにガギ爪が襲い掛かる。

「キヤーツ」

「リフィアさん危ないっ。」

「ふえ、フェリオ君!？」

「フェリオーっ」

フードの暗殺者のガギ爪がフェリオの身体を切り裂く。

「ぐああああっ」

「いやあああっ」

フェリオが崩れ落ちる。

「きさまあああつ」

目の前の人狼と素早く間合いをとると、フード目掛け 衝撃波を放つ。

「ふぎやあああつ」

まともに衝撃波を喰らうフードの暗殺者！素顔があらわになる。

その顔には右頬に引つかかれたような、傷があった。

「キシシシ……見たな……？」

「オイ、引き上げた……」

素早く襲撃者達はその場から消えるように姿を消した、しばらくして……複数の足音が聞こえる……

そのあとやって来た、保安隊に警備と警戒を任せ泣きじゃくるリフィアを連れて、フェリオをカレンの元に運んだ……自分の無力さに苛立ちを覚えた……

エレノア・アリアドネSide

いきなりサラさんとフェリオが教われたと聞いて今、こちら全員がカレン姉さんの所に居てる。

「カレンさん……フェリオ君の容体は……？」

「大丈夫だ、キサラギ隊長わづかながら急所は外れた流石は……フェリオだな後五週間もすればいつも通りだ。」

「隊長……言にくいんやけど……フェリオやサラさん襲った連中……うち知ってる……」

（局長……ゴメン……うち隊長のこんな……辛そうな顔もつ見とう無いんや……悪いけど全部話すで……）

「エレノア……さん……まさか貴女……？」

隊長の顔色が見る見る険しくなる……

「此処じゃ、フェリオの傷に悪い……場所変えよか……」

会議室に入る隊の全員が既に集まって居る、一番表情が厳しいんは隊長や……まあ平手打ち位……覚悟しよか……

「言い訳は嫌やから全部話すは……隊長……」

うちは知ってる限りの事を全員に話す……ただ隊長のご両親の事までは、余り調べられなかったな……

「……エレノアさん今の話の内用は本当の事ですか？」

鋭い視線でうちを睨みつける隊長に、無言で頷く。

「……ッ……」

うちに飛んで来たんは、平手打ちじゃあのとて……グーやった……思いっきりうちは床に吹き飛び倒れる。

口から血が滲む手の甲で血を拭う……

「……隊長……ゴメン……」

「エレノアさん……教えてくれなかった……罰よこれは……」

強なつたな……アンタ……それでこそ、うちの隊長や。

「大丈夫ですか……？エレノアさん……」

フィーナ副隊長が駆け寄る、うちは片手でフィーナ副隊長を制して……一つの策を皆に提案する。

「なあ……隊長うちから提案が有るんやけど……聞いてくれるか？」

「うちは真剣な目で隊長を見つめる……私事に巻き込みたくなかったけど……手段は選んで……時間は無い。」

「手っ取り早く皆に説明したそしたら……全員が反対した……理由はリスクが高すぎるから……やて。」

「ふふっ……あははははっ。」

「あまりの可笑しさに笑いが止まらなくなった。」

「エレノアさん、笑ってる場合……！」

「両手を腰に当て怒る隊長に皆が頷く。」

「ゴメン、ゴメン、あーっ、こんなに笑ったの久しぶりや。」

「策の内用は笑えませんか。」

「アルトが怒ってる言うより、むくれてる。」

「アルちもう、うちは決めたんよ……あの化け猫とケリ着けるて……」

「エレノアさん……隊長、私もエレノアさんの作戦に加わります。」

フィーナ副隊長まで……しゃあ無い……娘やで全く……

とりあえず……化け猫共の住家を強襲やな。

ミオside

騎士隊を追放された、紅姫ねえさんの所に使いを送って6日目そろそろ……向こうから……コロサレに来る頃だね……キシキシッ。

「五月蠅いすわ化け猫！」

紫の三つ編みの髪の毛を弄びながら……フード女はアタシを罵る。

「ケケケッ、おう、おう、お二人さん中のよろしい事で……」

にいさんがアタシ達のやり取りを、楽しんでいる。

「アタシも……にいさんと同じニヤ〜もう少しで、エレノアねえさんを……コロセルから、キシキシッ」

フード女の使い魔の一匹が、エレノアねえさんとフィーナのお嬢ちゃんが来る事を告げる……さあ、楽しい……殺し愛の時間 キシ

シシシッッ。

フィーナ・ローズウッドSide

「狂狼がエレノアさんの仇敵と一緒に？」

「ああ……間違いないやろう……多分裏切り者もそこや。」

廃倉庫が並ぶエリアに来た、此処に来たのはエレノアさんと私だけの二人だ。

「フィーナさん……一つだけ言つとは、何があつても……化け猫とうちの戦いに手え出さんといてや。」

「はい……エレノアもお気をつけ下さい。」

後は隊長達の到着まで時間を稼ぐ……絶対に。

アルト・ファルゼスSide

「1番・2番・3番格隊は順次出勤ッ、ランカスターヘリにスパイダーの搭載を急げ!!」

私はエレノアさんの会話を思い出した……

***Side

『化け猫はうちが仕留める……だけど狂狼は別や、狂狼には……悪いけど……イリア隊長に戦って貰う!!』

『『!!』』

会議室内に緊張が走る。

『それで……参謀はどうする? フィーナ副隊長は?』

古参組のロバートさんがフィーナ副隊長達の案に難色を示す……当然です。

『フィーナ副隊長はうちとアイツラの餌や。』

『それじゃあ……サメの巣の中に餌を抱えて飛び込みモンだ俺は反対だな……』

『確かにリスクは高い……しかし今がチャンスなんよ。』

『チャンス?』

全員が怪訝な表情になるエレノアさんは構わず、話しを続ける。

『つまりな……うちの隊内で……うちとフィーナ副隊長が姿を消して見せてしかも、二人のこの連中のアジトに向かったら……向こうは……こっちが分裂したと思う……いや思わせるんや!』

『一体どうやって?』

リフィアさんが不安な顔で質問する。

『簡単話しや隊長とうちらが、喧嘩したと内部のネズミに教えるや!』

『私も反対です……もしおー』

リフィアさんの意見を遮りエレノアさんが優しくリフィアさんに言う。

『リフィアがフェリオの事で責任を一番感じてるのは私にも十分わかる。』

フェリオ君はあの時夜遅くまで、頑張って報告書を作っていて、リフィアさんに手伝って貰った。

それが原因で、フェリオ君は怪我をした彼が、魔王の眷属で無ければ命が危なかつたろう……

『だからリフィアは今回はフェリオの側に居て欲しいん、よこの意味分かるな？』

『はい……』

エレノアさんがリフィアさんを宥める、やがて強い意思の……いや決意をもって隊長に一つの決断を迫る。

『隊長……実はな危険やけど頼みがあるんよ。』

エレノアさんのその決意そして……隊長の決断に、会議室は騒然となった。

「アルト隊長補佐、出撃隊準備完了しました。」

「解りましたアリシア通信士では、ミユラージュ・ウルフ隊出撃！」

さて、フェリオ君に傷を負わせた代償払ってもらいますよ、僕達も出撃をする。

フィーナ・ローズウッド Side

倉庫エリアをエレノアさんと歩いていく……エレノアさんから念話があった。

（フィーナさん……周り囲まれとる……気よ付けや。）

（はい……でも生気が全くありません……不死系のモンスターでしようか？）

確かに倉庫の屋根な影に隠れてる気配がする……エレノアさんが念話で、相手を教えてくれた。

（今までの性悪のスキルを軽視してた……うちのミスや……あの性悪上級の人形使いや。）

人形使い……主にゴーレムや自動人形を操る魔術師しかこの数は

……100いや……300は居る。

（まあ……うちらを二人殺すつもりやったら……かなり評価されとるな……）

（確かに化け物二人で十分ですね？）

いきなりエレノアさんが大声で叫ぶ、一体何を考えているのだろ……

「「出でこーいつ、狂犬と駄目ねこーっ！！」」

あたりにエレノアさんの罵声が響き渡れる！しばらくして複数の人の気配がする。

「ねえさんひとすぎーっ人をバカネコ扱いなんて、キシシシシッ。」

「うるせいな……フィーナか元氣そうなこつて、ケケケケッ」

狂狼の姿に殺気が溢れ出すが私は、それを堪える私の役目は時間稼ぎだ、あ・ん・な・化け物に私では役不足だ……

（フィーナさん死に急いだら負けやで。）

そう言つてエレノアさんが倉庫の屋根に、ジャンプする化け猫もその後を追う。

（はい、出来るだけ時間稼ぎをします）

「いきます、シューティングブラスト！！」

先手必勝で仕掛けるっ。

青いレーザー状の魔弾を放つ！しかし化け猫は飛び上がって避ける。

「うつ、噓!？」

「ケケケツ……惜しかったなっ。」

狂狼は大剣で私の攻撃を防ぎきった。

「はああああっ」

ソニックブームを放つ。

ジャンプをしてかわす狂狼。

「ハハハさて……何処から何処をどうして……欲しい……アッアッ
?」

「「これでどう?」「」

私は地面にシューティング・スターの刃を叩き衝ける。

土煙と石の破片が大量に舞い上がる。

そして素早く片腕で狙い撃つ、数発の弾を狂狼に見舞う。

「きかねえな……そんな物話はなっ、ハハハハッ」

いきなり首を締め上げられた銃剣が腕からこぼれ落ちる、もがいてなんとか腕から逃れようとするが食いつかれた様に首を絞めつけられる……

「ぐあっ、うつつ……」

意識が……薄れて……行く……不意に……エレノアさん達の顔が浮かぶ……まだ……私……死に……たく……ない。

「ぐああああっ!!」

聞こえて来たのは狂狼の絶叫だった。

「その手を放せ化け物。」

体が自由になる地面に落ちると思ったら、誰かに身体を支えられる。

「けほっ、ごほっ、ごほっ。」

「やあ、お目覚めかな……お姫様？」

意外な人が私を助けてくれた。

「ヴァ、……ヴァイン……」

「積もる話は後にしましょう、フィーナ副隊長。」

そう言って【ロンバルディア&ファイニール】の二丁のバイアネットを構える、彼の銃剣は拳銃タイプの小型紋章兵器だ。

私は安心したのか、彼の戦いを見届ける事無く意識が闇に墜ちる…
…次ぎに気が付いたのは医務室のベッドだった……

ヴァインSide

フィーナは気が抜けたのか、ぐすりと眠っている……アルバート…
…君は悪い奴だ……こんなに君の事を想ってくれる女性（人）は彼女
ただだよ……

「ケケケケケ……ナイトご登場か？ああっ」

「騎士を気取るつもりはありません……どちらかと言えば死に神で
しょうか？」

狂狼は片腕だけで大剣を振るう。

「遅すぎです！」

しかし僕には、かすりもしない。

「デメエ……何モンだ？……何者だーっ」

もう笑う余裕さえ無いらしい……ただ怒鳴り散らすただけだ、なら…
…お遊びはお終いだ。

「言っただけです、僕は死に神だと」

恐怖が狂狼を襲っているのか……逸れとも喜んでいるのか……まあ僕にはどうでもいい話ですね、さてなぶり殺しは趣味ではありませんせんから、さっさと片付けますか。

「レクイエム！」

二丁拳銃の射撃の雨嵐を見舞う、奴はまともに銃弾を食らう。

「ひぎぎぎぎ」

無数の銃弾を浴びて逃げ惑う狂狼……悪党にしては余りにも情けない。

「見苦しい……アズラエル！」

ガンタイプから双剣タイプに切り替え嵐の様な斬撃を見舞う。

「ひっ」

最後まで言葉を紡ぐことは無かった……首が綺麗に跳ねられたのだ。

「さて……アルバートの敵は討ちました……後はイリア隊長達にお任せしますか。」

踵を返して眠っているフィーナさんを抱き上げる。

「アルトさん後はお任せします。」

《ハッ、任されました。》

なにしろ彼に頼んでイリアさん達に無理矢理ついて来たのですから……しかし間に合って良かった。

（アルバートにフィーナさんを頼むて約束されてますから。）

苦笑しながらその場を後にした。

エレノア・アリアドネSide

ちらつと下を見るとちょうど狂狼が副局長に討ち取られた、やっぱり副局長は生粋の化け物やで……しかも先発隊に無理矢理ついて来た。

「まさに……愛の成せる技やな？」

「ねえさんアタシを、シカトする気？キシキシシッ。」

さつきから耳障りな雑音がする……月を見ると紅い月が出とる……駄目猫のお陰で気付かんかった。

久しぶりに本物恐怖味合わせたる。

「自分で言うのも何やけど……鬼姫の恐ろしさ……その身に刻んで冥界に逝きや！」

「そう……ねえさんは生粋の鬼姫って言う化け物、キシキシッ」

昔のミオはこんなじゃあなかった……少なくとも　サクヤ姫に出会うまでは…。

「「グオオオオッ!!」」

天に向かってうちの、叫び声が、こだまする！両手の全ての爪が鋭くなる……眼の瞳孔も猫の眼に近い物に変化する。

「さて……こつちもねえさんと同じ土俵に立たないとねえ……ギニアアアアッ」

ミオも化け物に変わる……爪が刀見たいに伸びる！　牙もまるでサベル・タイガーや。

「「ギニアアアアッ」」

「「グオオオオッ」」

咆哮を上げ激しくぶつかる、ミオはより機敏に、うちはより激しく攻め立てる！屋根の上を飛び回りミオやうちはそれぞれ屋根板を剥がして投げつける。

「キシキシシッ、ねえさんそろそろ……」

「ミオ……何でサクヤ姫に襲い掛かったん？」

以前から疑問だった事をミオに尋ねる。

「簡単な話 姫になれるお人に……純血だが、混血だが……
要らない血統だからキシキシシッ」

そう言つて飛び掛かつて来るミオ。

「そんな理由なるかーっ、ウオオオオッ!!」

うちも同時に飛び掛かる。

「頭、冷やしさらせっ馬鹿ネコ!!」

空中でミオを引っつかんで地面にたたき付ける。

「ぐぎゃ」

「もう……諦めや……さあ誰に雇われたんか白状せえやつ。」

「し……仕事のな、内容バラス……馬鹿は……いない……よねえさん
……?」

そう言つて……ぐったりと動かなくなる……多分毒吞んで自害しお
つた……

「アホ、誰かーっ、衛生班急ぎやつ。」

頭では助からんのは分かっ取る……馬鹿ネコ……殺しの一族に生まれた者は最後は何時もコレや……仕事に失敗したら……だからうち
は姫様以外あの国の事が嫌いなんや……

イリア・キサラギSide

エレノアさんから目標の捕獲失敗とそしてフィーナさん負傷の連絡が入る。

「二人の事が気に入るけど……こちらも、そうは言ってられない。」

サラさんに私は休む用に言った、だけれど……ぜんぜん人の言う事を聞いてはくれなかった。

「まずはこの、デク人形共を片付けるぞ！」

確かに周りのはのっぺら坊の人形だらけだ、ただ彼等全てが腕に武器や腕そのものが剣だったりする。

「お待ちしてましたわ……小娘さんに狼女さん？」

フード姿の女性が鉄塔の上から私達に話かける。

「ケケケツ……俺の劣化クローンを処分してくれるとはなあ……さて何処をどうしてやるつか……ええっ？」

そう言つて狂狼は、も・じ・ど・お・り人狼に変身する、ただし姿は人狼とは違う……一言で言えばサイボーグだ……右腕にフェリオ君の改造ガントレッドが装備されている……左腕は巨大なガキ爪がある。

（イリア隊長……多分フェリオの魔王の力使わんと、勝てん……使うんやったら十分注意しいや……）

エレノアさんの言葉が頭を過ぎる。

「フェリオ君……私に……うっん、私達で勝とう一緒に……」

そう……力だけ求めればやがて……私もこの哀れな魔人兵と同じ末路をたどる、だけれど私達は違う今から逸れを証明する……

「必ず勝とうね……フェリオ君……」

「何勝手な事……吐かしてやがる！」

狂狼がレーザーカノンを放つ、しかし私は瞬時に逸れをかわす。

「サラ將軍は人形使いを、各隊は人形達の殲滅を任せます。」

《了解しました》

「心得た、君はそいつに専念してくれ！」

私は姿勢を低くして、狂狼に突進する。

「ブレード・オン！」

何故か斬馬刀の用な大剣が出現する大剣を下から上斜めに振り上げるレーザーカノンは、砲身から真つ二つに切断される。

「くっ……どんな魔術だ、てめえ一体……何しやがった？」

ガギ爪を振り上げる、が遅い。

「はあああつー！」

「ーっー！」

上半身が吹き飛ぶ……

「まかさ貴方も劣化クローンで……言わないよね……？」

自分が死んだ事すら理解出来る時間さえ、与え無かった……

「回収班後は……頼みます。」

人形達は各隊によつて殲滅されている。

そう言つて通信を終える……私達絶対に彼等に成つてはいけない……

サラ將軍が戻つて来た、表情が暗い……

「済まない……追い詰めたが逃げられた……君にもフェリオにも……
……本当に済まない……」

そう言つて頭を下げる。

「あ、頭を上げて下さい……サラ將軍。」

彼女の生真面目さは、見習つ所があるが……そのもう少し力を抜いてほしいと思つた。

??? Side

「で……二人共失つたと……？」

画面向ここの相手が、私に応える……はつきり言つて大失態だ……もう私に後は無いだろう……

「で……ソフィア……最後の伝書鳩は……」

「多少危険ですが……演習中にも……書管を取り付けますわ。」

最後……つまり切り捨てか……なら彼等も……

「ソフィア今一度と我等が王は機会を、貴公に与えると仰せだ……」

「ハッ……ありがとうございます……」

何とか助かったか……

「これから命令書をそちらに送る……その指示通りに動け。」

「ハッ」

並ば全力で掛からなければ。

エレノア・アリアドネ side

おびき出し作戦は失敗に終わったけど……収穫はあった見たいや……
…保安課から実動隊に異動したから、後は彼等の出番やな。

変わったと言えばフィーナさんやろか、スコット君にフェリオのDVDもろてから……フェリオ君親衛隊に……入った……あのDVDはフェリオの戦闘パターンも幾つか混じってるから……逸れの研究やろか……

ん……コンピューター室から……性悪女のソフィア少佐が一人で出て来た……うちを見るなり……偉い殺気じみた視線、飛ばしてたけどガンの飛ばし合ったら……受けたるか？

一別くれて自室に戻る？

まあ……ええはいずれ証拠は出るやろ……今回はうちらと……ドロ
ーやからな。

理由は状況証拠だけやからな……あんな自動人形は人形使いやつたら誰でもできるしな。

「あのフード女の声かて性悪女にそっくりなだけ……サラ將軍が捕まえようと挑んだら……スナイパーが邪魔したて話やし……」

考えてしかたがない……さつさと、フェリオの見舞いに行かんな
）。。

演習当日自分の判断力の甘さ加減を、思い知らされとは……こん時
露ほと思わなかった……

第10話 狂狼と化け猫（後書き）

次話頑張って執筆します。

「！」の表示を少なくしました。

第11話「艦隊演習」(前書き)

不慣れですが、頑張って艦隊戦の描写に挑戦しました。

表示を修正しました。

表現を一部変更しました。

誤字を発見したので修正しました。

作中に登場する「ヨルムガンダ」は使徒様の超砲艦ドーラとイグ
ルーの同名の兵器を参考にしました。

使徒様のご許可をいただきました。

また内容のご説明が遅れました事を心よりお詫びいたします。

第11話　艦隊演習

空中機動巡航艦

「シルフィード」号

艦橋内Side

イリア・キサラギSide

「アリシア通信士、フィ……じゃなかった、シルフ・ウィンド号は？」

「本艦の右舷後方にて航行中です！」

モニターに映る艦隊は約150隻に上る現在私達ミューラージュ・ウルフをふくめた約30隻がエルティン山岳地帯上空に向かっているただ……かなり離れてフェンリル・ナイトの艦隊五隻の内旗艦シリウスが居る。

「イリア隊長、どうかしたん？」

「ええ……伯父さんの言っていた通り、まさか艦長までするなんて……」

「まあ……慣れるより遣れるや、それに……ようやく白い隊長服やし、馬子にも衣裳やな」

「／／／。エレノアさん！」

「隊長それに参謀ふざけてないで、お仕事して下さい。」

アルトさんに怒られた！

「ごめんなさいアルトさん。」

「アルちゴメンやで。」

高速機動艦ダーク・ウィチ号

ソファ・ブルーダーSide

さて、機関部に小細工をして出港をわざと遅らせる……もうそろそろ……【書管】の投下ポイントね……

「書管の投下準備は？」

オペレーターに状況の確認をする。

「書管投下準備完了」

ふふふっ……さあ、最後の小遣い稼ぎね……正直議会軍の【良い小遣い稼ぎ】と聞かされて関わってみたら、かなり儲かったわこれを元に、どさくさに紛れて他国に自分を売り込むのも悪く無いかしら？。

「もう少し、したら例の世界宣言も行われるハズ……まあ……しばらくは彼等にお付き合いしましょう。」

投下ポイントの湖が見える。

「脱出力プセル投下せよ、投下後速やかに空域を離脱します。」

「ハッ……投下します。」

さて……回収班に後の仕事は任せましょ。

??? Side

《ヘイルダム……こちらイーグル・アイ……魔女を確認した……繰り返す、魔女を確認した。》

湖に着水したカプセルを確認する……既に議会軍の回収班は彼等が全滅させた。

《こちら……ヘイルダム封筒の中身を確認せよ……》

《了解……現在こちらの回収班が調査に向かった……》

やがてカプセルを回収した、ボートが湖畔につくそして彼等は速やかにその場を後にする。

フェンリル・ナイト艦隊

旗艦：機動高速戦艦シリウス

サラ・フェンリルSide

レスター局長から暗号化通信が入る。

《今封筒の中身を確認した、ダーク・ウィチはネズミだ。》

「やはり……彼女がスパイでしたか……」

《ダーク・ウィチ号には十分に注意するように。》

「了解しました、今は気づかぬフリですね……」

《そう言う事だ……風の精霊の守護を、天狼に頼む。》

「ハッ」

あまり演習艦隊に近づいては気取られるな……しかし、何か有ってからでは遅すぎる……

「よし、全艦本艦隊は教導艦隊の前衛に擬態する、魔女に気づかれるな。」

「ハッ、了解です。」

全艦と言ってもわずか五隻だ残りは本隊にいる。

「ダーク・ウィチ号は?。」

「ハッ、間もなく合流することです。」

(このまま何事も無く終わると良いが、そうもいかないか。)

空中機動巡航艦シルフィード

ブリッジ***

リア・キサragi Side

ブリッジには、操舵手スコット・通信士兼索敵担当アリシア索敵担当レイス・機関担当ロバートさん達が、それぞれの持ち場に着いている。

「マスター。」

「フェリオ君!?!」

艦長室に居た、フェリオ君が、ブリッジに入ってくる。

「ふ・え・り・おっつ、ブリッジ（此处）に入ってきたら、アカンやろう。」

腰に両手を当て、エレノアさんがフェリオ君を叱り付ける。

「フェリオ君直ぐに、艦長室に戻りなさい。」

私も立場上フェリオ君をブリッジから、追い出すしかない。

その時アラームが、ブリッジに鳴り響く私は素早く指示を出した!

「アリシア、状況は!」

「ハイ、本艦後方に艦影有り距離は……1800!」

「何やて！？……対空監視何処見とつたんや。」

エレノアさんが対空監視班を怒鳴り付ける。

「「姿は確認出来ません、雲の中に……浮上して来ます。」」

「回避行動急いで！」

「了解ス」

「各員衝突に備えて下さい！」

レーダーに艦影が映る……ブリッジ内に緊張が走る。

「スコット回避急ぎや！」

「う、うあああつ！」

艦体が大きく傾く、皆が必死に衝突に備える、フェリオ君がバランスを崩して壁に叩きつけられそうになる。

「フェリオ君、私に掴まって！」

アルトさんがフェリオ君を支えてくれた。

雲海の中から潜水艦の様に静かに、浮上して来る、シルフィード号の直ぐ側をダーク・ウィチ号が通過する……

「ふう……何とか回避出来たス」

「「コラーツ、索敵班よそ見でもしてたんか？フェリオが死にかけたぞーっ！」」

「「済ません、雲の中から急に、ダーク・ウィチ号が現れました。」」

「「雲の中やて？アリシア、安全基準守らんかいて……嚴重抗議や。」」

「は、ハイ、了解しました。」

雲の中から急に……どお言っ事だろう……私が考えていると、暗号化通信が入る。

内容は……！？

ヘイルダム：発

宛：風の精霊

暗闇の魔女は、ロキなり十分警戒されたし……

また前回の確報した、狂狼は魔人兵計画の初期型タイプと判明……
なお魔女の目的は風の精霊に害を与える物なり……警戒を厳にされ
たし……以上。

イリア・キサラギSide

「エレノア……さんこれって……」

「多分……間違いないで。」

それはそうと、フェリオ君は……アルトさんに、注意されてる最中
だった暗号と、ニアミス騒ぎでフェリオ君の事を忘れていた……

「フェリオ君、イリア隊長に余り心配をさせては駄目ですよ。」

「……ごめんなさい……」

「……フェリオ君直ぐに艦長室に戻りなさい。」

「イリア隊長、間もなく演習ポイントです、フェリオ君を艦長室に
戻すのは返って危険ですよ。」

そう言っつて、簡易式のシートを用意してくれる。

その時メインモニターに教導官が現れる、全艦に指示を出す。

《これより、騎士艦隊の演習を、行う……それぞれの艦隊は所定の位置に着け以上。》

《では、私は迂回ルートで仮想敵艦隊の後方に、回り込みます。》

ローザリアさん所属の第4騎士艦隊以下15隻が迂回ルートに向かうちょうど山岳を逆時計回りで、迂回する。

私は15隻の内自分の指令艦とフィーナ副隊長の艦合わせ2隻しか与えられていない、これを見ても解る様になりに冷遇されているのだ……

（今更、弱気になっても仕方が無い。）

《前方に仮想敵艦隊確認、全艦攻撃用意！》

全艦が攻撃体制に入る、その時雲海の中から赤い雷球が！こちら目掛け飛んで来る。

「シールド展開急いで！」

「了解、シールド展開します。」

衝撃が艦体を襲う大きく艦体が揺れる。

「被害は？」

「シールド出力73%に低下。」

「雲中からか……やりおるな。」

その時旗艦のシグナルが突然消える……つまり撃沈されたのだ。

「旗艦ブレイブ撃沈！」

旗艦が……でもまだ負けた訳じゃない。

「機動空中爆雷を扇状に……急いで！」

「……急いで投下するや！モタモタしとつたら、良いカモやで。」

「爆雷投下！続けて回避行動に移れ。」

レーダーに青い点が放射状表示される、それらが広範囲に広がり赤い点つまり仮想目標が消滅する。

「敵反応……消滅、更に高エネルギー反応来ます。」

赤いレーザーの一条の光が、艦隊中央を直撃する。

「い……今のつて……」

「ヨル……ムン……ガンドや。」

ヨルムンガンド……対要塞攻略を目的に、建造された重砲撃艦……大型紋章砲一門に対空ミサイルと機銃が有るだけで、艦隊戦ではほとんど出番が無いしかし……あれはまだこちらに配備されていないはず……もしかしたら……そういう訓練設定なのかもしれない。

「ユーロ、クラウド、二人とも無事？」

《ああ、無事だ……》

《たつく……危ねっな。》

今の攻撃でかなりの損害が出た……メインスクリーンにギリギリで仮装敵艦隊が確認できる。

数は……10隻いや……11隻だ。

「近くに……観測艦いるな……厄介やで……」

「ユーロ、観測艦を潰せる？」

《愚問だな……任せろ！》

そう言つて、雲海に素早く降下する問題は……他の艦と連携が取れるか……

《さて……我等も備えるでしょう、イリア。》

クラウド……そうね、弱気になるのはまだ早い。

「指揮は」

《君が取れイリア。》

簡単にしかも簡潔に、クラウドは言い放つ。

「簡単に言ってくれるんやな……」

「クラス隊長右翼を、お任せしますこちらは左翼を指揮します。」

中央は既に壊滅状態だ、なら左翼と右翼で押さえ込むしかない……

「ローザリアさんが、こちらに来るまで持ちこたえる。」

そうと決まれば反撃開始だ、まずは両翼を押さえ込む。

「全艦右翼と連携しつつ、ユーロ艦隊の時間を稼げ、遠距離攻撃開始……」

遠距離から、ミサイルやレール・キャノンで反撃をする、少しずつでは有るが仮装敵側にダメージを与える。

「ヨルムングンドの砲撃……来ます！」

「全艦上下に回避……！急げーやつ。」

艦隊が上下に別れる、その直後赤い閃光がシルフィード号の真下を

かすめる。

「弱小出力でも……迫力ありますね……」

弱小出力レーザーでも、少し怖い……あんな物が当たったら……恐怖で少し体が……震える。

「怖いですか？ 馴れるとは言いませんが、悪い事では有りません。」

アルトさんが励ましてくれている私も頑張らなければ。

《こちら、ユーロ敵観測艦を撃破した、これより敵本体右翼に奇襲を掛ける！》

「了解、ご武運を。」

さて次は私達の番だ、ローザリアさんもそろそろ……来ると思う。

ソフィア・ブルードーSide

観測艦から、観測データが、途絶えた……撃破されたか……

「全艦前進！これより敵残存部隊の」

「て、敵少数部隊…右翼側面に展開！！」

なるほど、私と同じ様に雲の下を通ってきたか……

「ヨルムンガンド、狙われています！」

何ですって！こんな戦法を採るのは、ユーロしかない、今〔大砲〕を失う訳にはいかない。

「右翼部隊に、ヨルムンガンドを死守させなさい！」

「敵、ヨルムンガンドに攻撃を開始します。」

流線型の攻撃的な艦船が次々に砲撃やミサイルを浴びせる！反応は撃破……こちらは……切り札を失った。

更に運の悪い事に、ローザリアの艦隊が背後に、迫る！急いで対応しなければ……

「ローザリア艦隊とは距離が……あるわね。」

こちらの作戦で向こうも旗艦を撃破して、ローザリアが指揮を引き継いだらしい。

「では……」

「このまま、あの小娘の艦隊に突入して……分かるわね？」

さあ……計画の実行ね、さようなら……小娘さん、そう……私の役目を果たすべく全艦隊に突撃命令を下した。

イリア・キサラギSide

いきなり、ソフィア艦隊が突撃を掛けてきた、それだけならまだ良いが……突然実弾を使用して撃ってきた！

「じつ、実弾！？」

「隊長っ、全艦に回避行動を！」

「アホっ、今……バラバラに回避行動したら、要らん犠牲者出すだけや砲手！跳んで来る弾は全て撃ち落とすんやつ！」

激しい砲撃戦が、繰り広げられる……被弾し後退する艦が続出し始めた。

「シルフ・ウィンド号、機関部被弾！火災発生とのことです。」

「ふい、フィーナさん！」

私はほとんど悲鳴に近い叫び声を上げていた、その時だフェンリル・

ナイト艦隊が、救援に駆け付けてきたそしてシルフ・ウィンド号の援護に三隻、シルフィード号の援護に一隻が就く！

シリウス号の半球式旋回主砲が全門ダーク・ウッチ号を捕らえる！

《全門一斉射用意、ただし沈めるなっ！》

砲撃戦が開始される。

（す、凄いたった一隻で二隻を相手にするなんて……）

ソフィア艦隊は既に教導艦隊に包囲されつつあった。

「た、大変です、ダーク・ウッチ号が、ほ、本艦に向かって来ます！」

「迎撃……用意ただし、戦闘不能にせよっ。」

（敵の脚を乱して、戦闘不能にすれば……やるしか無い。）

「砲手、ダーク・ウッチ号の回避パターンを乱しなさい！ただしダーク・ウィッチ号は戦闘不能します、無弾頭ミサイルを使用します、ミサイル発射管、一番〜四番発射！」

「復唱、一番〜四番発射っ。」

「続けて、五番〜八番発射して下さいっ。」

主砲の連続射撃で、脚を止め急所に無弾頭ミサイルを叩き込む。

次々に主砲……艦首ミサイル発射管……機関部……舵に命令する、
そして呆気なくダーク・ウツチ号は降伏した指揮下の艦艇もフェン
リル・ナイト艦艇の元既に制圧されている。

イリア・キサラギSide

反乱事件から、一週間後……艦隊訓練のあの反乱事件の後は大騒ぎ
だった……

彼女の他に、スパイは少なく10人は居たそうだ……そして……ラ
ボも遂に家宅捜査が入った、しかし主なメンバーは、不審死か逃亡
していた……TVでは、一週間この話題で持ちきりだ、結局彼女は
捕まらなかった。

「ニュースはどのチャネルも……ラボ関係……か。」

「マスター……」

後……解った事と言えば、両親はプロトタイプ魔人兵【狂狼】に関
与していた可能性が僅かに有るそうだ……

やっぱり……少佐を問い正したほうが近道かも知れない。

「しばらくは…この件は、局長の判断に任せよう。」

それにしばらくは我がミューラー・ジュ・ウルフは艦艇の発進は無い。

怪我人は出たが、死者が無かったのは不幸中の幸いだ、しかし肝心の二隻はドックで修理中だ。

そんな中で一つの大事件が起こるとしていた……

第11話 艦隊演習 (後書き)

次回頑張って書きます。

描写と誤字の修正をしました。

第12話それぞれの想い〜（前書き）

今回はストーリーを穏やかにしました。

誤字・描写不足を修正しました。

第12話　それぞれの想い

その日それは急に世界に向けて発つせられた。

私はフェリオ君とエレノアさんの三人で、カレンさんの私室で昼休憩をしていたら、アリスアさんから通信が入って来た。

「隊長つ、急いでテレビモニターを見て下さいっ！」

全員で顔合わせ、慌ててテレビをつける。

金髪的美青年がモニターに現れ……その日全世界に……世界再建議会が電波ジャックをしたのだ。

《全世界の指導者並びに総ての種族国民に、告げる、余は「新制ゼウラニアス帝国」初代国家元首アルゼリアス・ツォン・ファルケン、この世界を統べる真の王である！我等純血統種族は、かつて世界を席卷した真の支配種族の流れを継ぐ末裔だつ、そして古に世界を滅ぼし、諸君等に世界再生を託した女神【光の翼の聖女】も我等の裏切り者だ、しかし諸君等は女神との盟約を忘れ去り、また世界を再び破滅に導こうとしているのだ！》

この日あらゆる通信・放送・が全て【彼】に支配された……電波ジャックだ既に世界各地で混乱が起きはじめている。

「ファルケン……」

ぎりつと奥歯を噛むフェリオ君……彼とフェリオ君の間に何があったのだろっ……

《何故、不毛な争いを続けるのか？何故諸君等は女神との盟約を忘れ去り詰まらぬ争いで、同族を危め続けるのか！それは諸君等が劣等種族だからだ！それは既に諸君等が自らの手で、それを証明している事に、何故気が付かないのか？世界を見るがいい！既に荒廃が始まりそして多くの種族が死に絶えた、もはや諸君等に世界を浄化するだけの【力】は無いと余達は判断し、諸君等の浄化と愚かな指導者達の肅正をここにおいて宣言する！》

「！……何てい草やつ。」

「……論外だな。」

エレノアさん、そしてカレンさんが毒づく、同感だ……私もみんなと同じ気持ちだ。

レスター・エルストンSide

遂に世界再建議会……いや古の帝国復活宣言と全世界に宣戦布告か

……

「トレース出来るか？」

「ダメ、でした……ジャミングが掛かっていて……」

まあ……仕方が無いさいきなり……電波ジャックじゃあまず対応は不可能だろう……

「兄さん、所でこれからが大変だよ。」

「ああ……分かっている。」

確かに大変だよ……騎士隊の中にも、ソフィアみたいに、向こう側に通じていた連中のお陰で、現在騎士隊は再編中だ、まともに動けるのは、6〜8位か……

「それに……国防軍にも不穏な空気がある。」

あのブラッド・フェンリルが最近不穏な動きを見せているらしい。

「しかし本格的に動き出すのは……」

「遅くても……来年だね……」

全くだ……せめて、穏便な年明けをさせてくれ。

レナード・ウードSide

（ようやく此処までこぎつけたか……）

モニターを見ながら、そう思った、メアリー・フォートフェルト……
…貴女の失敗は俺を選んだ事だ……

「何か考え事か？貴様らしく無い。」

顔を上げると同僚のドリスコルが立っていた。

「貴様が……何の用だ？」

「いや、ただ顔を見に来ただけだ。」

フツ……相変わらずだ、さて本題を聞こうか？

アルゼリアスSide

今、我々の空中機動艦隊は通称「天空の玉座」に向かっている、古の技術で造られた、この浮遊要塞は下層部が 型で先端に360度攻撃可能な半球の超巨大紋章砲一門、上部は 型の平面型をし全ての先端に紋章砲を備える。

「閣下、先発隊が上部より上陸を開始しました。」

「ウム、ご苦勞であつた、【鍵】の入手には獵犬が役に立つたな。」

しかし道化を演じるのも樂ではない……先ほどの演説……あまり私の好みではない……まあ世界を一つに纏める目的に役に立つたな。

「アルゼリアス様、ご気分が優れぬのならお休みになられますかな？」

単眼魔人のジル老師が私を氣遣い休むよう促す。

「氣遣いは不要願いたい、逸れより我等の軍の状況は？」

唯一の紅一点「飛翔將軍リガティ」が状況を説明する。

「ハッ、既に我方に盟約を結ぶ諸国が幾つも我が軍門に降っておりますが、一部の強国や周辺国が連合軍を組織化し始めています。」

なるほど、この城の【力】を見せ付けばならんか……ならば見せ付けてやろう。

「まずは、ドラグニア帝国を横切りヴァルゼリアを落とす！まずは各地の協力者と、連絡を密にせよ。」

その場に居た全員が頷く、そして間もなく我が牙城「天空の玉座」に入港する。

「では、これにて解散する。」

「ハッ！」

皆がその場を後にする、一番危なっかしい……彼女に声をかける。

「リガティ、少し良いか？」

「アルゼリアス様、何か？」

私に、呼び止められた彼女は怪訝な顔をする、年明け早々我が軍は彼女が指揮を採る地上軍を先陣に、大規模会戦を仕掛ける。

「年明け早々に、大会戦を仕掛けるリガティお前の働きに期待する。」

「／／／。か、閣下、喜んでこのリガティ……飛翔將軍の名内外に轟かせましょう。」

顔を赤らめる彼女を見ると、かつて愛した女を思い出す。

（死別して既に500年……人とは儚いものだな。）

「閣下？」

「いや何でもない……随分昔の事を思い出ただけだ。」

恐らく……フェリオも居るな……私を敵と思うならいずれ相見える事もあるだろ……

「リガティお前は絶対に死ぬな、良いな。」

「!？」

少し驚く彼女に構わず、話を続ける。

「もし、敵の虜の憂き目にあっても……だ、他の者共勝手に死ぬ事は……許さんそう心せよ。」

「ハッ……心に止めておきます。」

そろそろ……皆が私を待っている、さて行とするか……

リガティを伴い深淵の玉間に向かう、さて……運命はどう動くか見物だな、イリア・キサラギと言う者と刃を交わす日が来るのが愉しみだ……

イリア・キサラギSide

カレンさん達に、フェリオ君の体調が悪いから……と嘘をついて、

屋上に連れ出すフィーナさんは今は居ない、この時間彼女は、屋上の屋根で昼寝をしてるのだが……今日は彼女は居ない……好都合だフェリオ君に話すをきこう、さっきの電波ジャック犯……何者何だろ……？

「ねえ……フェリオ君……言い辛い事だったら、無理に言わなくて良いし、私も聞かないから……」

私とフェリオ君の間に静かで重い空気が漂う……少し間を置いて、フェリオ君がぼつりと呟くように話してくれた。

「彼は……僕の両親を……殺した敵です……」

「ゴメン……フェリオ君……私が軽率だった……」

「マスター気にしないで……もう今から、6000年も前の過去を引きずってる、弱虫の話ですから……」

フェリオ君……が、弱虫……あんなに、一人で傷だらけで戦って来たのに……？

「僕はまだ、その時は子供でした……本当に……僕の両親はアルゼリアスが起こした戦いで、死にました……この話は森の長老に聞きました……」

「森の長老？」

誰だろ……？フェリオ君以上の存在だから……魔神かな？

「違います……森の長老は巨大な精霊樹様ですよ。」

フェリオ君によると森の長老は穏やかに世界を、見守る存在らしい……赤ん坊のフェリオ君を長老様が、フェリオ君のご両親の親代わりになってくれたのだそうだ。

「そつかあ、じゃあ森の長老様がフェリオ君のお爺さんになるんだね。」

「ええ……でも次に会えるのは、僕がお爺さんに、なってからですね。」

フェリオ君がお爺さんになってから？という事だろう。

「長老様は……僕の成長を待たずに、眠りにつかれました……」

「ゴメン……また言いづらい事……聞いちゃったね……私。」

更に空気が沈みかける……これでは……フェリオ君のマスター失格だ……

「ぷっ、あはっ、あははははっ。」

「何よっ、せつかく……フェリオ君の事を励まそうと、頑張ってるのにつ。」

ひとしきり笑うフェリオ君……しかし怒る気などしない……まるで元気で世話の焼ける弟だ……

「弟ですか……今なら、マスターの弟も悪くないですね。」

「こ、こいつう、せつかく人が、心配してあげたのにつ、まちなさーいつ、フェリオ！」

「うあつ、マスター？」

まるで姉弟のように、じゃれ合った。

「／／／。マスター頭撫で回すのは……」

「ダゝメ、人の心配を無視した罰です」

フェリオ君の頭を優しく撫で回す、少し撫で回し過ぎて、フェリオ君がゆでダコ見たいになった。

「所でフェリオ君？森の長老様は皆で……」

「ええ……森の皆でお見送りした後、精霊樹の苗木を植えました、一万年後に再開出来ます。」

私も魔王化したら……駄目だ、フェリオ君が絶対に嫌がるだろう……彼にしたら、短いかも知れないが精一杯彼のマスターになろう……少なくとも今は穏やかな時間が流れる、年明けには彼等と本格的に戦いが始まる……

（そう……今だけフェリオ君のお姉さんをしよう。）

恐らく……こんな穏やかな 穏やかな時間がもう……送れないはずだ。

第12話それぞれの想い〜（後書き）

次回頑張つて書きます。

描写の修正をしました。

第13話ウィルム平原会戦前哨戦（前書き）

今回は後二話続けて地上戦をします。

第13話ウィルム平原会戦前哨戦

レスター・エルストンSide

年が明けるとともに、新生ゼウリアス帝国が世界各地に進攻を開始、開戦の初戦からわずか38時間たらずで、北欧諸国を飲み込むかの様に軍を進める。

我がヴァルゼラート公国も全軍を挙げて、対応に追われている……そして7日前に、大聖堂騎士団にも出撃命令が出た。

「全く……親父の奴、面倒な仕事を押し付ける。」

今の戦力で食い止められるかどうか……いや、やらなければ……ならない。

今ヴァインは砂漠都市ギザに、ドラグニア帝国軍・国防軍・大聖堂騎士団の連合軍で、ゼウリアス帝国軍を迎え撃つ為に、ティアマト級地上戦艦で出撃した、空中機動艦隊は準備が出来次第出撃する。

（もつとも地上戦が今回はメインだな……）

しかし……間の悪い事は起こる物だ……ミュラージュ・ウルフ隊の戦艦二隻が機関トラブルで総点検だ本当にトラブルらしい細工された形跡は無かったそうだ。

現在建造中の新造艦の状況をカレンに聞くため、通信回線を開く。

「カレン博士【聖槍】の状況は？」

《おおむね……80%と言った所だ、後しばらくは掛かるな。》

「分かりました、紋章機関の件ですが……何か問題は……」

カレン博士に新造戦艦の状況報告を聞く、この艦はミューラー・ジュ・ウルフ隊に正式に実戦配備されるため、開発を急がせていた。

まあ……今の状況では無理もないか……

陸上戦艦ティアマト

ブリッジ

ヴァインSide

「ギザに集結中の連合軍は約10万に上る……一方ウィルヘルム平原には、5万しか配置されていない。」

「質問があります、私達の仕事は？」

ローザリアを始め何人か隊長職に異動させた、まあ彼女を含む何名かは分隊長経験者だ、まかせても問題無いだろ……

「既にカオス副将が、囃部隊を率いてギザに向かっています、我々は此処ウィルヘルム平原で敵を迎え撃ちます。」

「所でキサラギ隊長は？」

クラウド中尉が最な意見を言う、ミユラージュ・ウルフは、我々より先にギザに着いている。

「ミユラージュ・ウルフとフェンリル・ナイトは先発してギザに着いています、他に質問は？無ければ作戦の説明を……」

さて…皆さんの不満をどう宥めるか……頑張りましょう。

ギザの町

イリア・キサラギSide

ふえっ暑いっ暑いっ、砂漠用のフード付きマントが無ければ、絶対に倒れる……年明けでも砂漠の暑さは変わらない。

横目でフェリオ君とエレノアさんを見る……うらやましい……こんな暑さで何も感じないなんて。

「何で二人とも……平気なの？」

「僕は一人旅が長いので……慣れてます。」

「うちは、砂漠戦参加者やからな……真夏の暑さが身に堪えるで隊長。」

うつつつ……此处につわものが居ました、お菓子大魔王フェリオ君と関西系鬼娘さん事エレノアさんです。

「僕今なんとなくマスターの考え分かりました。」

「フェリオ奇遇やな、うちも……それとなく分かったで。」

この後……私は二人に散々いじられた……うつつつ、この暑ささえ何とかなれば……

「オラオラ、よそ見してんじゃあねーぞ！」

「ケツ……半獣人が、うるちよろすんじゃねーぞコラ。」

などを通りの奥から、罵声が聞こえて来る。

「行ってみましょ、二人とも。」

「そうですね……マスター。」

「その前に……表通りでトラブルや、何人が回してくれへんか。」

《了解です。》

これで良しと、さあ行きましよう、二人とも私達は表通りの奥に向かった。

「何だよつ、自分達からぶつかって来て、そっちが - 」

「ああつ、俺達第7師団に盾突く気か？ああつ。」

「どーせ、俺達がいなけりや、ゼウラニアスにお得意の尻尾振る気なんだろ？」

そこには、半獣人の少女を締め上げる国防軍下級士官がいた。

「待ちなさい、一般人に手を出して、恥ずかしくないの貴方達！？」

「あんたら、所属はあのハゲ親父のバスク中将やる違つか？」

「……………！！」

フェリオ君が飛び掛かろうとするのを、ネコ掴みで抑えながら相手を睨みつけるエレノアさん。

「エレノアさん、放して下さいっ。」

「ダメに決まってるやろ、フェリオ。」

「……」

「「……」」

私を含めた全員がその場で固まる……こんな状態でも、エレノアさん凄いですフェリオ君を止めて兵隊相手に視線を逸らさないなんて

「漫才師か？てめえら。」

「違いますっ、大聖堂騎士団です！」

「お、お前味方殺しのエレノアか？」

ぴくりとエレノアさんの耳が反応する……エレノアさんを止めないと……

「ああ……そうや、うちが味方殺しのエレノアや。」

声を押し殺してエレノアさんが、二人の兵隊に答える。

「味方殺しの鬼姫か……こりゃ、まさに化け物屋敷だなあギャーハハハッ。」

「とりあえず……そこのお嬢さん逃がしたってくれへん？」

フェリオ君を放して、ドスの聞いた声で二人に放しかける。

「ああっ、聞こえねえ。」

「ギャーハハハハ。」

「そこまでだ、我が第7師団の面汚しども！」

全員が振り向くと武装した兵隊達が一斉に銃口をこちらに向ける、二人は観念して少女を放した。

「アンドリユー・コレス大尉？」

「はい、今は少佐ですエレノア大佐。」

「エレノア……大佐？」

「ええっ、エレノアさん大佐だったんですか？」

しまった……とか言いながら、昔の自分の事を色々話してくれた……愉快な話では無いから言いたくないのは分かる、私だってフェリオ君の事や自分の事は余り教えたくない。

「ノノノ。その……階級かってな……実家が……勝手に……いや……その……ごによっよ。」

「ハハハッ、相変わらずエレノアさんらしいや。」

笑いながら、コレス少佐は銃をホルスターに戻し部下に二人を連れて行くように命じる。

「コレス少佐……そのありがとやで……」

「まあ仕事ですから……それに、エレノアさんに暴走されてはたまりません。」

（エレノアさん……国防軍時代の時から……喧嘩っ早かったんですか？）

「／／／。それよりさっきの子は？どーしたん？」

「ええ、被害者なので調書を取ります。」

その後私達も少し話を聞かれた……その後他のメンバーと合流する。

それからしばらくして、国防軍ギザ方面防衛部隊そして大聖堂騎士団の陸戦隊と空中艦隊が到着した。

空中艦隊が6個の中規模艦隊……ギザ方面軍陸上戦力は10万人……列車砲トール・キャノン三基そしてウィルム平原防衛部隊は騎士団陸戦隊が約6個大隊と200メートル級陸上戦艦ティアマトが到着した。

サラ・フェンリルSide

弟力オスを探していたら……ランスに会ってしまった、彼は幼なじみでしか私の……まあ……初恋の人だったりする……

「ゴホン……で、何故君が此処に居るんだランス？」

「バスク中将の穴埋めさ、陸上戦艦デスプリンガー級三隻をウィルム平原防衛部隊に持って行って、変わりに僕達帝国艦隊に、出撃の要請が来た。」

「あの……馬鹿者！」

何処まで味方の足を引っ張るんだっ、全く正規軍も末だな……そんな顔（表情）が出たのだろう……かれが笑い出した。

「あっはははっ」

「／／／。笑ってる場合か？」

「いや、君のそんな顔を見たらついでね。」

（まったく……ランス君は相変わらずだな……）

これ以上は長居は出来ない、地が出てしまう。

「君に対する僕の想いは変わらない、ゆっくりと待っている。」

「なななっ／／／。……バカっ。」

ランスはドラグニア帝国皇帝親衛艦隊「黒龍騎兵艦隊」の提督に最近拝命されたばかりだ……少し浮かっているのか？

「君に会うためと言ったら？」

「／／／。し、失礼する！」

踵を返し司令部に向かう、ランスは楽しそうに笑っている……

（まあ……悪気はしないな。）

さて会議に向かうか、まあ結果は解りきった事だが……

イリア・キサラギSide

ウィルム平原の一番端に大聖堂騎士団は配置された、何でも国防軍のバスク中將が「騎士団ごとき雑兵は端っこがお似合いだ！」と言ったそうだ……レスター局長なら今頃血の雨が降ったかも……

「ヴァイン副局長やから出来る芸当やな……」

「エレノアさんお疲れ様です。」

彼女には参謀本部に連絡役を頼んでおいた、万が一に備えてだ、国防軍本隊は無人工器を中心に編成されている為彼女にパイプ役の大役が回って来た。

「本当に疲れたでっつ、特にあのハゲ親父の相手は……昔の事ネチネチと言ってくるさかい……モニターグーで潰しかけたで。」

「エレノアさん……それは。」

「無論冗談や、そんな事より……隊長、司令官に提案をしたいんやけど……」

目が笑っていない……まあスルーしよう、提案？多分この戦いについてだろう、敵軍も大兵力の総力戦だろう……情報では巨大生体兵器も投入されらしい……

私が考えても仕方が無い尉官階級では相手にされないだろう……まあ騎士団は半民半官組織で特務部隊に近い、副局長達に連絡を入れティアマトで会議を開く。

会議室

イリア・キサラギSide

「皆さん集まりましたね、それでは作戦会議を始めます。」

副局長が全員を見渡し、しばらくしてから立体映像で局長が現れる。

「じゃあ、始めて下さいエレノアさん。」

「とりあえず要点だけ言うわ……この戦いうちの惨敗で終わる……可能性が高い。」

エレノアさん以下騎士団参謀部が危惧するのは、バスク中將が国防軍だけで敵本隊と決戦する事を言い出したそうだ、勿論そんな無謀な戦いは出来ない……

《た、大変ですつ、国防軍が攻撃開始しました！》

「なんやて！」

「チツ……あのハゲ親父。」

会議中にその危惧していた事が起きる、国防軍がこちらの部隊の展開を待たずに、攻撃を開始したのだ。

国防軍本隊地上艦隊旗艦「デスプリンガー」

アンドリユー・コレスSide

たつく騎士団との連携無しで、攻撃かよ……まったく……やってられん、言わないより言った方が良いかもな……

「バスク中将、敵軍が両翼を広げています此処は騎士団との連携が必要と小官は判断します。」

「スパイダーとキャンサーを前面に押し出せ！ケンタウルスを両翼に回せつ、百式戦車隊及び零式で対応せよ！」

人の話聞けよつ大体、零式や百式戦車の連中だって練度低いんだぜつ！しかも零式に至っては、使いこなせない兵士が、目立つチツ……ようやく両翼に回ったか……

エレノア・アリアドネSide

いきなりの情報に周囲が慌ただしくなった、無理も無い……まあ……こつち無視で戦闘開始したら普通そう為るわな……

「仕方が無い遠距離戦闘開始する。」

うちらもなし崩しのまま戦闘に参加する……コレス少佐が心配やな

……

「ミューラージュ・ウルフは遊撃隊として戦って下さい。」

「判りました、ミュラージュ・ウルフ遊撃任務に着きます。」

ミュラージュ・ウルフ担当戦区176ポイント

「はい……はい……了解です。」

アリシア少尉が司令部との通信をやり取りしている。

そんな時や……あのハゲ親父の声が聴こえてきたんは……

《何をしている！さっさと撃破せよ！》

はあゝっ、相変わらずめき立て、てんのかあのハゲ親父……

《まとめて吹き飛ばせ！味方は無人機だっ。》

ちらつと横目でアリシア通信士とアイコンタクトする。

（アリシア、頼むさかいその回線きって……）

（だ、ダメです、そんな無茶苦茶言わないで下さいっ。）

そんな時やデスプリンガーの主砲が鳴り響いたんは……味方の機械兵器部隊と敵の機械兵器部隊が、一瞬で消し飛んだ……

「あの馬鹿親父！またあん時と同じ事しやがった！」

怒り任せにインカムをたたき付ける、何とか戦線は、うちの零式戦車隊が支えきって何とか防いだ。

しかしこの時誰も、厄介な出来事が起きてるとは夢にも思わなんだ……

第13話ウィルム平原会戦前哨戦（後書き）

バスク中将の元キャラはゼータガンダムのバスク大佐です。

コレス少佐がコレト少佐に為ったままでした。

キャラ名と描写を修正しました。

真に申し訳ありませんでした。

第14話 防衛戦 (前書き)

前回の序盤戦に続いて地上戦になります。

後力オスの次に影が薄くなっていた人達も登場し始めます。

陸上戦艦の艦名を修正しました。

第14話　防衛戦

国防軍本隊Side

レナード・ウードSide

金を渡した工作兵を呼び出す……本当は生き証人の始末だ、リガテ
イの作戦をやりやすくする為に、こいつらに金を渡してある細工を
させた。

「ところで、旦那約束の……」

「ああ…金と特別休暇をyarou……」

味方の砲の発砲音に合わせて男の額を撃ち抜く。

「ゴミの始末を頼む。」

「ハッ！」

さて……イリアこれからお前の活躍を祈るぞ、そう思いながらその
場を離れる。

（義理は果たしたな……帝国にも……ヴァルゼリアにも……後はイ
リアと俺の戦いの決着だけだな。）

リガテイ side

陸亀型巨大生体兵器「ヘカトンケイル」を全面に押し出すように命じる、アルゼリアス様のご命令通り、作戦を達成しなくては……

「ヘカトンケイルを国防軍本隊に当てる、敵戦車や歩兵には無人機動兵器で対応せよつ、私も出る」

ヘカトンケイルが国防軍本隊に向かって動き出す、私は空から氷の短槍を雨嵐の様に降らせる。

「チッ……ただ逃げ回るだけか……つまらない。」

中には私に挑んで来る者もいる……中々のつわものいるものだ。

アンドリユー・コレス side

ヘカトンケイルが向かって来る、各部隊が応戦するが豆鉄砲だな……此処は一時後退を進言するか……

「敵の巨大生体兵器が出て来ました、ひとまず体勢を立て直す必要があります。」

「黙っている若造！デスプリンガー、マドルウク、ギガンティスは主砲発射用意ーっ、薙ぎ払えーっ！」

く、駄目じゃないか！あのヘカトンケイルにダメージは与えられない……並ば俺はやるべき事をするだけだ！

「バスク中将……後退命令を出して下さい……」

「ええいつ、貴様は黙っているー！」

まるで取り付く島無しだ、だが……言わなければ……

「ならば此処で、名誉なる戦死を遂げられますか？」

顔色が見る見る青くなる……やはり……ただの小心者か……最前線に来るだけ褒めてやる……

「何をしてるっ、早く後退命令せよ！」

ようやく全軍が下がる……しかし、ブラッド・フェンリルの罠が上手く行くと良いが……レナード少佐から、バスク中将には絶対に耳に入れては為らないと命令されている。

（特務は二階級上だからな……）

まあ負ける策は立てないだろう……

ヴァインSide

国防軍が後退する……しかし、こちらは動け無い何故なら光学迷彩機が多脚が現れたので、今それ達の対処に追われている。

まあ……もうすぐ全軍の投入だな……その時ヘカトンケイルの近くで大爆発が起こる。

ヘカトンケイルが地面に沈む……しかし上部はそのままだ、落とす穴にはお粗末すぎだ……

ミカSide

ルイセ曹長やツバサ小尉にアレク准尉にフィル小尉……その他の隊員はいない。

「ルイセ曹長、上からの指示は？」

「ダメです、全く応答ありません。」

これは……いよいよ覚悟を決めろと言う奴ね……そう思った時、目の前に巨大な狼の蒼い魔獣が現れる。

「フィーナさん！僕は多脚を片付けます、フィーナさんは周りの雑兵を！」

「わかった、フェリオ君も十分注意してっ。」

大聖堂騎士団……が来てくれた、助かった……あの無能親父のせいで危うく全滅する所だった……

「生きて帰ったら……大聖堂騎士団に転属しちゃうゾ」

「た、隊長……私達を見捨てるのですか？」

ルイセが涙目で見ている……ニツコリ微笑んで、私は宣言した。

「勿論、みんな一緒に騎士団に入れちゃうゾ」

ルイセを始め皆が和む……絶対に皆を連れて帰る、そう胸に決める。

チラッと騎士団の戦いに目を向ける……

「凄い……あれじゃ……こっちが雑兵……いやバスクのハゲが雑兵だ……」

フェリオと言う魔獣を見れば解る確実に次々と、敵の多脚を片付け

る……そしてフィーナと呼ばれた少女もバイアネットを片手で撃ちながら、魔物達を圧倒する。

《フェリオーっ、フィーナーっ、俺達も交ぜろーっ》

《そうそう、アタシ達もやるわよ。》

《零式の見せ場だぜ！》

騎士団の零式戦車隊が切り込んで来る、三方向に別れるあれが【デス・ハンティング】……

ルースSide

「カイル、レイン、デス・ハンティングを始めるぜ！」

「了解！！」

まず俺が囿役になり敵を二人の待ち受けるポイントに誘い込む次に二人がそれを仕留める、今回は別のパターンを取る。

「敵集団を掻き乱せっ、はぐれた奴から片付けるぞ」

敵の集団を遮蔽物に為りそうな岩や等を利用して、敵を掻き乱す狩

りの基本だ。

「レイン、そっちに多脚が行ったぜっ。」

《任せて、当たれーっ!》

脇腹を撃ち抜かれ爆散するキャンサー、ケンタウルスはカイルがあらかた片付けていた此処も俺達の出番は無いな……そう考えていたら、緊急通信が入る。

《ヘカトンケイルの生体式収束砲により……国防軍司令部壊滅! 総司令官バスク中将戦死のもよう!》

何だって……司令部が壊滅だって……ますますこちらの旗色悪くなつたじゃあないか。

同時刻国防軍司令部

アンドリユー・コレスSide

なっ……ヘカトンケイルが中途半端に地面へと沈む、まさか最初からこれを狙っていたのか? 少佐はなら急いで対応しないと……間に合うか?

「頭部に目掛け主砲及びミサイル一斉に斉射用意！」

「駄目ですっ、間に合いません！」

「ば、こんな馬鹿な事が有るかーっ！」

そして奴の放った閃光が俺が見た最後の光景だった……

生体レーザーがデスプリンガーの艦橋を貫抜いた艦橋が崩れ落ち大爆発が起きる続く二番艦「マドルウク」三番艦「ギガンティス」も同じ運命をたどった。

イリア・キサラギSide

国防軍司令部が壊滅の報が私達の所にも入った……双眼鏡で確認するまでも無いはっきりと国防軍司令部の方向から爆炎が確認できる……あれでは生存者はいないだろ……

「アリシア……通信士、コレス少佐が……生きてるか確認してくれへん？」

エレノアさんがアリシア通信士に訪ねる、顔面蒼白で目は虚ろだ。

「ダメです、国防軍司令部からの応答はありません……」

すると関を切ったようにエレノアさんが喚く。

「嘘やつ、コレス……少佐の事はうちが一番しってる！あいつは……うちの教え子みたいな奴や！こんな……こんな事で死んでいい訳が無いやつ！」

普段なら私もエレノアさんの気持ちも分かるしかし今は殺し合いの最中……だ下手な慰めは、彼女を殺す事になる、私はエレノアさんの両肩を掴んで彼女をしっかりと見据え残酷な現実を突き付けるしか無かった。

「エレノアさんっ、アンドリユー・コレス少佐は戦死したんです！死んだのよ！」

私を振り払いその場に、うずくまるエレノアさん……

「うおえっ、ぐえええっ」

彼女は嘔吐をして倒れる、顔色も悪い。

「衛生班っ、直ぐにエレノアさんを救護区に急いで！」

やって来た衛生班に担架でエレノアさんが運ばれて行く……

「エレノア・アリアドネ中尉の参謀の認を一時解きます、アルト少尉……中尉の代わりに参謀代理を願えます。」

「了解しました、アルト・ファルゼス、エレノア中尉の参謀代理を拝命します。」

その時ルース大尉から通信が入る。

《こちら……ルース隊至急応援を頼む！敵将のリガティが乗り込んで来やがった……頭に気をつける狙われてるぞ！》

私は意を決して命令を出す。

「ミュラージュ・ウルフ隊出ます、フェンリル・ナイトは？」

「我々の直ぐ近くに部隊を展開しています。」

サラ將軍の率いる陸戦隊は私達の近くにいる……合流は敵を蹴散らしながら可能だ。

第166空中機動艦隊

旗艦「ヴォークリンデ」

カール・フォートフェルトSide

「全艦、黒竜騎兵艦隊と連携しながら、敵艦隊を蹴散らせつ、今だ主砲一斉斉射じゃ！」

ワシ等の艦隊はバスクの若造を抑える為に派遣されたんじゃが……間に合わなんだ……まあギザの手前までに敵を防げただけでも僥倖じゃろ。

「フォートフェルト准将、エルランド中将より入電です。」

エルランド中将はワシの後輩で今は上司にまで出世した、まああいつの部下ならワシも嬉しい、しかし余り良い兆候では無いのう……

「フォートフェルト准将、直ぐにウィルヘルム平原に予備の戦力を向けてくれ。」

エルランド中将の顔色が芳しく無いやはり……

「ワシの……いやエルランド中将の悪い予感が的中か……」

「この度責任はバスクを押さえられなかった、小官に有ります。」

貴官の悪い癖だ、何でもかんでも自分でしょい込みたがる……

「ワシが救援に向かう……中将此处を開けても宜しいか？」

「……厳しくなりますな」

「いやいや僅か六隻で十分じゃよ、あのヘカトンケイルさえ潰せば良いのじゃからな。」

エルランド中将は、反対したもつと艦を連れて行けと……だから言い返してやった。

「亀ごときに紋章艦を十隻も連れて行つては、無能の証明になる。」

「なるほど……ハハハハ、その通りですな……出すぎた提案でした……ハハハハつ。」

「その通りじゃ、ワシ抜きで後のこの場は中将にお任せする。」

さて、負け戦の後始末を決めるとしよう。

第14話『防衛戦』（後書き）

影が薄くなってしまったキャラ、名前だけのキャラはともかく登場しているメンバーも何とか活躍できる用に工夫していきます。
描写を変更しました。

次回頑張って書きます。

キャラ紹介3（前書き）

今回はお借りしたキャラクター紹介です。

いずれは敵役や主要キャラも紹介いたします。

一部キャラ紹介を変更しました。

キャラ紹介3

ミカ

髪の色：金色のウェーブでロングヘアー

瞳：茶色

口調：私

性格

厳しいが優しい面もある

キャラ設定

孤立していた所をフェリオ達に助けられる。

面倒見の良い隊長。

ルイセ

半獣人の狐娘

髪の色：赤毛

瞳：緑

口調：私

性格

おとなしく子供好き

キャラ設定

フェリオに気が有るが言い出せず仕舞い。

子供達に優しい。

ツバサ

性別：女

種族：妖狐

髪の色：ふわふわした金髪のロングヘアに狐耳

瞳：緑

口調：私

性格

楽しい言が大好きな悪戯っ子。

キャラ設定

気に入らない相手に指図されるのが嫌いな、イタズラ大好き娘。

フィルミンア・ラウス・フローリン

髪の色：銀色のロングヘアー

種族：魔族と人間のハーフの亜種で月狐族というめずらしい種族

瞳：赤と紺のオッドアイ

口調：アタシ

性格

元気なお転婆娘

趣味

魔法の練習と探検

キャラ設定

良い男の子を見たら即ナンパ

アレクトル・デュール・フローリン

種族：魔族と人間のハーフの亜種で月狐族というめずらしい種族

年齢：18歳

髪の色：銀色のショートカット

瞳：赤と蒼のオッドアイ

口調：礼儀正しい僕

性格

賢く優しいが腹黒一面もあり。

趣味

剣術と昼寝

キャラ設定

シスコン上等なお兄さん

妹と同じくナンパ好き。

上記のキャラはレフェル様にご使用の許可をいただきました。

キャラ紹介3（後書き）

次回頑張ります。

第15 撤退戦（前書き）

投稿が遅れて申し訳ございませんでした。

カトラス様より神薙綾人のご使用のご許可を頂きました。

神薙綾人の名前表示を間違えて神薙俊人と誤って表示した事をお詫びいたします。

本作品PVが5000になりました。

これからも本作品を宜しくお願いいたします。

第15 撤退戦

イリア・キサラギSide

もう戦域はめちゃくちゃだ、国防軍は壊滅状態で敵軍がなだれ込む、それを騎士団が迎え撃つ、敵軍の脇腹に突撃をかけて乱戦に持ち込んだ。

「神ヶの砦展開。
アースガズル」

フェリオ君のスキルの一つ神ヶの砦を展開する、目の前に不可視の神壁が出現しあらゆる攻撃を無力化する。

「ぐつううつ！」

爆発の衝撃が神壁に遮れるが相殺仕切れずに衝撃が伝わる。

>フェリオ君無事？<

>はい、マスター。<

念話で互いの無事を確認する。

<此处は私が引き受けます、フェリオ君は敵の足止めをお願い！>

<了解です、マスター>

私は目の前の魔物達の殲滅を始める……大体一人当たり30体が目安だ……

「ミュラージュ・ウルフ隊隊長イリア・キサラギ参る！」

私は意を決して魔物達に挑む……フィーナ副隊長はりガティと戦闘に入ったらしい、私も今は自分の出来る事をするだけだ。

フィーナ・ローズウッドSide

リガティ……エウレニア帝国の飛翔將軍油断出来ない相手だ……

氷の槍を互いに投げつける、向こうが空にいたので当たらない……しかし黙ってやられ放しでは済まさない。

「流石は氷結天使のフィーナだなっ。」

「私を知ってるの！？」

氷の短槍をかわしながら叫ぶ、飛翔將軍リガティが私ごと小物を知ってるなんて……以外と世界は狭いものね。

「君の主アルバート皇太子とは一度手合わせをした……中々の人物だった……残念だその時に君の話を聞いていた……」

攻撃が止むが隙が全く無い……しかし負けて良い相手ではない。

「アルバート様が私の事を？」

「ああ……将来が楽しみだと言っていた……さて、君の本当の実力を見せてくれ。」

変わった方だ、いやお互い様かも……並ば私の全力を出そう……でないと彼女はもちろんアルバート様にも失礼だ……

「分かりました、本気で行きます。」

シューティング・スターを両手で構える……彼女の雰囲気が変わる……どこと無く私に期待しているのだろ……

氷の短槍をかわし、撃ち返すまるで……一日中彼女と戦ってる気分だ、しかし翼に狙いを定める……これで決着をつける！

「貰いましたーっ。」

彼女の翼を撃ち抜いた、高度が低かったので地面に墜落仕掛けたが何とか降りてきた。

「うつく……翼が使え無くて……」

「いいえ……終わりです。」

私はシューティング・スターを構え彼女に宣言した……既に戦闘はこちらに流れつつある……此処が終われば次は「ヘカトンケイル」だ……

リガティ Side

確かにフィーナ……彼女の言う通りだ……もう戦える兵は数える程しか残っていない……

（リガティ……絶対に死ぬな……勝手に死ぬ事は私が許さない。）

アルゼリアス様……我等の主の言葉が胸に突き刺さる……

「……総員直ちに武装解除せよつ、そして私を含め大聖堂騎士団に投降する！」

凜とした私の声がこだまする……私は飛翔將軍の最後の務めを果たした。

「分かりました降伏を受諾致します。」

フィーナ・ローズウッドはエルザリア紋章公国式の敬礼で答える。

ロイル皇王も愚かな暴君だな……彼女が自分に見向きもしない……くだらない理由で、反逆者に仕立て上げ自身の首を絞めている事に気づかないとは……

救出艦隊旗艦「ヴォークリンデ」

カール・フォートフェルトSide

紋章機関に多少の無理をさせて此処まで飛ばして来たからのう、帰りは歩きかも知れんな……等と冗談を考えていても始まらない。

「閣下、間もなく目的地が視界に入ります。」

「わかった、モニターに出してくれ、それと臨時司令部に連絡はつかんか？」

やがてモニターに酷い有様が映し出される……まさに地獄絵図じゃない……デスプリンガー級地上戦艦が三隻が爆発炎上中で陸戦部隊は、まるで子供見たいに右往左往している、エウレニア帝国軍はヘカトンケイルが正面に向かって来ている。

しかし……ちと厄介じゃのこの大亀は、しかし頭を潰せばどうでもなる。

「各艦紋章砲発射用意、本艦の連装式紋章砲の発射を合図にヘカトンケイルに、叩き込め！」

「了解、全艦紋章砲発射用意、繰り返す……」

しかしヘカトンケイルの背中の生体レーザー砲が光り輝く……その

時、右の山の上から一条のエネルギー弾が甲羅ごと砲口ごと吹き飛ばす。

「！……今じゃ攻撃せよっ。」

六隻の空中紋章艦の一斉射撃で、ヘカトンケイルの頭部が吹き飛び、そのまま前に倒れ込む。

「フム、厄介な亀は何とかなったな……それはそうと今の……攻撃はどの部隊からじゃ？」

「いえ、味方部隊で戦っているのは、大聖堂騎士団だけです……」

（では……一体誰が？）

そんな事より今は、この混乱をどうにかせんとな。

「敵に降伏勧告を味方全軍に直ちに戦闘停止命令と救援物資の投下を急げ！」

「ハッ、了解です。」

救援艦隊の攻撃によりヘカトンケイルは倒れた。

なおあちこち戦闘は散発的に続いていた……しかし降伏勧告と停戦命令が出され戦闘は次第に終息していった……

??? Side

さて、きわどい流れだったけど間に合って良かった。

「うん、フェリオ君頑張ってるな……彼等えの手助けは……大丈夫だな、ヴァイン副局長に挨拶するでしょう……久しぶりにフェリオ君の顔も見れるしね」

黒衣の少年は大聖堂騎士団の本隊に足を進めて行く……

その頃騎士団にようやく増援が遅れてやって来た。

神薙綾人 Side

たつく馬鹿のせいで増援に行くはずが、残務処理に変わっちゃった……やれやれだぜ、その時、ハリアー輸送機のパイロットが俺に話し掛ける。

「神薙少尉、間もなく騎士団司令部に着きます。」

「ああ……わかった、所で俺達に指示は？」

別の兵士が俺の問いに答える。

「少尉はミュラージュ・ウルフ隊に出頭せよとの辞令です。」

ミュラージュ・ウルフか……そう言えば、ライラバル兼先輩のエレノアさんも配属だったな……

やがて輸送機は垂直に地上に着地する、俺はミュラージュ・ウルフの作戦ポイントを聞こうと現場の兵士に尋ねる、しかし返ってきた答えには正直驚いた。

「あのエレノアさんが、倒れただって!？」

「はい、自分も信じられませんよっ、此処だけの話しで……あくまでも噂何ですが……」

その噂も俺にとっては信じがたい物だった……

「コレス少佐が……」

「国防軍のダチの話しです……間違い無いそうで……」

歯切れが悪く答える兵士正直、あの無能親父の元に配属なんて何かの冗談としか思ってたが……

「エレノアさ、いや参謀は？」

「第10救護所です……」

「ありがとう、直ぐに行くっ。」

俺は直ぐに第10救護所に向かった……

エレノア・アリアドネSide

「うつ、うつ……ん。」

「エレノア中尉、意識が戻られましたか？」

頭が……ズキズキしとる……まるで二日酔いや……身体も鉛の錘でも張り付いてる、みたいや……此処は……野戦病院か？衛星兵に尋ねる。

「うちが……倒れてどれ位経ったんや？」

「まる三日間です、覚えていませんか？」

まる三日も寝込んだっただやて！？

「せ、戦況は？戦いはどうなったん？」

「お、落ち着いて下さい！説明しますからっ。」

気が付けば、衛星兵の両肩を激しく揺さ振った、彼女に自分の

非礼を詫びる……そんな時意外な人物がうちの前に現れた。

「よっ、久しぶりエレノアさん。」

「あ、綾人！？どうして此処におんねん？」

確か……今は補給隊に居たはずや……それに……うちの思考を遮って綾人が説明する。

「まず、戦いはミュラージュ・ウルフのフィーナ副隊長の活躍と、フォートフェルト准将の増援がきて辛勝でこっちの勝ち、それから俺が此処に来たのは司令部の命令で訳け。」

「国防軍の敗残兵は？」

「勿論生き残った連中はギザまで撤退中。」

そうか……無事生きて帰った連中もいたか……

「そうそう、これエレノアさんのボーイフレンドさんからの贈り物」
「」

うちに、ボーイフレンド！？だ、誰や？そんな命知らず……

渡されたのは、綺麗な紙箱と手紙が一通だけ……贈り主は……ガレスからや。

「確かに渡したぜ、ああ、それと俺も一言だけ、少佐の事は残念だが、エレノアさんは生きてる、そして生きて彼氏の所に帰る必ず……なっ。」
「」

「／／／。それ綾人……アンタうちに気い使ってくれてんの？」

相変わらず、この男は掴みづらい奴や……

「じゃ、俺は退散するから、エレノアさん……」

「綾人、何や？」

「騎士団本部にもどつたら、【燃え】と【萌え】の討論会やろつぜ
」

「アンタらしいな……」

うちに背を向けて片手を振って救護所を出ていく綾人、彼なりに励ましてくれたんなや……手紙に目を通す……内容は以下の通りや。

手紙

『エレノア……済まない本当ならもう少し早く渡したかった。』

（ガレス……なんで謝るん？）

『その……お前の誕生日に渡すつもりで造っていたが……遅れちまつた……本当に済まん。』

（うちの誕生日？）

紙箱を開けて見ると中には綺麗な木製のネックレス風の鳥の飾りがあった。

『その鳥の首飾りは、幸運のお守りだ、今の……いや、これからも必ず必要になる、そう思ってた……俊とか言う男が俺の所に来てこつそり教えてくれたので、急いで造った……もし俺に出来る事が、あるなら迷わず俺も頼れ、後無事に帰って来い。』

ガレス

「／／／。アンタ……本当に不器用だな……」

手紙が霞んで見える……自分でも泣いてるのが解る。

「ええよ、アンタが待つなら、うちも必ず帰ってアンタの想いに答えたる。」

さて、皆に心配掛けたし俊にも、い・ろ・い・ろ教えて貰わなあかな。

ミユラージュ・ウルフ隊前線司令部

神薙俊人Side

さて、イリア隊長に挨拶を済ませて、我等がアイドルのフェリオ君に特製のお菓子を披露した。

（イリア隊長は最初は、不満そうだったが、俺が料理店で店の親父に仕込まれたと話したら、急に野菜のお菓子をフェリオ君に頼むって言われたから、頑張って造ったぜ。）

ちなみにお菓子はキャロットケーキやパンプキンクッキー等だ、楓にもレシピを教えてやる約束があるし……意外だったのがイリア隊長が俺に料理の弟子入りをしてきたな……よし教えて早く上手になつて貰おうと……

「綾人さんどうかしました？」

「いや、それよりお菓子美味しいか？フェリオ君。」

「／／／。はい、美味しいです。それから名前は呼び捨てで良いです。」

よしよし本部の皆えのお土産……フェリオ君のお菓子美味しいの笑顔写真を早速隠し撮りだぜ！

「綾人！ちよつとお話ししようか？」

「げっ……」

フェリオSide

綾人さんが、笑顔だけど怖いエレノアさんに猫掴みで連れて行かれました。

「でも、美味しいですこのお菓子」

これなら僕の嫌いな野菜が好きになりそうです〜

エレノア・アリアドネSide

綾人を引つつかんで、人気の無い部屋にほつり込む……此処やった
ら邪魔は入らへん。

「綾人……お惚け無しで、聞かせてや？」

「やっぱり、バレタ？」

俊は悪く無い……けど……

「うちが納得出来る答えだしてや……」

コレス少佐の件でへこんでる所にガレスの贈り物の件や……サプライズを利かせてうちを元氣付けた綾人を責めるつもりなんて無い……

「手紙の日付がおかしいから？」

「うちがもう少し、舞い上がってたら気付かんかった。」

手紙の日付は昨日やうちの誕生日は今日や……ガレス、アンタ芝居下手や。

「ガレスさんは、俺の提案に乗っただけだ。」

「せや、コレス少佐の事はアンタが誰に聴いたかは別にかめへん……何でこんな芝居打ったん？」

俊に何時ものチャラチャラした空気は無い……真面目な雰囲気や。

「エレノアさんに早く立ち直って欲しいから……かな。」

そっか……

いきなり、綾人の手がうちの頭を優しく撫でる……

「／／／。……て、子供扱いすんな……」

「しない……慰めるのは、ガレスさんに頼んだら？」

「わかってる……長くなるけどガレスがうちの所に来たら……思いっきり甘えるわ……」

うちが甘えて良いのは、綾人ではなくガレスだけや……、ありがとうやで

しかしこの後、綾人はミュラージュ・ウルフの全員に声をかけて、誕生会を開いてくれたや……

綾人の手料理やお菓子のフルコースで賑わったな。

やっぱり侮れない奴やで綾人は……

第15 撤退戦（後書き）

次回頑張ります。

誤字を修正しました。

番外編：エレノアさんの誕生会（前書き）

大聖堂騎士団がPV5001のヒット数になりました。

そこで前話の物語の番外編を書き加えました。

これからも本作品を宜しくお願いいたします。

少し描写を変更しました。

番外編：エレノアさんの誕生会

エレノア・アリアドネSide

さつき頭にきて綾人に八つ当たりに近い事したなあ……ハア……ッ。

（はあ……うちを励ましてくれた、綾人にあんな仕打ちしたんや……綾人怒ってるやろな……）

つい考えこんでしまった、綾人の性格やから、何時も見たいに『エレノアさん』モフモフの素晴らしさ、教えてやるよ』

『じゃあ、うちは燃えの素晴らしさ教えたる！』と言ったからな……うちが雲隠れしたら後でがっかりされるのも後味が悪すぎる……

あかん、此処で皆に背を向けて逃げ出したら……綾人に悪いし、何より皆に申し訳が立たん……

指定された場所は、地上戦艦ティアマトの食堂や……しかも、うちに拒否権は無い。

「／／／。此処で悩んでもうちらしく無い、それにささやかやけどせっかくのうちの為に開いてくれた誕生会や、楽しまんとか皆に悪いわ。」

そんな時フィーナ副隊長に、ばったり会ってしまった……彼女と視線が合う……

「エレノアさん、どうしたのですか？」

「いや……副隊長……その……」

フィーナ副隊長の顔が不適な笑みを浮かべる……うちは蛇に睨まれたカエルや……

「な・る・ほ・ど」

「な、何かなるほど……なんよ副隊長？」

うあつ、あ、あんた……いつの間に悪人顔出来る様になったん？そう普段の愛らし笑顔が消え、副隊長の顔は……うちがワルを尋問する時の表情^{かお}や……

「エレノアさん、今、貴女は迷っていますね？」

「／／／。ふ、副隊長……あんた、うちの心が読めるんか？」

なんでニヤリとなるねん？なんで……うちの腕掴むねん？

「エレノアさん、皆さんの所にご案内しまーす」

「愉しんどるやろおおつ、あんたあああつ！」

ぐいぐい引つ張って行く我等のフィーナ副隊長……

以前彼女を修練場に引つ張って行った意趣返し？いや……マジで愉しんどる……そここうするうちに目的地に着いた。

「うふふ、もう逃げられませんよエレノアさん」

「確かに、逃げたらあかな。」

（この、小悪魔娘……）

「じゃあエレノアさんは此処で待っていて下さい」

さっきまでの黒い笑みが消え、楽しそうに副隊長は食堂に入って行った。

「すーう、はーっ、すーう、はーっ、」

（よし気分は落ち着いたな……綾人がどんなサプライズを仕掛けても、もう大丈夫や！）

意を決して食堂のドアを開ける……

クラッカーと紙吹雪にくす玉………うちは動物園にやって来たパンダか？おまけに垂れ幕に『祝エレノアさんお誕生日おめでとう！』と書かれてあった。

「ノノノノ。綾人くっいくら何でも、これやり過ぎちゃう？」

「そんな事はないぜ、エレノアさん」

「そいそう、新人の配属祝いと副隊長の誕生会を兼ねてだからね」

新人歓迎会と兼ねてる？よく見たら確かに新人歓迎会の幕もあった……でもこのノリは……昼頃テレビ番組のバラエティーでやってるのと同じノリやないか？

「綾人……それに皆ありがとうやで、／＼／＼。」

「誕生日おめでとう」

「お祝いしちゃうゾ」

「「おめでとう」」

と新しく配属された、ミカ隊のメンバーを始め全員が祝ってくれた。

「そじゃあ、次ぎは新人歓迎会だ！各自自己紹介をお願いするぜ！」

いきなり綾人がマイクをどっから持ち出して来た。

そして自己紹介が始まる。

「僕はアルト・ファルゼス小尉です、宜しくお願いいたします。」

「／＼。わ、私はリフィア・ワード小尉です、よ、宜しくお願いいたします／＼。」

「私は〱楓曹長ですう宜しくお願いします」

「私はアリシア・コードウェル小尉です。よろしくお願いします。」

「……私はレイラ・フォーエル小尉……よろしく」

「オレはスコット・ベール準尉ス、以後よろしくス」

「アタシはシルビア・フオート曹長だよろしくな」

「自分はレイス・マカリスター軍曹であります、よろしくお願いします」

「ぼくはジャック・フォルト伍長です、よろしく」

「私マリABEL・アミュレット小尉だよろしくな」

「俺はロバート・ミューラー曹長だ、此処は変わり者だらけだから気楽にな」

「おれスミス・ジェス伍長だぜ、よろしく」

「私はフィーナ・ローズウッド中尉です、この隊の副隊長をまかされています」

「うちはエレノア・アリアドネ中尉やこの隊の参謀を勤めとる、よろしくな」

「僕はフェリオ・キサラギ伍長です、よろしくお願いします」

「私がイリア・キサラギ中尉です、このミューラージュウルフ隊長をしています」

「元国防軍のミカ大尉ですよろしく」

「私はルイセ曹長ですよろしくお願いします」

「あたしツバサ小尉よろしく」

「僕はアレク准尉ですよろしく願いします」

「ボクはフィル小尉ですよろしく願いします」

「アタシはルフェ准尉ですよろしく願いします」

ミカ隊のメンバーのルフェ准尉は、はぐれいた所をフェンリル・ナイトに保護されとって、こちらに配属された、兄貴のフェイも喜んでいたし、本当によかったで……

「では、此処で主賓のエレノアさんに皆さんにご挨拶をお願いします」

綾人ーっ！うちに振るなーっ、ただでさえ……色々皆に迷惑掛けたのに……皆が見てる……うちに退路はないんやな。

綾人からマイクを受け取る全員の注目がうちに集まる。

「／／／。えーと、うちがご紹介にありました、エレノア・アリアドネです……とにかく皆ありがとう……そして我が隊によっこそ！ミカ隊の皆さん、これからもよろしくやつ。」

拍手が起こる……ふと食堂の奥を見るとコレスが居た……目線が彼と合う……何やうちに別れを告げに来たんか……アンタらしいわ。

（コレス……ゴメン……うちアンタを助けられなかった……）

『いえ……エレノアさん貴女は十分頑張ってくれました……あの時も、攻撃の巻き添えになった兄を必死なうって助けようとしてくれた……』

（違う！うちは彼等を見殺しにした、罪深い女や……）

『また、そうやってご自分を責めて……貴女の仲間やイリア隊長に、罰として、エレノアさんの秘密全部、話しましょうか？勿論夢の中ですけど。』

（せやな……今のうちは隊長や皆が居てる……）

『ガレスさんだけですよエレノアさんが、甘えて良いのは』

（うん……そうする……）

彼と話してるうちに目が霞んで来た、多分泣き出すやろな……そんな、うちにコレスは微笑んで別れの言葉を口にする。

『じゃあ俺は先に逝きますね……向こうで再開しましょう、でもエレノアさんはお婆さんになってガレスさんと一緒に俺に合いに来て下さい。』

（ああ……誰か分からん程歳とつたら会いに行くいくわ……さようならやコレス……）

『ええ……さようならです……エレノア……さん』

コレスの姿が消えて行く……綾人が心配そうにうちを覗き込んでる

……

「エレノアさんどうかしたのか？」

「ゴメン……少しぼけつとしてた、さあ、ささやかなやけど歓迎会と誕生会楽しもやつ！」

皆がコップを持つ……ビッシと決めたる。

「それじゃあ乾杯ーっ！」

「「かんぱーい!!」」

勿論酒を飲める組とジュース組に別れてる。

うちは、まだ飲めん組や当然フェリオはジュース組になる……隊長は……飲むんやな……まさか酒に強いとは思わなかった。

しかし楽しい会に綾人はやってくれた、得意の手品で楓・フェリオを始めて、てミカ大尉までぐっちなみに、手品と言うのはうちの主観や……一体どっからか、油揚げや肉に猫じゃらしにボール、あつ、足型取るために色紙まで出した。

「アハハッ、綾人らしいわ」

「ノノノあーっ、フェリオ君、大好きなお肉、ヒック、貰ったからって色紙に、ヒック、お手しない！ノノノノ」

隊長……酔ってやね……ロバートさんが隊長に話し掛ける。

「イリア隊長、何だったら俺達が隊長の話し相手になるのか？」

「ヒック、ノノノロバートさん、ヒック、あんな訳分かん無い男にフェリオ君盗られたーっ！うあゝんノノノ」

「ロバートさん、僕も隊長に付き合います。」

アルトとロバートさんが互いにアイコンタクトでやり取りをする。

（すまねえ隊長補佐殿）

（いえいえ、たまには息抜きも隊長に必要です）

すっかりトラ化した隊長を、なだめに入るアルト達を見送り視線を綾人達に戻すと、綾人が手品で会場をさらに盛り上げている。

トランプにハンカチに鳩まで……綾人アンタその内プロになれるな……見事や

楽しい歓迎会とうちの誕生会ありがとう。

番外編：エレノアさんの誕生会（後書き）

次回本編に戻ります。

これからも物語は、まだまだ続きます。

次回本編頑張ります。

内容を変更しました。

第16話『天空の玉座』（前書き）

戦闘のイメージは映画インデペンデンスを参考にしました。

番外編のシリアス部分をこちらに写しました。

描写を修正しました。

第16話　天空の玉座

エウレニア帝国ギザ方面地上進攻軍とヴルゼリア公国・ドラグニア帝国連合軍の戦闘が繰り広げられている頃……

ドラグニア帝国空中防衛艦隊

第10分艦隊旗艦「レッドドラゴン」

ミネルヴァ Side

私はこの艦隊の参謀の一人として旗艦に乗り込む事になった……作戦前に戦隊司令に呼ばれた、今後の打ち合わせだろか……

「ミネルヴァ・V・アースロイル少佐ただいま出頭しました。」

司令官室のドアを開き、部屋の中に入り敬礼をする、中には初老の上級士官が目の前に居る……グスタフ・クライツェン准将だ。

「忙しい所済まん少佐。」

「いえ、所でご用件は何でしょう？閣下。」

閣下と我が一族とは長い付き合いだ、しかし今は作戦行動中だ、茶飲み話に呼んだのでは無いだろ……

「さて、用件だが……これが司令部から届いた。」

閣下は、そう言って一通の封筒を私に渡す……封を開けるとやはり……

「異動命令……ですか？」

「そうだ……と言っても畑違いだな。」

畑違い？作戦情報部だろうか、全く余計な事をする実家だ……

「……大聖堂騎士団にですか？」

ウムと頷く准将、しかし気になる私は彼等の事は知っているが……向こうは私の事は知らないはず……

「実は、この件は私が君を推薦した。」

「……！？」

正直驚いた……まさか閣下直々の推薦だとは、しかし何故私を？

「君の為だったか、少し余計だったかな？」

「私の為？」

その時、作戦開始のアラームが鳴り響く、無駄話は此处までのようだ、私は准将と共に艦橋に向かった。

天空の玉座」

アルゼリアスSide

ドラグニア帝国はやはり艦隊を繰り出して来た、ヨルムンガンド級を50隻にアーク・エンジェル級空中空母を20隻そして通常艦隊を500隻……妥当な判断だな。

「この、玉座を攻め落とすには数が少ないですね？」

「数より質と言う事もある、まずは向こうの出方を見よう。」

さて、大陸最強の空中艦隊の実力を見せて貰おうか？

ドラグニア帝国空中艦隊」

総旗艦【バルバドス】」

ブレフ提督Side

「全ヨルムンガンド級は全艦、紋章砲発射準備用意！」

「ヨルムンガンド級は全艦紋章砲の発射体制に移行……」

「全艦艦体固定」

「安全装置解除まで約15秒……カウントダウン継続」

「発射秒読み開始……5・4・3・2・1、今です!」

「全のヨルムンガンドは紋章砲を発射せよ!」

「全ヨルムンガンドは攻撃開始せよ!繰り返す、攻撃開始せよ!」

50隻のヨルムンガンド級から紋章砲が放たれる、しかし命中直前にシールドに阻まれ水面の波紋の様に、エネルギー弾が弾かれる。

ミネルヴァ Side

馬鹿なっ……50隻のヨルムンガンド級なら、ちょっとした半島位軽く消し飛ばす事が出来るぞ……それを無力化……だと。

「司令部より入電へ直二、全艦八対要塞戦二移レ」以上です。」

「オペレーター司令部に返信了解したと伝える」

「ハッ、了解です」

全艦が雲に紛れて要塞に近づこうとした時、本隊目掛け敵要塞砲が放たれる！

瞬く間に100隻の艦艇が消滅する……まさに悪夢だ……

「敵艦隊接近！」

「各艦、各個に応戦せよ！」

一斉に敵味方共に砲撃を始める……前線勤務に志願した事に後悔は無い……しかしこれ程凄まじい戦いに成るうとは……正直思わなかった。

「敵艦の主砲弾来ます！」

「シールド展開、急げっ」

「ダメです、間に合いません！」

「各員衝撃に備えよ」

激しく艦橋が揺れ私は床に叩き付けられて気を失った……

ミネルヴァ Side

「うつ……」

一体どの位気を失っていたのだろ……ブリッジ内を見渡すとグスタフ・クライツェン准将と艦長や副長が倒れている……三人とも即死だった……旗艦の中で私が最高責任者になった。

「全艦……に連絡……反撃をしつつ空域を離脱せよ……」

今のうちに戦力の立て直しをしなければ、確実に袋だたきに合う……牽制しながら後退命令を出す。

「オペレーター……各艦隊の状況は？」

ブリッジ内の混乱も終息し、なんとか体勢を立て直す……しかし敵の艦隊が圧倒的に優勢だ。

「指揮下の36艦の内健在なのは26隻です。」

戦況図からも敵の反応が圧倒的に多い……味方も、もはやこれまでと判断し各自撤退を開始している。

「敵艦隊、我が艦隊に向けて接近中！」

「牽制しながら退却を優先せよ！」

付け込まれない様に、全艦隊の速度を一定に保ち タイミングを見計らい無事に撤退しようとしたら敵の航空機が迫って来る。

「対空砲火、迎撃急げ！」

「了解、対空砲撃ち方始めっ。」

各艦から機銃の雨嵐が敵戦闘機に向かって放たれる、「レッド・ドラグーン」に向かって敵機が迫って来る弾幕の雨嵐の中を三機が突っ込んで来るが二機が撃ち落とされ、一機がミサイルを放った。

「敵のミサイルを撃墜してっ！」

「ありったけ前に叩き込め！」

ブリッジの防弾シールドを下ろすその直後前方でミサイルが爆発した、衝撃で激しく船体が揺れる。

「被害は!？」

「被害は、ありません」

今は雲の中からの伏兵だった……向こうにもかなりの将がいる様だ……やがて通信が回復した。

《レッドドラグーンそちらは無事か?》

「ハッ、クライツェン准将閣下・バーゼル艦長・ルフト副長が戦死されました……今は私ミネルヴァ・V・アースロイル少佐が臨時指揮官として指揮を取っております。」

今の状況を簡潔に臨時指揮官に説明する……この敗退で我が空中機動艦隊は、しばらく大規模な作戦は出来ない……この事を上に報告して今後の方針を決めなければ為らない。

ミネルヴァ Side

あの敗退から一ヶ月が経過した、あの敗退から一ヶ月が経過した、そして今私に異動命令が下された、人事部のカイト中将が本題を切り出す。

「さて、ミネルヴァ少佐、君には大聖堂騎士団の特務部隊に行つて貰う事になった。」

「はい……」

事実上の厄介払いか……と思わず顔に出る、しかし意外な答えが返ってきた。

「何か誤解があるようだな、少佐？」

「誤解……ですか？」

「大聖堂騎士団は現在慢性的な人手不足だ、そこで各同盟国から優秀な人材を出す事になった、サラ將軍については知っているな？」

サラ・フェンリル……半魔人の女將軍だ元は、旧ドラグニア帝国の四將軍の一角を努める魔族の將軍の名称だった……魔龍將軍・魔獣將軍・魔狼將軍・そして……飛天將軍しかし長い歴史の中でほとん

どの一族は廃れ今や形だけの存在だった。

「サラ將軍が現れるまで魔狼將軍の座は文字通り空席でした……」

「その通り……他の三將軍の席は永久に空席だな、まあ我が帝国には魔族の皇帝や將軍はもう必要としない……」

カイト中將が私を見据える、そして静かに言い放つ。

「君の意見に不満を漏らす者が多数居る……戦況は君のレポート通りなのにな。」

「……」

「名目は厄介払いだ、しかし騎士団なら話は別だ。」

「私のレポートの内容の正しさを証明せよ……ですか？」

「話しは以上だ」

無言で敬礼をして人事部を後にする。

さてランス提督に別れの挨拶をしておくか……

私は提督の執務室に向かう事にした。

大聖堂騎士団内独房

リガティ Side

私は投降した後騎士団の治療を受け、この地上戦艦の割り当てられた個室に居る。

外の見張りが誰かと話している……声からして女が無用心だな

……

「困ります、エレノア参謀殿。」

「ええやん、中の彼女に少し話したいんや、書類は後日渡すさい……」

エレノア……だと！ミューラジュ・ウルフの女参謀か？しかし……私の尋問だろうか？やがて扉が開く……

「うちは、エレノア・アリアドネ中尉や無礼を承知で聞くで、アンタが飛翔將軍リガティか？」

「そうだ……エレノア参謀」

「そこに座ってかまへんか？」

「勝手に座れ」

変わった女士官も居たものだな……普通ならもつと高圧的に尋問す

るのだが、彼女は席に座り私に視線を向ける、しかしその視線は敵意とは違う物だった。

「アンタ喉渴いてへんか？」

「別に渴いていない。」

そっか……といって彼女は隠していた水筒を出す……毒？逸れとも白剤か？

部屋に用意されていたコップに……いや、自分のコップに先に注いで半分飲み干す……

「どうや？変な物は入れとらんで」

「……その用だな」

私のコップに中身を入れる緑色の飲物だ、確か東洋で【抹茶】と呼ばれていたな。

「先に言つとくでかなり苦いんやそれ」

「知っている」

確かに苦い……普通は【お茶菓子】を飲んだ後食べるのだが、生憎彼女は用意していなかった。

「この抹茶は、コレス少佐が、是非飲みたいと言っていた物んや」

「変わった男だったんだな」

コレス……アンドリユー・コレス少佐か……東洋の【将棋】やチェスが得意だったらしい……

「エレノア……君は敵討ちに來たのか？」

戦死した者の名前を出す時は敵討ちか弔いの二つしかない。

「そんな時代遅れの真似なんかせえへんよ」

「そうか……なら何故」

「アンタ等、国防軍と裏で繋がってへん？」

敵と裏で？なるほど、それが聞きたいのだな。

「そうだ……確かに協力者は居る。」

「誰なん？」

彼女の目が鋭くなる……そうか……そう言う事か……なら答えは……

「復讐の為だけに來たのなら帰れ！」

と言ってやる……すると彼女は笑い出す。

「あはははっ、復讐やてせや、うちはコレスの敵討ちがしたいんや」

「その先にお前の未来は有るか？エレノア！」

つい叱り付ける口調に代わっていた……彼女の笑い声は明るいしかし……

「アンタも、うち等の隊長と同じ不器用な人だな」

「命を粗末にするよりマシだ」

すると今度は真顔になって私を見据える。

「うちの復讐はコレスが怒るけど、哀しむ様な真似は絶対にせえへん！」

バンと両手で机を抑えるその両手が僅かに震えてる……

「どんな内容だ、君の復讐は？」

「あの時ヘカトンケイルが陥没したな、そんな中途半端な爆破であれが止まる筈が無い！詰まり……そう言う事や」

「我々だって、あんなふざけた作戦は立てない」

詰まり内通者が小細工した事だ……しかし教える前に彼女の真意を聞く必要が有る。

「その目は肯定やな、まずアンタ等に裏切った相手のリストをこちらで作る、それが終わったら連中が行動に出る前に全員を捕まえる……それがうちの敵討ちや、納得したか？」

「分かった、しかし私を責めないのか？」

「アンタは真つ直ぐな武人や、逸れにあの戦い、あれは一部の連中の独断やろ？ 違うか」

「そっだ……と思う、しかし詳しい事は……知らない」

「そっか……なら厭な話しはこれで終いや、後は……」

ニヤリとエレノアが笑う少し彼女を買い被り過ぎたか……？

「アンタの苦手なそうな話し……詰まり自分の事互いに話さんか？」

「はあ？」

この後私は彼女に、彼女も私にそれぞれの生い立ちを話し合った。

エレノア……よく分らん奴だ。

第16話 天空の玉座 (後書き)

次回頑張ります。

第17話『魔狼艦隊』（前書き）

更新が遅れて申し訳ございませんでした。

これからも執筆を頑張ります。

本作品をこれからも宜しくお願いいたします。

第17話　魔狼艦隊

カオス・フェンリルSide

さて俺は今辺境の警備に來ている、ミューラー・ジュ・ウルフの艦隊からも二隻が訓練を兼ねて臨時編成されている。

「全艦配置につけ」

戦況図を見ると全艦の配置が完了した、今回の演習の目的は、【ミカ大尉】と【神薙綾人中尉】の指揮官能力のテストだ、さてミューラー・ジュ・ウルフの実力を見せて貰おうか？

神薙綾人Side

割り当てられた艦艇を編成して、指定ポイントに向かうエレノアさんの期待に応えるために頑張っ、て、カオス副将に勝たなくてはいいない。

「まずは機動性の高い艦艇から片付けて行くか。」

《綾人の意見に賛成》

ミカ大尉を始め全員が賛成してくれた。

《では作戦開始》

「了解」

しばらくして仮装敵艦隊の動きが変わる、陣形を変えているのだ。

《じゃあ、こちらでも陣形を変更するよ》

「ああ、イリア隊長達は居ないけど頑張ろう」

やがて双方の陣形が完成した、向こうは槍の先に似た陣形を、こちらには三日月陣形だな……さて、カオスに負けない様に頑張らないと。

カオス・フェンリルSide

向こうは三日月陣形か、しかし突破すれば脆い陣形だな……よし一点突破するぞ。

「全艦一点突破だ！両翼は敵の両翼にぶつけるんだ」

「了解しました」

さて上手く行くと良いが……相手はあの二人だから油断出来ない。

先頭集団が敵と交戦開始可能な距離に近付く……

「今だっ、攻撃開始！」

「攻撃を開始します」

模擬弾の撃ち合いが始まる、今回の訓練は二人の評価試験も兼ねている、試験官としてはそう簡単に負けてやれないな。

神薙綾人Side

「ミカ大尉、今だぜ」

「りょーかい」

素早く艦隊を二手に分け左右から両翼を押さえに掛かる、向こうは一点突破を狙っていたので直ぐには対応仕切れない。

《全艦一斉射撃用意……斉射！！》

「撃ちまくれーっ！」

左右から一斉に攻撃を開始する、しかしカオス副将も素早く艦隊の体勢を立て直し中々勝負が着かない。

《よし、下から攻める！旗艦に攻撃開始！！》

火線が旗艦に集中しカオス艦隊旗艦の反応が消滅する演習終了だな。

その時緊急通信が入る、発信者は……【大和王朝国家】の王族専用儀礼艦「アマテラス」だって！？

《演習は直ちに中止して救難信号のポイントに向かう！》

「了解です」

《了解》

でも誰が敵対国家に来るんだ？もしかしたら亡命者が……いや、とにかく現場に向かう、そうすれば答えは解るはずさ。

大和王朝国家王族専用儀礼艦「アマテラス」

海原宗一郎 Side

いきなり問答無用で砲を向けて来るとは……非常識極まりない、横目で姫様に目をやる、不安な表情が浮かんでいる……しかしあのまま王朝国家に居ては身の安全は誰にも保証出来ない、だから姫様を説得して亡命をお勧めしたのだ。

俺は素早く姫様の方を向いて頭を下げる。

「このような、大変危険なお目に姫様を逢わせてしまって申し訳ございません……」

「海原司令官……詫びるのは、わたくしの方です……一族に相応しくない血を王族に混ぜてしまいました。」

しかし……あれは姫様の責任ではない、あれは王の身勝手な行動で姫様の母君を妻に娶ったのでは無いか、しかもまだ産まれたばかりの姫様まで自らの側室に迎えた……

「自業自得……」

思わず口に出てしまった……

「……紅姫」

彼女の蚊の鳴く様なつぶやきは誰にも聴こえなかった。

「通信士、こちらからの呼び掛けの応答は？」

「駄目です全く、ありません……」

敵は双胴爆撃機の「ヒュドラ」を改良した飛空艇「サラマンダー」四機で向かった来た、本艦の武装の火力は低い……機動性だけが頼りになる。

高速で目標に接近して機関砲やミサイルの雨嵐を浴びせる防空戦闘艇……機動性で逃げの一手だな。

その時通信士が別の反応の報告をする……

「大聖堂騎士団より入電！」

「降伏勧告か？」

「いえ、コレヨリ、貴艦ヲ支援スル……以上」

どういう事だ？欺瞞情報か？しかし連中は同士討ちを始め……いや我々を取り囲む様に展開しながら退避行動をとっている。

カオス・フェンリルSide

何とか間に合ったな、しかし……ブラッド・フェンリルもとうとう本性を現わしたか……

「しかしこのままでは、外交問題に……」

「仮に彼等を見殺しにすれば世界中から批難の雨嵐だ、また保護すれば襲撃と誘拐犯だな……つまり」

「我が国との戦争の口実が欲しいと？」

「多分な、良し攻撃開始つ、追いつただけでいい」

主砲がヒュドラを捉え砲撃を開始する、四機の内二機が被弾して一機が森に不時着する。

「アマテラスに、コレヨリ当該空域ヲ離脱スルと伝える」

「了解です」

その時ヒュドラが一機アマテラスに突っ込んで行く……まずい体当たりか！！

神薙綾人Side

まずい体当たりか！なら全力を挙げて防ぐだけだつ。

「各員、衝撃に備えろ！」

「は、はい」

アマテラスとヒュドラの間に割って入る、ヒュドラと激しい撃ち合いになった、そしてヒュドラのコックピットを撃ち抜く、ヒュドラは湖に墜落し爆発炎上した。

「ふう、本艦の被害は？」

「装甲が何枚かやられた程度で済みました。」

アマテラスを空港に誘導する、さて厄介な事になりそうだな。

エレノア・アリアドネSide

アマテラスの亡命騒ぎから二週間が過ぎた、ブラッド・フェンリルは雲隠れをして現在追跡中で、行方が全くわからん……リストにあった下っ端を捕らえて、白状させたらコレスは、いいように利用されたらしい……

アマテラスの方にはサクヤ姫がおられた、意外にも本人の意志で【亡命】したと言う事らしい……まあ、姫様ご本人に確認すれば解るやろ……

うちの一番の難題は……

「「何やーっ、こんな古文書解るかーっ！」」

「だから……漢字だって行ってるでしょっ」

「「カクカクしてて……ぐああっ！あ、暗号や……」」

「漢字です……エレノアさん……」

と、イリア隊長や皆……止めに……おかんがツツコム……おかんはサクヤ姫が『紅姫に逢いたい』と、うちの大和王朝時代の名前でうちを指名した……

だから……漢字の勉強中や……綾人は笑いながらも親切に教えてくれた、イリア隊長は大和王朝の国籍は無い……楓と清音とうちは永久に還れない国やでも、うちの国籍はまだ有るから……こう難儀してる……

そして、あの武官の女装束……はつきり言ったら退魔師や……他の皆が見たら、大爆笑やった……イリア隊長やフェリオ……は笑いをこらえていた、けど……爆笑やった。

（うちかて、あんな清楚な装束は、全く・これぼっちも、に・あ・わ・へ・ん・で！）

まあ……サクヤ姫や局長の為やからなっ、でなかったら……あんな服誰がきるかつ！！

そして、サクヤ姫との再会は一週間後に決まった。

第17話 魔狼艦隊 (後書き)

次回頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6777u/>

大聖堂騎士団員～イリア・キサラギの軌跡～

2011年11月4日15時20分発行